
同棲喰人鬼

代篠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

同棲喰人鬼

【Nコード】

N4640M

【作者名】

代篠

【あらすじ】

どこにでもいるような普通の大学生 小野塚信太郎。
そんな彼と同居している不思議な少女 グーラ。
血の繋がりもなく、さらに出会って間もないというのに同棲生活を営む二人。

しかも奇妙なことに、グーラは人間ではなく、『鬼』であった。
人間と鬼の同棲生活 二人を待ちつける困難とは、はたして……。

第一話

第一幕

「しんたるー、はらへったー」

俺がせっせと明日の講義の予習をしているという時に、能天気な同居人は、我が家のメインテーブル 四角いちゃぶ台の向こうで不意にそう言った。感情のこもっていないような、平坦で独特な喋り方だ。

「腹減ったじゃなくて、お腹空いた、だろ？ 女の子がそんな口の利き方するもんじゃないぞ」

「そんなのどっちでも同じだろー。それよりはらへったー。猫！猫食いてー！」

「駄目だ。約束したろうが」

この投げ出した足をバタつかせている居候を黙らせるために、俺は愛用のシャーペンをテーブルに置くと、引き戸一枚に隔てられた玄関兼台所へと足を踏み入れた。そして隅に設置してある小さな冷蔵庫を開けると、そこから市販の魚肉ソーセージを一箱分取り出し、バタバタとうるさい居候に向かって放って投げた。

「あーうー……またこれかー……」

「文句言うな。それも肉だ、魚の肉」

「あーうー……」

同居人がぶつくさと文句をたれながらもソーセージの外装フィルムを剥がしているのを確認して、俺は先程と同じ場所 テーブルを間に挟んだ彼女の向かいに腰を下ろした。

さて、ここらで自己紹介をしておこうと思う。

俺の名前は、小野塚信太郎。自分で言うのもなんだが、別に特筆することのない、普通の大学生だ。

そして、俺の向かいであぐあぐと魚肉ソーセージを食んでいるの

が、グーラ。この狭いアパートの一室で、俺と共に暮らしている少女だ。

先に言っておく。グーラはあくまで居候であって、カノジョだとか、そういう特別なものではない、断じて。

では、何故そんな何でもない女の子が、この俺と同居などしているのか？ その経緯を、今から簡単に話したいと思う。

あれは、もう二週間ほど前だろうか。

うちの近くで、道端に猫の死骸が捨てられているという事件が発生した。しかもただの死骸ではない。腹が裂かれ、臓物が飛び出した、とても凄惨なものだったのだという。

その時の俺は、気味が悪いとは思いつつも、自分には関係ないそう思っ、その事件には何の関心も示さなかった。

しかし事件のあった次の日 夜中にバイト先から帰ってきた時のことだ。

何やらゴソゴソと変な音が聞こえて、俺はアパートと民家との間にある路地裏を、何気なくフラツと覗き込んだ。そこで俺は、不運にも目撃してしまったのだ。

街でたまに見かけるような表面を染めただけのまがい物とは違う、ナチュラルなブロンドの髪。精気をこれっぽっちも感じさせない、土気色の肌。身に付けているのは、いたるところがボロボロの薄汚れた白いＴシャツと、簡素な女性用の下着のみ。年の頃は、たぶん中学生くらいだろうか。

そんな女の子が、こちらに背を向けながら、一生懸命にもしやもしやと何かを口に運んでいるのだ。

ここまで話せば、もうだいたいの想像はついたろう。

俺の存在に気が付いた女の子は、一瞬ピタリと動きを止め、それからゆつくりとこちらに振り返った。その口には、びったりと赤い液体が付着しており、手には おそらくもう息絶えているのだろ

う　ぐつたりとした様子の、腹を赤く染めた猫を掴んでいた。

そう。この女の子が、グーラだ。

この衝撃的な出会い　というより、遭遇か？　に、さすがの俺も驚きを隠せなかった。シチュエーションその他諸々全てが謎すぎて、本当に声も出なかった。

そんな俺に、グーラは言った。

「あーうー。だれだー、お前ー？」

状況にそぐわぬ間の抜けた口調に、俺は思わずハツとなった。そしてようやく、喉から声を絞り出した。

「お、お前こそ誰だ？　こんなところで……何やってるんだよ？」

「めしー」

「……飯？」

「んー。めし食ってるー」

そう言いながら、グーラは俺に見せびらかすように、手の上の猫を頭上に持ち上げてみせた。

それに対して俺は、得体の知れないものを見る目で、グーラを見ていた。当たり前だ。見た目からして変な女の子が、口元を赤く染めながら、猫を指して御飯だと言っているんだから。

「なー」

「あ……あ？　な、何だ？」

「マヨネーズくれー」

「……マヨネーズ？」

「んー、これに付けるー。猫マヨー」

「ねっ……！？」

とてつもなく不穏な単語にギョツとなる俺をよそに、グーラは「マヨー、マヨー」と、猫を空高く持ち上げたまま、その場でグルグルと回りだした。まるで邪神か何かを讃える儀式的な舞踊のようである。やってる本人はとても楽しそうだが。

そしてそんなグーラを、俺はどういうわけか、部屋に招き入れてしまった。

それは何故か？ そう問われると、少し返答に困る。俺自身、どうしてこの少女と関わろうとしてしまったのか、本当によく分からない。

でもおそらく……その他の感情、気持ちと比べて、奇しくも好奇心が勝ってしまったんだろう。

かくしてグーラを部屋に入れた俺は、マヨネーズを渡す前に、前は一体何者なのかと尋ねた。するとグーラはあっさりと、相変わらずの抑揚のない喋り方で答えた。

「グーラは、しょくじんきだー」

「……しょくじんき？」

喰人鬼。グーラが言うには、人だとか動物の肉を食べて生きる鬼で、人間ではなく妖怪。化け物の類らしい。

そんな返答をされ、俺も最初は、まさかと思った。鬼なんてものが現実に存在するはずがない。そう思った。

しかし、目の前の少女は確かに存在する。そしてその少女の情事を見てしまったのは、他ならぬ俺である。もはやこれは、いくら突拍子もない話とはいえ、信じざるを得なかった。無論、百パーセント信じたというわけではないのだが……。

「お前……もう、その……猫とか食うのは、やめろよ」

グーラの話信じた上で、俺はそう言った。なけなしの正義感というか……ふとした感じで出た言葉だ。

「あーうー？　なんでだー？」

「何でって……他の人の迷惑になるだろう？　別に猫を捕まえなくても、スーパーに行けば肉なんかいくらでも売ってるじゃないか」

「あーうー……グーラ、かね持ってるねー」

「……じゃあ、どうやって生活してるんだよ？　というか、親は？」

「おやー？　……しらねー。いつもは、公園とかで寝てるー」

どうやらこの若さで、ホームレス生活をしているらしい。どこかで聞いたような話だ。……まあもともと、あの芸人も、いくら何でも猫は食ってないだろうがな。

「……あーうー……でも、猫食うの、やめてもいいーよー」

「え？ いいのか、そんなあつさり……？」

「んー。そんなわりー、泊めろー」

「……は？」

グーラの言葉に、思わず俺は聞き返した。

「グーラ、雨きらいー。だから泊めろー」

「泊めろって……ここに？ 俺の部屋にか！？」

グーラはこくりと頷いた。

猫などの動物を捕食するのをやめるから、その代わりに居候させる。それがグーラの要求だった。

結果だけ言おう。俺は、この要求を呑んだ。

何故かは聞かないでくれ。俺も分からない。気が付いたら、勢いで承諾してしまっていたのだ。……夜遅くまでのバイトで、心身ともに疲れていたのかもしれない。とにかく俺は、この鬼娘と同居することになった。

それから二週間。

意外にも、こいつとの生活にはもう慣れた。俺の順応能力が高いのかもしれないが、何にせよ、人間、なんとかなるものである。ちなみにグーラがマヨネーズを付けようとしていた猫は、俺が責任を持って近くの公園に埋めてやった。墓標つきで。

「あーうー……。しんたろー、ひまー」

メシを食い終えたかと思えば、お次はそんなことを言い出した、この居候は。

俺は溜め息混じりに、シャープンをテーブルに置く。

「暇って……何だ？ 遊んでほしいのか？」

「んー。外、あそび行きてー」

外、か。当初、うちに住み始めて数日は、テレビに夢中で、部屋の外には全然出たがらなかったくせに……。ま、二週間もすれば、

さすがに飽きたのかな？

「それなら遊びに行けばいいじゃないか、勝手に。別に俺はお前を監禁してるわけじゃないぞ？」

「あーうー。場所わかんねー」

ん？ 場所ということは……ただ単純に外に出たいんじゃないか、どこか特定の所に行きたいのか？

「何だ？ 一体どこに行きたいんだよ？」

「えーとー……げーむせんたー」

「……ゲーセン？」

「げーせんじゃねー。げーむせんたーだー」

それからグーラは、げーむせんたーげーむせんたーと、手をブンブンと振り回しながら連呼し始めた。こいつなりに、駄々をこねているんだろうか、この仕草は……？

ふむ、それにしてもゲームセンターか……。えらくグーラらしくらぬ単語が出たな。話を聞いている限り、こいつはゲーセンとかカラオケだとか、そういう娯楽施設には無縁そうだが……。

「てれびで言ってたー。おもしれーとこだったー」

なるほど、テレビからの知識か。どうやらこの二週間で、現代文明の利器から様々な情報を得たらしい。

「あと、えーがかんとー、ですにーらんどー、いちまるきゅーとー、めーどきつさとー、ほすとくらぶとー、きゃばくらとー、らぶほてるとー、そーぷとー……」

……最後の方は、一体どんな番組を見て得た知識なのか……。とりあえずグーラ、後半は全てお前には関係のない場所だから即刻忘れる。

しかし、ゲーセンか……。まあそこなら、この常識はずれというか規格外？ の鬼娘を連れて行っても、きちんと見ていれば、特に何の問題もないだろう……多分。

「グーラ。それじゃあ行くか、ゲームセンター？」

「おー。行く行くー。げーむせんたーげーむせんたー」

「ただし今日はもう遅いから、明日、俺が大学終わってからな」
「あーうー。わかったー。ぜってーだぞー」
「ああ」

俺が頷くと、グーラは嬉しそう　なんだろう、多分。表情があんまり変わらないから分かりにくいけど　に両手を頭上高くに持ち上げて、当選議員よろしく、元気に二度三度と万歳を繰り返した。
……そういえば……こいつの服、どうしよう……？

第二幕

今思えば、今日ほど外出に適した日はない。

講義は　午後の講義が休講になったおかげで　午前につるだけで、バイトも入ってない。さらに天気は日本晴れときた。

せっかくのこの良き日を、ゲームセンターだけで潰すのはもったいない。ついでにユニ　ロにでも行って、グーラの服も買ってやることにしよう。いつまでも、あのボロボロのＴシャツだけというわけにはいかないからな。

「　それじゃあ今日はここで終わります」

唯一の講義もたった今、終わりを告げられた。さて、それじゃさつさと家に帰るとするか……。

「あの……お、小野塚くん」

「ん……？」

教室を立ち去ろうとしたところで不意に呼び止められ、俺は声のした方に振り返った。

「……木崎さん？」

俺は振り向きざまに、その先で立っていた人物の名を呼んだ。

彼女　木崎悠美さんは、俺と同じゼミに所属している同期生だ。だから何度も面識はあるのだが、逆に言うどゼミで数回会話を交わした程度の仲でしかなく、こうやって講義が終わった後に話しかけ

られるなんてことは皆無だった。

「何か用？」

俺の問いに、木崎さんは心なしか顔を少し赤くして、若干恥ずかしそうに体の前で組んだ指をもじもじとさせながら、小さくか細い声で答えた。

「あ、あのね……今日、午後の講義が休講になったでしょ？　それで、ゼミの皆で遊びに行こうって話になったんだけど……お、小野塚くんも行かないかって……」

「ああ、ごめん。俺、午後から予定あるんだ」

「え？　そ、そうなの？　あ……あはは。じ、じゃあ、無理だよね……ご、ごめんね、引き止めちゃって……」

「いや……。じゃ、また今度」

「あ、うん……またね……」

俺は木崎さんに背を向けると、そのまま教室を後にした。

……断る時の言葉が、少し無愛想だっただろうか？　また今度誘って、くらい言えば良かったな……。

「あーうー。おせーぞー、しんたろー」

大学から自転車をかつ飛ばして帰って来た俺を、グーラはそう言うて出迎えてくれた。その恰好は、いつものボロボロTシャツとパンスのままで。

「じゃー行くぞー。げーむせんたー」

「ちよっ……！？　待て、グーラ！」

元気よく玄関から外に飛び出そうとするグーラの服の襟を掴み少々乱暴になってしまったが　俺はその動きを止めた。

「あーうー？　なんだよー、しんたろー？」

襟を掴んでしまったことでシャツが首に引っ掛かったのか、グーラはほんの少し苦しうに首元を手でさすりながら、俺に対し口を尖らせた。その眉間には、珍しく皺が寄っている。

「そんな恰好で、行けるわけないだろ。服を着替えるのが先だ」

「きがえー？ グーラ、このままでいいぞー？」

「お前がよくても俺が困るんだよ。そんな恰好で出ていかれて、あらぬ疑いをかけられたら堪ったもんじゃない」

ただでさえ最近、世間はそういうのにウルサイからな。と、グーラには言ったところで分らないであろうことを口にしつつ、俺はグーラの手を引き、部屋へと入った。

さて……着がえとは言ったものの、こいつに一体何を着せればいいのか。当然のこと、女の子の服なんて持ってないしな。

「あー……とりあえず、これでいいか？」

俺はタンスから白のパーカーとジーンズを取り出すと、これに着がえろという言葉添えて、それをグーラに手渡した。

「あーうー。めんどくせー」

そう言いながらも、グーラはいそいそと今着ているＴシャツを脱ぎ始める。

もちろん、俺はすかさずグーラに背を向けた。いくらガキかつ人間じゃないとはいえ、女の子の着がえをマジマジと見るわけにはいかないからな。

「しんたろー、着たぞー」

その言葉で、俺は再びグーラに目をやった。

まあ、正直予想通りではあったが……パーカーとジーンズに身を包んだグーラは、これまた見事なまでに不恰好であった。

当たり前と言えば当たり前なのだが、全体的にサイズが合っていない。まずパーカーの袖からは手が出ておらず、異様なまでにダボツとしていて、襟からは肩が 普通に着れば見えるはずのない範囲まで露出されている。さらにジーンズもずり落ちて、まるで歌舞伎やら能やらで役者が穿いている、引きずるタイプの袴のようだ。

これは、どう考えても人前に出るような恰好じゃないよな……。

「あーうー。これならげーむせんたー行けるかー？」

「いや、ちょっと待て。……そうだなあ……」

さすがにこのままではおかしいので、少し手を加えることにしよう。

とりあえず、ずり落ちるジーンズだが　これは普通にベルトを使えばいいだろう。それでももって裾を折り曲げて……。パーカーは手の施しようがないな。まあ、ゆったりファッションということで大丈夫だろう、多分。肩が見えるのはセクシー要素と言うことで。……こんな細い身体にセクシーを感じる奴がいるのかは疑問だけれどな。

結果、ただ単にベルトを通して裾を曲げただけの手直しとなつてしまったわけだが……。まあ、もういいだろう。

要は、ユニ　ロなりシマ　ラなりに行って服を買い、そのままそこで買った衣料品をこいつ着させればいいのだ。今グーラが着ているのは、それまでの繋ぎにすぎない。気にしたら負けだ。……うん、これで行こう。

「じゃあ行くか、グーラ」

「おー。やっとかー、まったくー」

俺の気苦労も知らずに、グーラはそのままパタパタと玄関に向かって部屋を飛び出していった。

……。あ。そういえば、こいつの靴もないな。……仕方ない。適当にサンダルでも履かせよう。

第三幕

まず衣料品店に行つて、グーラの服を一通り揃える。そしてそれを着せたままで、こいつが行きたがっていたゲームセンターに向かう。これが俺の、当初考えていた計画であつた。

しかし俺のこの計画は、この鬼娘によって、いとも簡単に捻じ曲げられてしまった。

「ふくー？　そんなのいらねー。それよりげーむせんたーげーむせ

んたーゲーむせんたーゲーむせんたー！」

市街へと向かうバスの中、耳元でずうっとその単語を叫ばれ続けたのである。うるさくて堪らない上に周りからの視線も痛く、俺はとうとう最初にゲーセンに向かうとその場で約束してしまった。

こうして俺は、このわがまま鬼娘を、けったいな仮装のままデゲーセンデビューさせることになってしまったのだ。

はぁ……。つい溜め息が漏れる。何だかすでに疲れた。

「おおー！　これがゲーむせんたーかー！　でけー！」

俺達がやって来たのは、市内で最大規模のアミューズメント施設だ。中にはゲームセンターだけではなく、ボウリングやカラオケ、スポーツ施設もある。まあ、グーラが知ったら面倒だろうから、このことは黙っているがな。

「ほら、そんな入り口で突っ立てないで、さっさと入るぞ」

俺はグーラの手　　というかパーカーの袖　　を掴むと、それを引っ張って、グーラをアミューズメント施設内に引き入れた。

するとその直後

「おおー！　すげー！　ぴかぴかー！！　きらきらー！！」

施設内の煌びやかな室内照明に、グーラはそのどこを見ているのか分からないような目を、これでもかと言わんばかりにかっ開いて輝かせた。こんなものでここまで驚く奴も珍しい。

「しんたろー、すげーなー！　ぴかきらー！」

「まったく……何だよ、ぴかきらって……」

他者の目なんかこれっぽっちも気にせずに大声を発するグーラに溜め息をつき、俺はそのまま彼女をゲームセンターのエリアにまで引っ張っていく。

ゲームセンターには、お馴染みのゲーム　格闘ゲームやシューティングゲーム、コインゲーム等々　が多種多様に立ち並んでいた。しかし平日の昼間ということもあって客はまばらで、それ故にグーラの独特すぎるファッションは余計に目立っているように見えた。

「おー！ おー！ すげー！ すげー！」

グーラは平坦な口調ながらも興奮した様子ではしゃぐと、いきなり俺の手を離れ、そのままダツと走りだした。もちろん俺は、やれやれと溜め息を漏らした後に、歩いてそれを追いかける。

すると少し行った所で、グーラはふと立ち止まった。

グーラが立ち止まったのは、少し大きな目のクレインゲームの前だった。

一回二百円のそれの中には、赤いリボンを付けた可愛い猫のヌイグルミが五、六体入っていた。その大きさは四、五十センチほどあり、体重はリングゴ三つ分である。

そのヌイグルミを、グーラは目を輝かせながら、クレインゲームのケースに手を押し当てて、食い入るようにして見つめていた。

それにしても、ヌイグルミが欲しいとは……。変な奴だけど、やっぱり女の子なんだな、こいつも。

「あーうー。うまそー……」

前言撤回。こいつはただの変な奴だ。

「あーうー。しんたろー、これやりてー」

「……出来るのか、グーラ？」

「てれびでやってたの見たー」

グーラにせがまれてポケットから財布を取り出すと、俺はそこからさらに二百円を取り出し、グーラに渡してやった。

二枚の銀色に光る硬貨を手にしたグーラは、

「おー。これがひやくえんかー」と感心したように呟きを漏らし、それをゲーム機に投入した。

チャララーというゲームの開始音と共にクレインを操作するためのボタンが発光したのは、その直後のことであった。

「おー、すげー！」

ここに来てから何十回と繰り返したその言葉。そしてグーラは、えいっと、目の前のボタンを押した。

結果は……。まあ、言わなくてもわかるだろう。

「あーうー……ねこー……」

ケースにべったりと手を付けて、かなり無念そうに中のヌイグルミを見つめるグーラ。そんなグーラをしばらく見ていた俺は、いつの間にか小さく溜め息をつきつつ、財布からもう二百円を取り出していた。

「グーラ、こういうのはコツがいるんだよ」

言いながら、ゲーム機に硬貨を投入する。チャララーと、先程と同じ音が機械から流れた。

俺はひとつのヌイグルミに狙いを定めて、ボタンを押し、クレーンを動かした。

「この配置ならここを狙って……ほら」

次の瞬間、俺が狙いを付けたヌイグルミはクレーンによって浮かせられると、そのまますぐ横にある穴に転がるようにして落ち、景品取り出し口に姿を現したのであった。

「おー！ しんたろーすげー！！」

グーラはヌイグルミが落ちたのを見ると、そう言ってパチパチ

正確にはパーカーの袖同士がぶつかってバフバフ と、俺に向けて何度も手を叩いた。

一方、俺は一度しゃがんでヌイグルミを取り出すと、それを未だ拍手を繰り返しているグーラに、ポンっと渡してやった。

「……あーうー？」

グーラは、一体何が起こったのか分からないといった風に数回目をばちくりさせると、自分の手にあるヌイグルミと俺とを交互に見て、再び口を開いた。

「これ、グーラにくれるのかー？」

「ああ。大切にしろよ」

「あーうー……」

次の瞬間 俺が大切にしろと言った直後にも関わらず グーラはいきなりヌイグルミの耳の部分に、ガブリと噛みつきやがった。そしてそのまま、しゃぶるようにして唇をもごもごと動かす。

それから少しして、ようやくグーラはヌイグルミから口を離した。
「あーうー。まじー……」

「ったく……当たり前だ。それはただの布と綿なんだからな」
まったくお前は……。猫と見れば、何でも口に入れるのか。

するとその時、グーラはふと、珍しく俺に笑顔を向けた。もつとも笑顔と言っても、口の端を若干上げただけで、目は相変わらずどこを見ているのか分からないけどな。ぎこちない笑顔、という感じだ。

「あーうー。でも、ありがとー、しんたろー」

「……どういたしまして」

グーラはヌイグルミが食えないものだとなんと分かると、落とさないように、両腕でキュッと抱きしめた。

……こうして見ると、可愛い外国人の女の子って感じなんだがな……。まさかこいつが猫を貪り食う少女。しかも人間じゃない

「だなんて、誰が想像できるだろうか。」

「じゃあ、次はどうする？ 他に何かやってみたいゲームあるのか？」

「あーうー。しんたろー、おしっこー」

「……お手洗い、な」

ぽりぽりと軽く頭を搔くと、俺はグーラを連れて、トイレを探し求めて歩き出した。

少し歩いたところでトイレを発見したグーラは、俺にヌイグルミを預け、一目散に女子トイレに駆け込んでいった。

一方、俺は急に喉の渴きを感じ、ヌイグルミを片手に持ったまま、トイレの横にある自販機の前に立った。どうやらここの飲み物は、観光地のそれと同じで、どれも割高なようである。……どれにしようかな。

「……あれ？ ……お、小野塚……くん？」

二百円を投入してペットボトルのお茶を購入したところに、その声はした。ちょうど俺の真後ろからだ。

「木崎さん？」

そこにいたのは、少し前に学校で別れたばかりの木崎さんだった。ハンカチを手にしているところを見ると、お手洗いから出てきたところだろうか。

「お、小野塚くん……な、何でここに……？」

ゲームセンター内の薄暗さでわかりにくいが、木崎さんは頬を若干紅潮させ、俺にそう尋ねた。前から薄々思っではいたが、どうやらこの人は少々人見知りするタイプのようなのである。

「いや、ちよつと知り合いと遊びに……。木崎さんは？」

「わ、私は、ゼミのみんなと……」

ああ、講義が終わった時に言っていたやつか。たしかに、ここは大人数で遊びに来るには最適な場所だからな。

と、その時、

「しんたるー！」

一際大きな声と共に、グーラがトイレから戻って来た。寄つてきながら、手をぶんぶん振り回し、辺り構わず手についた水滴を払っている。

まったく……こいつにもハンカチを持たせておくんだったな。持たせたところで、こいつが使うのかは分らんけど。

「えつと……お、小野塚くん……こ、この子は……？」

木崎さんは、俺の横に来たグーラを何とも不思議そうな目で見つめている。本当のことを言っても信じてくれるとは思えないし……適当に誤魔化すか。

「あー……親戚……そう、親戚の子だよ。グーラって言うんだ」

「そ、そうなんだ……。えと……はじめまして、グーラちゃん」

「あーうー。だれだー、お前？」

「こらっ、グーラ。またそういう口の利き方して……」

「あ……いいよ、小野塚くん。私は木崎悠美。小野塚くんの同級生

だよ」

木崎さんは言いながら、少し膝を曲げて、グーラと目線の高さを合わせた。

「グーラちゃんは……えっと……外国の出身……それともハーフなのかな？」

「はいふー？ んーん、グーラはしょくじ……」

「ぐ、グーラ！ ほら、ちゃんとヌイグルミは自分で持て！」

今、グーラがいらんことを言おうとしたので、俺は咄嗟にグーラにヌイグルミを押しつけ、二人の会話に割って入った。

……さすがに今のは不自然だっただろう。木崎さんが不思議そうな目で、今度は俺を見つめている。

「あの……そう、外国！ グーラの父親は、シヨク……何たらっていうヨーロッパの小さな国の出身なんだよ」

「そ……そうなんだ……」

木崎さんは二、三度まばたきをすると、曲げていた膝を伸ばした。
……なんとか誤魔化した……かな？

木崎さんは少し不思議そうな顔をしてはいるが、どうやらグーラがヨーロッパとのハーフだということは信じてくれたようである。

……まあ普通に考えて、これでグーラが鬼だということが分かる奴がいれば、そいつの頭の方がどうかしてるがな。

「あ、あの……ところで、お、小野塚くん……。あの……せっかく会ったんだし……その……い、一緒に遊ばない……かな？ ぐ、グーラちゃんも一緒に……。み、みんなもいって言うと思うし……」

俺が誤魔化したことに安堵の息をついてると、木崎さんは少し俯き加減になりながら、不意にそう言った。いつかの時のように、体の前で組んだ指をもじもじとさせている。

「一緒に、か……。嬉しいんだけど、俺達この後、服を見に行こうかなって思ってた……」

「ふ、服？ ど、どこ行くの？」

「いや、適当に ユニ 口とかにでも行こうかなって……」

「だ、だったら、私も……。その……ちょうど用事あったし……」
「え？ 木崎さんも？」

「あ、あの……えっと……う、うん」

木崎さんは少し顔を赤くしたまま、コクコクと何度も首を振って
みせた。

……つい、首振り人形みたいだなあ、と思っってしまった自分がい
る。

しかし木崎さんも一緒に、か……。さて、どうしよう？ あまり
グーラと他の人を一緒にしたくはないんだが……。でも、木崎さん
はグーラのことを普通のハーフだと思ってるから、グーラが変なこ
とを言っても、ただの世間知らず、もしくは変な子としか思わない
……。か？ まあ、まず鬼であることはバレないだろう。……よく考
えたら、グーラが鬼だとバレても、別にそこまで困ることはない
だよな、多分。

それより、いつそのこと木崎さんに選んでもらうか、グーラの服
を？ 俺じゃ分からないからな、女の子の服なんて……。……うん
……。せつかくだし、そうしてもらおうかな……。

「じゃあ、木崎さん、一緒に行ってもらえるかな？ できれば、行
った先でグーラの服を選んでやってほしいんだけど……。こいつ、
服のことに無頓着だからさ」

「う……うん、うん！ わ、私で良ければ喜んで選ぶよ！」

木崎さんは嬉しそうに顔をパツと輝かせながら、次はぶんぶんと
首を激しく縦に振った。

……申し訳ない、また首振り人形を思い出してしまった。

「まあでも、せつかく会ったんだし、もう少しここで遊んでから……
……で、いいよね？」

「う、うん……！ だ、大丈夫だよ」

「それじゃあ、グーラ……あれ？ グーラ？」

……これは、どういうことだ？ さっきまでそこにいたはずのグ
ーラの姿が、忽然と消えている。辺りをぐるりと見回しても、どこ

にもいない。

「グーラちゃん……？ さっきまでいたのに……？」

木崎さんも辺りをキョロキョロと見回してくれている。しかし、どうやらここから見える位置にはいないらしい。

「あいつ……勝手にどこか行きやがって……」

はあ、と深く溜め息をついて、俺は自身の後頭部をぼりぼりと掻いた。

普通の友達とかなら、別にゲーセン内で急に姿が見えなくなっても心配はしないんだが……今消えたのは、グーラだからな。正直、不安で仕方がない。他の人に迷惑かけてないといいけど……。

「あの……悪いんだけどさ、木崎さん。一緒に、グーラを捜してくれないかな？」

「あ、う、うん。もちろん……！ そ、それじゃあ、私、あっち捜すね」

「じゃ、俺はこっちを……。ホントありがとうね、木崎さん」

「あ、いや、そんな……ど、どういたしまして……」

段々と語尾が小さくなっていく『どういたしまして』を言うと、木崎さんは慌てるようにして踵を返し、この場から走り去って行った。

さて、俺もグーラを捜しに行くか。まったく……世話のかかる鬼娘だ。

俺はもう一度溜め息をつくと、今しがた買ったお茶を少しだけ口に含み、木崎さんが行ったのとは逆の方に向かって歩き出した。

どれほど歩き回っただろうか。ゲームセンター内だけでなく、他のフロアにまで捜しに行ってみたというのに、未だにグーラは欠片も見えないでいた。まったく、どこに行ったのか……。

そういえば、木崎さんはどうしたろう？ もしかして、彼女が既にグーラを見つけてくれているかもしれないな。

「お、小野塚くん！」

噂をすれば何とやら。聞き覚えのある声が聞こえて後ろに振り返ると、木崎さんが息を切らしながら、こちらに向かって走ってきていた。何故かその手には、俺がグーラに渡したのと同じヌイグルミを持っている。

「や、やつと……見つけた……」

木崎さんは俺のすぐ傍までやって来ると、自身の膝に片手をつきながら、肩で息をした。

「どうしたの？ グーラ、見つかった？」

「う……ううん……。でも、これを見つけて……」

そう言っ、木崎さんは俺に、その手のヌイグルミを差し出した。俺はそれを受け取ると、おもむろにその耳の部分を触った。……他の部分とは違い、ここだけ少し湿ったようにフニャフニャしているようだ。

「……間違いない、グーラのだ。これ、どこで？」

「い、入口の所……」

「ってことは……あいつ、外に出たのか？ まったく世話の焼ける

……」

俺は小さく溜め息をつく、ヌイグルミが落ちていたという入り口に向かって歩き出した。

それにしても、今日はよく溜め息の出る日である。今日だけで、かなりの幸せが逃げてしまったな。

「お、小野塚くん……グーラちゃん、大丈夫かな……？」

まだ少し息を荒くしたままの木崎さんが、俺の横を歩きながら言った。

「そんな心配しなくても、ただ外に出ただけだよ、きっと。それより木崎さん、つらいなら無理してついて来なくても……」

「わ、私は大丈夫……。でも、心配するなって言っても……最近、この辺りって危ない人達がいるって話があるし……」

「危ない人達？」

俺の聞き返しに、「うん……」と不安そうに小さく頷くと、木崎さんは言葉を続けた。

「な、なんか……中学生の女の子が、この近くで誘拐されそうになったんだって……。犯人は黒い車に乗った、四人組の男の人らしいんだけど……」

「……まさか、グーラがそいつらに……ってこと？」

「わ、わからないけど……可能性は……ないこともないかな……って……」

そう消え入りそうな声で言うと、木崎さんは軽く俯いた。

……グーラが誘拐、か……。あり得ない……。とは、一概に言いきれないな。なんせグーラのことだし……。猫でもチラつかせれば、あっさりと知らない奴にもついて行ってしまいそうだ。でも……まさか、な……。

気が付くと、頭で考えていたこととは裏腹に、俺の足は歩くスピードを速めていた。少しなりとも、グーラのことを心配になっけてしまったのだろうか、この足は。

そしてしばらく歩いたところで、俺達は建物の外に出た。

真上から注がれる日光は、室内にいた俺にはとても眩しく、俺は日の光を遮るように手で傘を作ると、若干目を細めて、辺りを見回した。

平日の昼間ということもあって、アミューズメント施設前の駐車場には車が少なく、見晴らしは良かった。しかし、どうやらここから見える範囲には、グーラはいないようである。

「まったく、あの鬼娘……一体どこに……？」

時間的にそんな遠くに行ったとは思えないが、外に出たとなると行先は無限大に広がってしまう。もしバスにでも乗ってしまったら、考えただけでも頭が痛くなる。そうでなくても、変な輩が出没しているという話だし……。

「お、小野塚くん……」

「とりあえず、ここの裏手とか周辺を搜してみよう。多分、そんな

に遠くには……」

その時、

「……ん？」

小さくて聞こえにくかったものの　どこからか、聞き覚えのある間の抜けたフレーズが、俺の耳に入ってきた。

それがどこから聞こえてきたのかと、俺はその場で、再び辺りを見回す。

「……小野塚くん？　ど、どうしたの？」

別の場所を捜そうと言っていた俺が、いきなりその場でキョロキョロとし出したことを不思議に思ったのか　木崎さんは俺の顔を覗き込むようにして、尋ねてきた。

それに対し、俺は顔をあちらこちらに向けたまま、返事をする。

「いや……今、グーラの声が……」

「グーラちゃんの……？　わ、私は聞こえなかったけど……」

「でも、確かに今　」

聞こえたんだ。と、俺が言葉にしようとしたその瞬間、次はグーラの声ではなく、荒々しい男の怒鳴り声が聞こえてきた。

「お、小野塚くん……！　い、今の……！？」

今度のは、どうやら木崎さんにも聞こえたらしい。俺は木崎さんに落ち着いてと声をかけながら、怒鳴り声のした方に目をやった。

アミューズメント施設の建物のすぐ横にある、立体駐車場。怒鳴

り声は、その二階部分　もしくは三階か？　から、聞こえてき

たようであった。

「木崎さんはここにいて」

「あ……お、小野塚くん……待つ……！」

俺は木崎さんにヌイグルミを預けると、立体駐車場を目指して足を進めた。

駐車場の二階へと至るための少し急勾配な坂道を走って登り、登

り切った所ですかさず辺りに目を凝らす。

その時、そこで目に入った光景は、俺がしていた予想の中でも最悪な状況と一致していた。

駐車場の一角。車はそれほどなく、パツと目につくだけでも二、三台しか駐車されていない。そしてそこに　その周りを四人のガラの悪そうな男達に囲まれた　グーラがいた。さらにそのすぐ近くには黒いバンが停車しており、一見、男達がグーラを車中に連れ込もうとしている最中にも見える。

「あーうー。しんたろー、いたー」

こんな状況でも、グーラはいつもと変わらない平坦な喋り方で、俺の名前を呼んだ。憶測だが、おそらく彼女自身は、自分が置かれたこの現状をよく理解してないんだろ。

「グーラ、早く逃げろ！」

「あーうー？　にげろー？」

グーラはその顔に若干の疑問符を浮かべながらも、男達の元を離れ、俺のいる所にまで来ようと歩き出した。しかしその直後、男達の中でも特に恰幅のいい奴に腕を引き寄せられ　もう片方の手でその華奢な肩をグツと捕まえられてしまったのであった。

「おっと、逃がすかよ」

恰幅のいい男は、グーラを行かせまいとしながら、小さくニヤリと笑う。

「ぐっ……グーラを放せ！」

俺はそれだけを喉から絞り出すと、なんとかグーラを取り戻そうと、勢いだけで恰幅のいい男に向かって駆け出した。しかし、すぐさま他の三人に立ち塞がれ、俺はその直前でピタツと足を止めてしまった。

こういう時に、そのまま走りぬけてグーラを取り戻せればカッコいいのだろうが……。俺はむしろそれとは逆に、段々と迫ってくる三人の男達に押され、徐々に徐々に後ずさりをしていた。

この三人は、俺をどうする気なのだろう？

なんて分かり切

ったことを、つつい頭の片隅で考えてしまっ

辺りに俺たち以外の人影はない。何か武器になりそうなものもなければ、俺は殴り合いの喧嘩なんかしたことがない。したことがないから分かんが、多分 いや、確実に弱いだろう。

……くそつ。なんだか息をするのも苦しい。口の中が異様に乾燥して、舌が貼りつく……。

でも……このまま大人しくやられるのは御免だ。

小さく深呼吸をしながら、俺はそこでようやく後ろに下がるのをやめた。そして深呼吸を何度も繰り返したまま、ゆっくりと手をグユツと握り 拳を作った。

運動と呼べるようなことは一切やっていない俺だが……グーラを逃がすことくらいはしてみせる。それが出来なくても、せめてこの騒ぎを大きくすれば……。

そう思いながら、足に力を込め、歯を食いしばる。

と、その時 不意に後方から足音が聞こえ、俺は思わず音のした方に目を向けた。

そこにいたのは

「お、お……お、小野塚……くん……」

木崎さんはヌイグルミを両手で抱えるようにして持ち、今にも泣き出してしまうような震えた声でそう呟いた。一瞬見ただけでも、肩がわなないているのが見て取れる。

木崎さん……さっき建物の前で待ってるよう言ったのに……。彼女には悪いが、俺は心の中で小さく舌打ちをした。

……いや、待て。これは、逆にチャンスなんじゃないか？

目の前にいる三人の男達は、どいつも突如現れた木崎さんに意識が行っている。何かしらの行動を起こすなら、今が最高の好機だ。

「う……うおおおお！」

次の瞬間、俺は三人の間を抜け、グーラを押さえつけている恰幅のいい男目掛けて全速力で駆けだした。

このままあの男に体当たりをかまし、その手をグーラから放させ

る。その後はみんなで全力で走り、建物の中にでも逃げてしまえばガッ！？

いきなり喉に衝撃が走ったかと思うと、俺は力いっぱい後ろに引かれ、その場で尻もちをついた。どうやら後ろから思い切り襟を掴まれたらしく、そして、俺の勇気を出した急襲は、無念にも失敗に終わったらしい。

「お、小野づ……きゃあああッ！？」

木崎さんの悲鳴が聞こえたので後ろにチラッと目をやると、木崎さんは、先程まで俺の前にいた男のひとりに支えられるようにして何とか立っているというような状況で、そのぐったりとして目をつぶっている様子から、どうやら気を失ってしまっているようであつた。

絶体絶命。そんな言葉が頭の中に思い浮かんだ。

グーラはどう見ても強そうな恰幅のいい男に捕らえられ、木崎さんもまた、気絶した状態で男に捕まっている。そして俺は、地面に座ってしまっている状態で、残りの二人に囲まれている。これを絶体絶命と言わずして、何と言うだろうか。

「く……くそっ！」

半ばヤケクソに、俺は襟を掴む男の手を振り払って、前に出ようと立ち上がった。しかしすぐさま俺を取り囲むもう一人の男に行く手を遮られ、前に出ることも後ろに引くことも出来なくなってしまう。

「活きがってんじゃねえぞ、おらッ！」

そしてとうとう、前に立ち塞がる男の拳が、俺の頬をとらえた。

「あぐっ……！！？」

ゴッという鈍い音と共に、俺の体はよろめきながら後ろに吹き飛ばぶ。だが、そこで足が纏れて倒れそうになったところを、後ろにいた男にそのまま羽交い締めにされてしまった。

さらにそこに前の男の蹴りが、俺の腹を貫く。続けて、再び顔に一撃。

そこで羽交い締めが解かれたかと思えば、そのまま後ろの男から勢いよく跳び蹴りをくらい、俺は地面に転がった。

「いつづあ……うッ……」

今までに感じたことのないような容赦のない連続した痛み、俺は唸り声を上げながら小さく身をよじった。しかし、これくらいで男達の猛攻が終わるはずもなく、二人はさらに、何の抵抗もせず地面でのたうつ俺に対し、踏む、蹴るといった行動を繰り返した。体中至る所が果てしなく痛い。まるで無限に続く長い坂を、ずっと転がり続けているかのようなのである。そしてこの痛みから出来るだけ逃れるためなのか、気が付けば俺は団子虫のように体を丸め、この嵐が収まるのをただジッと耐えて待っているという状態になっていた。

もはや、グーラと木崎さんを連れて一緒に逃げるなど 不可能だった。

だが、その刹那

「ぐああッ!？」

駐車場に、断末魔の悲鳴とも取れるような大きな叫び声が響いた。それから程無くして、俺を襲っていた嵐は不意に、そして急激に収束した。

何が起こったのか分からなかった。ただ、何か風向きが変わったのを感じ、俺は恐る恐る顔を上げた。そして目の前の光景を見た時、俺は思わず自分の目を疑った。

グーラを拘束していた恰幅のいい男が悶絶するように倒れ、その傍らで、グーラが男を見下ろすように立っていた。

「……グーラ……?」

それは、確かにグーラだった。しかし、何かがいつもと 先程と違う。

こいつは本当にグーラなのか……?

そう思った矢先、俺はいつものグーラと このグーラの違いに、ハッと気が付いた。

顔つき……というか、目が違うのだ。いつもの　どこを見ているのか分からないような目ではない。このグーラは　傍から見ていて　ハッキリとどこに目を向けているのかが、見て取れた。そのせいで自然と、表情がいつものポアーツとしたものではなくなっているのである。

そんな焦点の合った目が、スーッと、俺の周りにいる二人の男を捉えた。

次の瞬間、もの凄い速さで、グーラが男達に飛びかかった。突然のことに狼狽している男達を尻目に、グーラはその腹を、胸を目掛けて拳を振るう。

そして殴られた男達二人は　グーラのパンチを受けた箇所から小気味よくも不吉な音を立てて、何の抵抗もせずまま地面に転がり、そのままピクリとも動かなくなった。

「グーラ……？」

俺は目を見開いて、その名をポツンと呟いた。しかし異様な喉の渇きのせいで掠れた声しか出ず　すぐ近くに立っているにも関わらず、俺の声は彼女に届いてはいないようであった。

そんな折、俺の耳に、また別の叫び声が飛び込んできた。

「う……うあああつ！　く、来るなあ！　この女がどうなってもいいのか！？」

見ると、木崎さんを捕まえていた男がナイフを取り出し、それを有ろう事が木崎さんの首元に突き立てていた。その顔は恐怖で歪んでおり、ナイフを持った手も微かにプルプルと震えている。どうやら完全なパニック状態にあるようで　木崎さんを人質に取られてしまった以上、こちらはどんな行動であろうとも勝手に取ることが出来なくなってしまった。

しかし、グーラは怯まなかった。いやむしろ、怯むどころか男に向かつて行ってしまったのである。まるで、木崎さんのことなど知ったことではないという風に……。

「うあ……わあああああああッ！！」

男の、ナイフを持った方の手が動く。そして木崎さんの細い首に、刃先が掛かった。

その直後、グーラの手がナイフを押さえ、もう片方の手で男の顔を打ち貫いた。男はそのまま後方に吹き飛び、木崎さんは、その場で膝をつき、バタツと倒れた。

「木崎さん！」

俺はまだ痛みが残る体を何とか起き上がらせると、急いで木崎さんのもとに駆け寄った。

木崎さんは首に、本当に僅かな切り傷が出来てしまっているものの、それ以外に目立った外傷はない。まだ気を失ったままではあるが……とにかく、無事で良かった……。

木崎さんの無事を確認した俺は、ホッと、胸を撫で下ろした。

だが、まだ事は終わっていないかった。俺達を蹂躪した憎き四人組を全員ぶつ飛ばしたというのに、グーラの様子が未だおかしいままなのだ。

グーラは俺たちには気も留めず、今しがた殴りつけた男にゆっくりと近づくと、倒れこんでいる男の傍らでしゃがみ込み、その服をおもむろに捲りあげた。そして露出した男の腹部に目の焦点を合わせると、犬歯の発達した口を大きく開き、獲物目掛けて一気に「やめろッ、グーラ……！」

気が付くと、俺はそう口にしていた。そしてその途端に、グーラの動きがピタツと止まったのである。

「……あーうー」

いつもの間の抜けた言葉。次の瞬間にこちらを向いたグーラの目は、先程までとは違い、どこを見ているのかが分からなかった。

「あーうー。しんたろー、だいじょーぶかー？」

相変わらぬの抑揚のない喋り方で、グーラは俺と木崎さんの元に駆け寄って来た。さっきまでのが全て嘘かのように、いつものグーラである。

「……グーラ、お前……？」

「あーうー？」

その時、不意に木崎さんの体がピクツと動いた。そのままゆつくりと目を開き、木崎さんは何回かまばたきを繰り返す。

「木崎さん、大丈夫!？」

「んっ……小野塚……くん？ わ、私……あっ！」

何があつたのかを思い出したのか 木崎さんはハツと目を見開くと、慌てた様子で上半身を起き上がらせた。しかし辺りの惨状を見た途端に、呆然として再び目をぱちくりとさせた。

「お、小野塚くん……い、一体何が……？」

「あ、いや……その……」

……駄目だ。俺自身、何が起こつたのかよく理解していないというのに、木崎さんを誤魔化す言葉なんて思いつかない。えっと……何て言えば……。

「と……とにかく、この場を離れよう、木崎さん。あいつらも目を覚ますかもしれないし、いつまでもここにいるのは……」

「え？ あ……う、うん……そうだね……」

意外にもこの苦し紛れで出た言葉が、功を奏した。俺はその場で立ち上がると、木崎さんに手を差し伸べた。続けて、木崎さんはその俺の手を使い、立ち上がる。

「い……っつ……」

「だ、大丈夫、小野塚くん？ も、もしかして怪我してるんじゃない？ ……？ ……び、病院……!」

「いや、そこまでじゃないよ……大丈夫。それより早く行こう、木崎さん。……ほら、グーラも行くぞ」

「あーうー」

そのフリーズを聞くと、俺はブーツと突っ立っているグーラの手を取った。

……普通の……少し小さな女の子の手だ。この手が、さっき……いや、今は、考えるのはやめよう。

そして、俺達はそのまま立体駐車場を後にし、一度アミューズメ

ント施設の建物へと向かった。

第四幕

「あんな怖い目に遭わせちゃって……本当、ごめんね……」

建物の中に逃げ込んでから、俺は木崎さんに向けてそう言葉を放った。グーラのせいでこんなことに巻き込んでしまったのだから、本当に申し訳ない……。

しかしそんな俺に対し、木崎さんは、

「き、気にしないで……。あの時、小野塚くんに待ってるよう言われたのに、勝手に追いかけてしまった私が悪いんだよ……。そ、それより小野塚くん……怪我は大丈夫……なの？」と、俺を非難するどころか、優しい言葉で俺の体を気にかけてくれた。

心の中では言え、駐車場で彼女に対し舌打ちをしてしまった自分が恥ずかしい。

「ああ、怪我は大したことないよ。でも、さすがに服は、また今度かな」

「あ……うん……そうだね。し、仕方ない……よね」

木崎さんは何やらガツカリした様子で、少し顔を下に向けた。

「木崎さんも何か買うものがあつたみたいだけど、今日はまっすぐ帰った方がいいよ。……あ、なんだったら俺が家まで送るよ」

「え、そんな……。じ、じゃあ……。あ、いやでも……。……う、うん、私は大丈夫だよ、小野塚くん。わ、私はゼミのみんなと帰るから……と、というか！ お、小野塚くんこそ、私達と……」

「いや、俺の方は大丈夫。それに、みんなに説明するのも面倒だし……」

「そ、そう……？ む、無理……してないよね……？」

「大丈夫だって。心配性だな、木崎さんは」

俺は自分の胸を軽く叩いて、元気であることをアピールした。正

直に言うと、叩いた瞬間にズキツとした痛みが走ったのだが……それを隠して、なんとか口元に小さく笑みを浮かべる。

「それより木崎さん、みんなと帰るなら、早く戻った方がいいんじゃない？ あんまり長く俺達といると、みんな心配するんじゃないかな？」

「う……うん……」

そう言っただけで、木崎さんは俺たちに背を向けて、ゲームセンターへと向かっていた。しかし、その途中でふと振り返ると

「ま、また学校でね……お、小野塚くん」

「……うん、また」

俺は軽く手を振って、木崎さんがゲームセンターに消えていくのを見送った。……若干、手首がズキズキとしたが、なんとか顔には出さずに済んだようだ。

「あーうー。ゆーみ行っちゃったなー」

猫のヌイグルミを抱きかかえながら、グーラは俺の横で呟いた。例えば、こいつのせいでトラブルに遭ったんだよね……。でも、それから抜け出せたのも、こいつのお陰なわけで……。駄目だ、よく分かんなくなってくる。

そもそも、あれは何だったんだろう？ いつもボーツとしているグーラがいきなり豹変したかと思えば、とてつもない力である男達を一掃して……。そして最後の、アレ。まるであの時の様子は……

……鬼……。

「喰人鬼……か」

俺はもしかしたら、想像している以上のとんでもない奴と共同生活を始めてしまったのかもしれない。少なくとも、これまでの生活にはもう戻れない気がする。これから一体、俺は……いや、やめよう。もう疲れた……このことについて考えるのは、とりあえず後回しだ。今はとにかく……早く帰って横になりたい。

「帰るか、グーラ」

「あーうー。帰るのかー、しんたろー?」

「ああ。途中で、ちよつとスーパーにでも寄つてな。……今日はソーセージじゃなくて、奮発して牛肉でも買つてやるよ」

「ぎゅーにくー? 何だ、それー? うめーのかー?」

「ああ、超美味いぞ」

「おおー! ぎゅーにく、ぎゅーにくー!」

「つたく……食い意地はつてゐるな。……もう、ひとりで好き勝手に行くなよ?」

「あーうー!」

そう言つて、手をヌイグルミごとグルグルと回して喜びを表現するグーラは、傍から見れば、ただの変な恰好の元気な女の子だった。これを見て、一体誰が、こいつのことを鬼だと思うだろうか。……普通に思わないだろうな、俺以外は……。

そんなことを考えながら、俺はグーラと共に建物を出て、スーパーに向かつて歩き出した。

さて……今日の晩は、牛肉で何作つてやろうかな?

第二話 プロローグ

暗闇に支配された、狭い空間。

ここにいるのは、俺と奴の二人だけ。他には何も無い。俺と奴の二人だけだ。

真っ直ぐ一直線に、怪しく光る双眸が俺を射抜く。

そしてギザギザに尖った歯が、俺の首元に狙いを付けた。いや、もはやそれは歯ではなく、『刃』だ。全てを貫く、鋭利な牙だ。

何かを呟きながら、奴は少しずつ俺に近づいてきた。だが、俺は動けない。金縛りという言葉が、フツと頭に浮かんだ。

「 の で 」

近づいてくるたびに、少しずつ奴が何を言っているかがハッキリとしてきた。奴はハキハキとした口調で、しかし淡々と、こう言っていた。

「以前からT市で立て続けに起こっている不審火は、県警の捜査により、同一人物による連続放火事件であるという見方が強くなり」

「

次の瞬間、奴の牙が、俺の喉を捉えた。ズブ……ズブ……と、ゆっくり俺の肉に喰い込んでいく。不思議と痛みはない。だが、その代わりに重い。まるで米袋が腹の上に乗っかっているかのようなのだ。

「わ……あああああっ!？」

肉を食まれる恐怖感に、俺は思わず叫び声を上げた。

するとその刹那、突如として光が灯り、一瞬にして辺りを照らし出した。

「あーうー？」

どこを見ているのか分からない、どこか虚ろな瞳。気の抜けた、抑揚のない声で発せられる、いつものフレーズ。見慣れた我が家の居候の姿が、そこに　布団に包まって仰向けになっている俺の腹の上にあった。

「おー。やつと起きたかー、しんたるー」

居候が嬉しそうに俺の上でバタバタとはしゃぎ出したので、俺は何とかそれを退かすと、ガバツと上半身を起き上がらせた。

そこに広がっているのは、何て事はない　普段通りの狭いアパートの一室だ。カーテンの開けられた窓からは燦々とした日の光が差し込み、いつの間にか電源がオンになっているテレビからは、朝の最新ニュースが報じられている。

夢　その単語が浮かび上がった時、俺は思わず溜息をついた。我ながら、なんとという悪夢だ。喰われる夢、とは……。

俺はふと、布団の横でチョコンと座っている居候に目を移した。居候はジッと、すぐ隣の台所に設置してある冷蔵庫を見つめていた。その様子は、まるで餌を前に『待て』の命令を下されている犬のようである。

「……はいはい」

俺は布団から抜け出ると、台所まで歩いて行き、冷蔵庫から市販の魚肉ソーセージを二本取り出した。俺の分と居候の分　二人分の朝食だ。

ポーンと一本のソーセージを、パタパタと尻尾を振って待っている居候に向かって放り投げる。するとそれを受け取った居候は、またこれかというボヤキとは裏腹に外装フィルムを上手に剥がし、美味しそうにソレを咀嚼し始めた。俺もそんな居候を見ながら、同様にソーセージを口に運ぶ。

いつもと同じ朝が、今日も始まった。

第二話 第一幕

俺の名前は小野塚信太郎。どこにでもいる普通の大学生だ。狭いボロアパートの一室を借り、勉強とバイトに翻弄されながら、そこで一人暮らしをしている。……いや、正確には『していた』だ。およそ一ヶ月前、うちに居候という存在が現れたのである。

居候の名前はグーラ。中学生くらいの少女で、その性格は天真爛漫……と言えば、聞こえはいいだろうか。抑揚のない独特な喋り方をして、いつもどこを見ているのか分からない、何とも不思議な奴だ。

そんなグーラなのだが、実は彼女は人間ではない。本人が言うには、喰人鬼。動物の肉を食らって生きる、妖怪や化け物の類らしい。

まさか、鬼なんて現実に存在するはずがない。この話を聞いたところで、皆そう思うだろう。俺も、あいつが自分のことを鬼だと言いだした時は、そう思った。

だが、つい先日のことだ。とある出来事をきっかけに、俺は『鬼』という存在を意識するようになってしまった。その出来事については、長くなるので細かい説明は省くが、その時、グーラは突然、普段の彼女からは想像も出来ないほどの力を発揮した。その力であいつは、人をいとも簡単に吹き飛ばし、そして食べようとしたのだ。いや、実際は『それ』が起ころる前に止めたので、本当にグーラが人を喰おうとしていたのかは分からない。だが、あの時のグーラが漂わせていた空気……あれは普通じゃなかった。それだけは確かである。

とはいえ、何も分からない状態で考えても仕方がない。あれからグーラの様子が変わったなんてことはないし、意外と俺の思い違いに過ぎないのかもしれない。

そんなことを考えていた、ある日の昼下がり。

その日の講義は午前だけで、俺は真っ直ぐ家路についていた。すると、アパートの一室　俺の部屋が、何やら騒がしいのだ。

大方、グーラがテレビでも見ながら騒いでいるのだろ。最初、俺はそう思った。だが、それにしたって外にまで喧騒が届いてくるのは異常である。それに、何やら会話をしているようにも聞こえる。まさか、こんなボロアパートに真っ昼間から泥棒か！？

泥棒というのは、少し考え過ぎだったかもしれない。だが、変なセールスマンや押し売りを、グーラが家に上げてしまった　これなら十分に考えられた。

俺は慌てて自宅の玄関口にまで辿り着くと、靴から鍵を取り出し、目の前の扉に差し込んだ。しかし、鍵を回したところで違和感　鍵が既に開いているのだ。

どうやらグーラが一度、中から鍵を開けたらしい。益々もって俺の予想は現実味を帯びてきた。

「ちっ……」

面倒なことが起こりそうだと予感して、舌打ちを一つ。そして玄関のドアを開け放ち、俺は自分の城に足を踏み入れた。

するとそこには、俺のものやグーラが普段履いているサンダルとは別に、一足の見知らぬスニーカーが置かれていた。赤色を基調とした明るい色遣いのもので、サイズからして所有者はどうやら女性のようにある。

と、その時、ドタドタという足音と共に、あの独特な喋り声が俺の耳に飛び込んできた。

「あーうー。しんたるー、おかえりー！」

そう言いながら姿を現したグーラの恰好は、水色のキャミソールに黒いスパッツというものだった。服をほとんど所有していなかった彼女のために、俺が僅かだが買い与えてやったものだ。

「おいグーラ、勝手に誰か家に上げたのか？」

俺は靴を脱ぎながら、小声で尋ねる。

「んー。あかねえ来てるぞー」

「……茜？」

軽く眉をひそめて俺が聞き返すと、グーラはフルフルと首を横に振り、

「あかねじゃなくてー、あかねえだー」

「はあ？」

いつものことではあるが、グーラが何を言っているのかが分からない。

俺はグーラの横を抜け、入ってすぐの台所を通り、我が家のリビングルームへと向かった。

すると、そこには見覚えのない女が一人　まだ日も高いというのに、片手にビールの缶を持ち、俺がいつも使用している座布団の上で胡坐をかいていた。

「あ、ども。お邪魔してまあす」

「……は、はあ？」

俺の存在に気が付いた女は、明るい調子でヒラヒラと手を振ってきた。

その一方、何かの販売員がいるものだと思っていた俺は、その意外な存在にどう反応してよいものか分からず、小首を傾げてクエスチョンマークを浮かべた。

日本人らしくない炎のように赤いショートヘアに、健康的な印象を抱かせる褐色の肌。そしてそれがよく映える白い半袖のシャツと、下にはジーンズを着用した女は、ビールをグビグビと豪快に喉に流し込んでいる。

さらにテーブルには、ビールと共に彼女が持参してきたのか、肴

としてサラミが数本置かれていた。

「つまり、キミ……アカさんは、グーラの知り合いってわけだな？」
テーブルを間に置き、俺はその女の向かいに腰を下ろしたままで口を開いた。

アカ それが二、三、会話を交わしたことで判明した、この見知らぬ女の名前だ。なんでもグーラの姉貴分のような人物であるらしく、散歩をしていたグーラを偶然見かけ、そのままここで久々の再会を祝っていたのだという。

「アカでいいよ。多分、タメくらいだろ？ 何にせよアタシ、そういうの気にしないからさ」

アカはそう言つと、テーブル上のまた別のビールの缶を取り、それを先程と同様、とても美味そうに飲み干した。

「つぶはあ！ いやあ、昼間から飲む酒はやっぱいいねえ。ほら、信太郎も飲みなよ」

「いや、俺は……。ん？ つか、俺の名前……？」

「あんたのことはグーラから聞いたよ。色々、良くしてもらつたつてね」

いやに『色々』の箇所を強調して、ニヒヒツと、アカは意地悪そうに笑った。それに対し、別に後ろめたいことなど無いはずなのだが、俺は思わず体を強張らせてしまう。

『色々』 その部分が、何故だか妙に気になる。一体、グーラの奴は何を喋ったんだ？ まさか誤解を招くような変なことを言っただんじやないだろうな……？

俺はチラリと、隣に座っているグーラを横目で見た。グーラは何本ものサラミを一生懸命になって口へと運んでおり、そのせいで手はサラミの油でテカテカになっていた。

いやしかし、よく考えればグーラがそんな嘘になるようなことを言うとは思にくい。

では、アカの言う『色々』とは？ ……いくら考えても仕方がない。気になるのであれば、本人に聞く以外なさそうだ。

「色々って、その……例えば？」

「んん？ 何、気になるの、自分がどういう風に話されちゃったのか？」

ニヤニヤと嫌らしく笑うアカ。そんなアカに、俺は小さく首を縦に振って答える。

「そうだなあ。例えば……信太郎が、無理矢理グーラの着替えを手伝ったりしたとか」

「……は？」

「あと、無防備なグーラに欲情して、ここに住ませる代わりに夜の御奉仕を迫っちゃったこととか。まあ、でも仕方ないか。若い盛りの大学生 女の子と二人暮らしなんかになったら……ねえ」

「ち、ちよつと待てっ！！ ほ、ほ、本当にそんなこと言ったのか！？」

俺は目を見開き、バツとテーブルに身を乗り出した。

今、アカが言った出来事 そんなもの、これっぽっちも身に覚えがない。着替えを手伝ったやら夜の奉仕やら……そもそも、俺はグーラをそんな目で見たことは一切ない！ 完全なる誤解だ！！

と 俺が必死になってアカに詰め寄っていると、彼女は急にケラケラと笑い声を上げ始めた。アルコールが入っている者特有の、えらく上機嫌で、放っておいたらいつまでも続けていそうな笑い方だ。

「あは、あはははは！ ウソウソ、嘘だよ、嘘。 夜の御奉仕って、そんなの……あははは！」

「なっ……！？ う、嘘って、じゃあ……」

「普通に親切にしてもらったって話しか聞いてないよ。あはは！ それにしても、そんなに驚くなんて……。もしかして、身に覚えがあつちやつたりするのかな？」

「そ、そんなわけないだろ！」

「あはははっ！ だよね。もし本当にやつちやつてたら、犯罪だもんね」

そのままツボにでも入ったのか、アカは狂ったように笑い続けた。初対面だというのに……。どうやらアカは、彼女自身が言った通り、本当に『そういうの』は気にしない人柄のようである。フレンドリーと言えば聞こえはいいのだろうが……ただ単に、酒癖が悪いだけなんじゃないだろうか、これは。それとも、これが素か？

今のやり取りですっかり疲れてしまった俺は、元の位置に座りなおし、ハアと深く溜息をついた。

「ところで、アカは　いや、アカも……」

それから少しして、次第にアカの笑いが治まってきたところで、俺は不意に口を切った。

俺には、先程からどうにも気になることがあった。それは、グーラの知り合いだというアカの発言だ。知り合い……しかも、グーラの姉貴分ということは、もしかして

「アカも……喰人鬼、なのか？」

「うん、そだよ」

これまた軽く、あっさりとした肯定の言葉に、俺は思わず拍子抜けしそうになった。鬼というのは、そんな簡単に知られていいものなのか？　それとも彼女がこうも簡単に認めたのは、俺が既に鬼という存在を知っているが故だろうか。

「鬼……鬼って、一体何なんだ？」

肯定され、逆に何を聞いて良いのか分らなくなった俺は、ふと思いついた質問をポロッと口にした。だが、少し漠然とし過ぎただろうか　アカは数秒ほどウーンと唸り声を上げて、

「何って聞かれてもなあ……んー……肉食人種？　いや、むしろ人間に最も近い動物って感じかな？」

「つまり、その……やっぱり人間じゃあないのか……？」

「まあ、そうかな。でも体の構造はほとんど一緒らしいから、ヒトだけどホモ・サピエンスじゃないって辺りが正解……なのかな、多

分？ まあ人によつては、妖怪や化け物の類なんて言う奴もいるけどね」

そう言うと、アカはサラミのフィルムを剥がし、ガブリとそれに齧りついた。そのツマミを噛んで引き千切る歯は、まるで猛獣のそのように鋭い。我が家の居候と同じだった。

あんなにも発達した犬歯 いや、牙があれば、おそらく動物の肉を噛み切るくらいは朝飯前だろう。実際、グーラも俺と会おう前は、野良猫なんかを食糧としていたみたいだし……。だとすれば、きつと

「……アカは……」

人間を喰ったことはあるのか？

俺は、そう問おうとした。だがしかし、思うように声を出すことが出来ず、俺は質問を一時中断して、ゴクリと自分の唾を飲み込もうとする。が、その唾ですら思うように飲むことが出来ない。気が付けば、いつの間にか口の中はカラカラに渴いていた。

と、その時だった。いきなり台所の方から、ガシャアンツという大きな音が飛び込んできた。その音に驚き、慌ててそちらの方に目を移すと、そこにはビチャビチャになった床の上で、まばたきを繰り返しながらボーっと立ち呆けているグーラの姿があった。

「ばっ……グーラ、お前何やってるんだよ！？」

「あーうー……。お茶飲もーとしたら落としたー」

そう言うグーラの足元には、いつも麦茶を入れているプラスチックの容器、及び縁の欠けたマグカップが転がっていた。

その光景を目の当たりにし、俺は額に手を当てて、深く溜息をつく。

「つたく、世話のかかる奴だな」

「……あーうー。ごめん、しんたろー……」

「あ、動くな、グーラ！ ちょっと待ってる！」

俺は即座に立ちあがると、隅のタンスからバスタオルを取り出し、それとスリッパを持って、グーラの元へと向かった。

「怪我はしてないな？ ほら、破片が刺さるからスリッパを履け。ちゃんとタオルで足を拭いてからだぞ」

「んー、わかったー」

グーラが俺に言われた通りのことを実行しているのと並行して、俺は雑巾と掃除機を使い、目の前の惨状の後片付けを進める。

まったく、とんだ面倒事を起こしてくれたものだ、グーラの奴はカップも一つ使えなくなってしまうたし、近いうちにどこかに買いに行かなければならない。

だが、グーラに怪我がないようにで本当に良かった。小さく 自分でも気付かないくらい小さく、俺はホッと安堵の息を漏らした。
「くっ……くっ……あははははは！」

ふと聞こえてきたリビングからの笑い声に、俺は思わず驚いた。見ると、アカがこちらを指差しながら、愉快そうに腹を抱えている。
「あはっ。信太郎さあ、まるでグーラの親みたいだね。お父さん……いや、どっちかって言うと、お母さんって感じた」

先程と同じように、アカはケラケラと上機嫌に笑う。その様子は、やはり酔っ払いのそれであった。

しかし、そんな笑い声も徐々に治まっていく。これも先程と同じだ。だが、ただ一つ違っていたのは、次に口を開いたアカの口調が、とても穏やかなものに変わっていたということだった。

「ところで、グーラ……そろそろ本当の親に、顔を見せに行った方がいいんじゃないかい？」

優しく諭すようなアカの言葉。それを受け、グーラの体が一瞬ビクツと震えた。それでも構わず、アカは続ける。

「大事な一人娘がいなくなって、二人とも心配してたよ、グーラ？」
「……あーうー。あかねえは、グーラをさがしに来たのかー？」

「いんや、今日会ったのは本当に偶然だよ」
まさかグーラがこの街にいるだなんて、全然思ってもみなかった。そう付け足し、アカはヒラヒラと手を軽く横に振った。

一方、二人の会話を聞いていた俺は口元に手を当てて、いきなり

現れた『親』という単語についてグルグルと脳を回転させていた。

親 それは一部を除いた全生物に、ほぼ等しく与えられる一対の存在である。もちろん、俺も持っている。なら、今まで何故か気に掛けなかったが、グーラにもソレがいるのは当然というものだ。

しかし、それならどうしてグーラはここにいるんだ？ 親と一緒にいて然るべきはずの年頃であるグーラが、俺と共に暮らしている理由 そう、ホームレス生活をしていたグーラを、俺が拾ったんだ。では何故、グーラはホームレス生活をしていたんだろう？

鬼だから いや、これでは説得性に欠ける。彼女達を見る限りでは、鬼と人間の見た目に大差はない。それに言語能力もあるし、金銭や衣服という人間の文化にも順応している。このことから考えると、もしかして鬼というのは、人間社会に溶け込んでいるのではないだろうか？

この仮説が正しければ、普段、鬼は人間として生活しているはずである。ならば多くの者は、人間と同じで住居も構えているだろう。なら、グーラは？ 未だ幼さを残した少女が一人、外で生活をしていた訳 その中で最も考えられるもの、それは

「……なあ、アカ」

まるで園児に言っただけのようにしているアカに向かって、俺は呼び掛けた。アカはこちらに注意を向けると、「何？」と小さく口にした。

「アカ、もしかしてグーラは……家出、したのか？」

次の瞬間、アカは数回目をしばたかせると、再びグーラの方に向き直り、小さく息を吐いた。

「ありやあ、てつきり話してるもんだと思ってたけど……。グーラ、信太郎に何も言っただけだったのかい？」

「……あーうー。ごめん……」

珍しくしょぼんとして、下を向くグーラ。そんなグーラを見て、やれやれといった感じで肩を竦めると、アカは再度こちらに目を向けて口を開いた。

「そう、信太郎の思ってる通り　グーラは父親と喧嘩して家を飛び出した、家出娘だよ」

「父親と……喧嘩？」

コクリと、アカは首を縦に振った。

「ちよつと色々あつて、ね。まあ、グーラも反抗期ってことかな」
クスツと微笑しつつ、アカは新しいビールに手を伸ばした。

俺は、俯き加減のグーラに視線をやった。その目は、相変わらずどこを見ているのか分からない。感情のこもらぬ、人形のような目だ。

だが一瞬、その瞳の中に何かが揺らめいているように見受けられた。そのせいで、まるでグーラが何かを悩んでいる　そんな風に、俺には感じられた。

「……グーラ。大人しく帰った方がいいんじゃないのか？」

「しんたろー……でも……」

「何だ？　父親がまだ怒ってるかもしれないって、不安に思ってるのか？」

俯いたままで、グーラはコクンと頷いた。

「大丈夫。何で喧嘩したのかは知らんが、きっと父親の方も、もう怒ってなんかはいないと思うぞ。むしろお前のが心配で堪らないはずだ」

「そうだよ、グーラ。それに、いつまでも逃げられる問題じゃないんだからさ」

「……あーうー……」

それから、しばらくグーラの沈黙が続いた。その間、俺達は何をするわけでもなく、ただじつとグーラが答えを出すのを黙って待つ。と、そのまま数分ほど経った時、不意にグーラが下げていた頭を上げ、いつもの調子で言った。

「んー、わかったー。グーラ、帰るー」

「うん！　グーラ、よく言った！」

グーラの決断を聞き、アカはニパツと顔を明るくした。それに釣

られて、俺もウンウンと頷く。

だが同時に、俺はあることに気が付いた。グーラが帰るということとは、俺は再び一人の生活に戻るということだ。もう二度と会えなくなるということはないだろうが……顔を合わせる機会は、格段に減るだろう。

いや、しかし……それが普通なのか。そうだ、ただ元に　一ヶ月前に戻るだけだ。それに、一つ屋根の下で知り合って間もない男女が寝食を共にするというのは、やはり不健全だしな（もっとも、俺はグーラを女として見たことは一度もないが）。

……とはいえ、やはり少し寂しい気はしなくてもないが、な……。「あーうー。でもー」

と、その直後、グーラはフラツと俺の横に來ると、いきなり俺の腕をグイツと引つ張った。そして、彼女が何をやりたいのか分かっていない俺の顔をジツと見つめ、一言。

「でもー、しんたるーもいつしよなー」

……いつしよ？

「いつしよって……い、『一緒』にグーラの家について来いつてことか！？」

「んー」

コクコクと、グーラは首を振った。

その一方で、俺は予想だにしていなかったグーラの発言に呆氣に取られ、見事に目を丸くしていた。何か言おうにも何と言って良いか分からず、口は半開きになったままだ。

すると、そんな俺の表情があまりにも間抜けだったのか、アカがまたもや陽気に笑いだした。

「あはははは！　いいね、いいね！　よし、信太郎も一緒に行こう、グーラの家に！」

「なっ……な、何で俺も！？　俺は関係ないだろ！」

「何言つてんだよ、一ヶ月近くグーラの面倒見てくれたくせに……」

……それに　」

それに、ちょうどいいかもしれないね。

「……え？」

それがどういう意味なのかは分からない。だが、何故だかその言葉の時だけ、アカの様子が他とは明らかに違っていた。何かを憂いているような、そんな感じだ。

「ま、とにかく信太郎も行こうよ！ グーラを養ってくれたお礼もちゃんとしなきゃだしねっ！ あははは！！」

気付いた時には、彼女は再びケラケラと笑い声を上げていた。あたかも、今の一瞬は俺の見間違いだったかのように。

「お礼って、別にそんな……」

チラッと、俺は未だに腕にしがみ付いたままのグーラに視線を移した。その曇りのない両の目は、ひたすら真っ直ぐに俺を射抜いてくる。少しも動かすこともなく、ただジツと。

しばらく見ていて、それが彼女なりの『おねだり光線』だと判明した時、俺は溜息混じりに、もう一方の手で自分の後頭部をポリポリと掻き、そして、観念した。

「……分かったよ。行けばいいんだろ」

「あーうー。やったー」

俺の言葉を聞いた途端、グーラはパツと俺の腕を離し、万歳を繰り返しつつその場で飛び跳ね始めた。さらにその様子を見て、アカは一層笑いに拍車をかける。そんな二人とは対照的に、俺はもう一度深く溜息をついた。

まさか、こんな展開になろうとは……。

面倒だ、という俺の素直な思いが肺から空気を押し出す。だが同時に、それとは違う考えも、俺の中には渦巻いていた。

しかし、もしかしたら鬼について詳しく分かるのかもしれないな。

その両極の気持ちに挟まれ、俺は三度溜息を漏らした。

第二話 第二幕

アカがうちのアパートを訪れてから、数日が経った頃。俺は休日を利用して、グーラ、アカと共に電車に乗り込んでいた。

目的地は、グーラの故郷だというT市。それは俺の住む街からも近く、鈍行で十数分程度の所だ。

「久々の里帰りはどんな気持ちかな、グーラ？」

ボックス席でグーラの真正面に座っていたアカが、ビール片手にそう尋ねた。それに対しグーラは、横に座る俺の服の裾をギュッと掴み、小さくいつものフリースを口にする。

電車の中では、グーラは珍しく終始大人しかった。いつだったか、バスに乗った時は騒音並みにうるさかったというのに。

やはりグーラとはいえ、一ヶ月ぶりに実家に戻るといっなのは緊張するものなのか。しかも喧嘩が原因で家出したのだから、余計にそうなのだろう。

「……………」

俺は何も言わず、グーラの頭にポンッと手を置いた。するとグーラは少し落ち着いた様子で、「あーうー」と短く呟いた。

目的地に辿り着いた俺は、その駅前で、そこから見える町並みをフツと眺めた。

当然ではあるが、そこは普通の町だった。特にこれといった特色もない、田舎の町だ。俺の地元と大差ない。

「後はここからバスに乗れば、グーラの家はすぐだよ。……おつ、ちょうど来たみたいだね」

アカが指差す先では、ちょうど一台のバスが駅前のロータリーに入ってくるところであった。俺達はそのままバスの発着場まで行くと、それに乗車した。

いよいよグーラの家、か。

そう思うと、ようやく俺の中にも緊張感のようなものが生まれ始めた。

ご機嫌な様子で勝手に喋り続けるアカとは対照的に、俺とグーラはしばらく口を閉ざし、頬杖をつきながら流れていく外の風景を見ていた。

バスを降りた先は、小さな集落のような所だった。辺りには十数軒の住居と、田んぼと畑。それから、小高い山が集落を見守るよううにしてそびえているのみである。

そしてそんな集落の奥の方に、グーラの実家 『起福寺』はあった。

「グーラって、お寺の娘だったのか……」

その意外さに、俺は寺の門をくぐりながらポツンと呟いた。

門のすぐ近くには、落ち着いた雰囲気の出派な本堂と、巨大な釣り鐘。奥の方には、まさに田舎の家という感じの木造一戸建てと、それと併せて建てられている二階建ての宿舎のようなものが見て取れる。

「どう、グーラ？ 懐かしい？」

「んー。でもー、なんも変わってねーなー」

「ぶっははっ！ そりゃそうだよ、一ヶ月しか経ってないんだからさ」

ケラケラケラケラ アカは笑いだす。

と、その時、向こうの一戸建てから誰かが出てくるのが目に入った。出てきたのは、割烹着を身に纏った女性だ。女性は俺達の姿を見るやいなや、早足でこちらに歩み寄ってきた。

「ああ！ おかえりなさい、グーラ！」

ガバツと 女性は俺の横を通り抜け、そのままグーラに抱きついた。それに対し、グーラも嫌そうな顔は一切見せず、その女性に自身の体を預ける。

「あーうー。ただいまー、おかーさんー」

「うん、うん。おかえり……おかえりなさい、グーラ」

どうやらグーラの母親らしいその女性は、ギュツとグーラを抱きしめたままで、愛しい娘の頭を何遍も撫で回す。娘の方は少しくすぐったがりながらも、一心にそれを受け続けていた。

と、しばらくして不意に女性は愛撫をやめると、静かにグーラから手を放し、俺の方に顔を向けた。

女性は黒髪と白い肌を持った、とても綺麗な風貌をしている。その見た目は グーラの母親であれば、それなりに御歳も召しているはずなのに 俺と同年代と言われても、疑問に感じられない程に若々しかった。

「はじめまして、信太郎さん。私はグーラの母、モミジと申します」

「あつ、ど、どうも、はじめまして。小野塚信太郎です……」

物腰柔らかく まさに大和撫子といった感じのモミジさん。その美しくお辞儀をする姿に、俺は思わず見惚れて、同時に戸惑ってしまった。

「あら、そんな緊張なならないで」

俺の緊張を見取ったモミジさんは、クスリと微笑む。

「アカから電話で聞きました。あなたはグーラの恩人……なれば、私にとつても恩人です。その礼と言つてはなんですが、今日は精一杯お持て成しをさせていただきますね」

「はあ、どうも……」

お持て成し、か。おそらく昼食くらいは御馳走させていただけるのだろう。それにしても恩人と言われると、何だかむず痒いものがあるな。

「それでは、こちらへどうぞ。主人も礼の言葉を述べたいと言っておりましたので」

モミジさんに促されるまま、俺は本堂の方へと足を進めようとする。

しかしその時、ふと後ろから視線が突き刺さってくるのを感じた俺は、首だけで何気なくそちらの方に振り返った。すると、そこにいたのは

「お、小野塚君……？」

「つて……えっ？ 木崎さん！？」

俺は目を丸くした。そこにいたのは、大学で俺と同じゼミに所属している、木崎悠美さんだったのだ。

木崎さんは半袖の白いＴシャツと短パンを身に付け、細い腕で大きなクーラーボックスを抱えていた。激しい陽射しのせいか、その頬はほのかに赤い。

何故、木崎さんがここにいるんだ？

素直にそう思った俺は、彼女に向かって、そのまま疑問を口にした。

「あ、あの……サークルの合宿で、こちらのお寺さんに……」

まったくもって、なんという偶然だろうか。そういえば、以前グーラとゲームセンターに出掛けた時も、その場で木崎さんとバツタリ出くわしたんだっただな。

「お、小野塚君こそ、どうして……？」

「俺は、えっと……」

下手に嘘を言って誤魔化す必要もないだろう。そう判断した俺は、正直にここがグーラの実家であることを木崎さんに告げた。

すると木崎さんは驚いたように目をしばたかせ、俺の横にいるグーラに視線を落とした。

「そ、そうなんだ……。あれ？ で、でもグーラちゃんって、お父さんがヨーロッパの方なんじゃ……？」

あっ！ しまった……。そういえば木崎さんには、グーラは外国人とのハーフだと言っていたんだっただな。うぬっ……。なんて誤魔化そう？ と、その時だった。今まで少し離れた位置で俺達の会話を窺って

いたモミジさんが、突然木崎さんに向けて口を開いた。

「ええ、そうよ。うちの主人は海外の出身で、この寺には婿として入ったの。まあ、少し顔が東洋人寄りだから、気づきにくかったかもしれないわね」

モミジさんは口元を手で隠すと、ウフフと静かに笑った。そして、チラリと目だけを、一瞬俺の方に向けた。

その目線で俺は気づいた。モミジさんは、俺のためにわざわざ話を合わせてくれているのだ。つまり、あの木崎さんの一言だけで、俺が彼女に嘘を吐いていたということを見抜いたのである。

一方、モミジさんの言葉で木崎さんは顔を赤くすると、クーラーボックスを持ったまま、慌てて頭を下げだした。

「あ、す、すいません！ その……お寺の住職さんということで、勝手に日本人だと思い込んでしまつて……」

「あら、いいのよ。確かに、外国人で寺の住職を務めているというのは珍しいものね。それに日本人だと思っていたいた方が、主人は喜ぶわ。あの人、日本が大好きだから」

クスクスと笑うモミジさん。同じ『笑う』でもアカのそれとは違い、とても上品で、奥ゆかしさが感じられた。

だが、恐らくこの人も、人間ではない……。俺の横でボーっと宙を見つめている少女と同じ、喰人鬼のはずだ。しかし中々どうして俺にはモミジさんが鬼だとはとも思えなかった。どうしても、彼女が美しい日本女性にしか見えないのだ。

そして、それはアカも同じだった。常に無礼講状態のアル中だが、彼女も傍から見れば普通の人間と変わりはない。

もちろん見た目だけで言えばグーラもそうなのだが、やはりこの二人は、グーラとは何かが違っていた。言葉遣いとか全体の幼さ以外に、何かが決定的に……。

そんな時、門の方から木崎さんと呼ぶ女の声が出た。

「ちよつと悠美、早くドリンク持つて来てよー！」

「ふえあ！？ あ、ご、ごめん！」

木崎さんはその声（おそらくサークルの仲間だろう）に返答すると、

「あ、あの……ま、マネージャーの仕事があるので、これで失礼します」の言葉と共に、モミジさんに頭を下げた。

「そ、それじゃあ、その……小野塚君とグーラちゃんも」

「ああ、うん。またね」

俺が軽く片手を上げてサヨナラの意を示すと、木崎さんはコクンと頷き、そのまま慌てた様子で足早に門の向こうへと去っていった。

「……さて。それでは本堂の方に参りましょうか、信太郎さん」

木崎さんがいなくなり、モミジさんはスツと手で、俺に動くよう促した。俺はそれに頷くと、モミジさんの案内の下、やや緊張した足取りで本堂を目指し再び歩き始めた。

ギョツと 歩きながら、グーラが俺の服の裾を掴んだ。

本堂に入ってから通されたのは、畳が敷かれ、その上に木目の綺麗なテーブルと座布団が置かれただけの、シンプルな内装の部屋であつた。

他に何か特徴はないものかと、俺はテーブル前の座布団に胡坐を掻きながら、軽く辺りを見回してみる。

前方の壁には、水墨画が描かれた一枚の掛け軸が飾られていた。その逆方向と左方向には無地の襖があり、両方ともピタリと閉じられている。右側からはガラス戸越しに外の風景が窺え、そしてすぐ目の前のテーブル上には、冷たい麦茶が布のコースターを間に挟んで置かれていた。

「……なあ、アカ。モミジさんも、喰人鬼……なんだよな？」

モミジさんが旦那さんと呼びに行っている間に、俺は後方で足を伸び伸びとさせているアカに向かって、そう尋ねた。するとアカは、

「そつだよ」の言葉と共に、コクリと首を振った。

「当たり前だろ、グーラの親なんだからさ」

「……そう、だよな……」

返しながら、俺は横でチョココンと座っているグーラに目を落とした。

グーラは一見、いつもと変わらぬ様子だった。いつもと同じで、その焦点の合わぬ目で、何処か明後日の方向を見つめている。

だが、よくよく見るとその顔には、うつすらと緊張の二文字が刻まれていた。一ヶ月ぶりに喧嘩別れをした父親と再会　ここに来る途中もそうだったが、さすがのグーラでも平静ではいられないらしかった。

「……ところでさ、信太郎」

「うん？　何だ？」

不意のアカの呼びかけに、俺は麦茶を口に含みつつ反応を示した。グーラを見ると、こちらよりも一層喉が渴いてきてしまったのだ。

「さっきの……木崎だっけ？　あの子ってさ、信太郎の彼女？」

「ぶほっ！？」

いきなり飛んできた予想の斜め上から脇腹を挟り込んでくる質問に、俺は思わず麦茶を嘔き出した。しかも口からだけでなく鼻からも僅かに出ていってしまったために、その奥がツーンと痛くなる。

そのうえ気管にも数滴入ってしまったものだから、意図せず俺はゲホゲホと咳き込んでしまった。

そんな俺の様子が面白かったのか、アカはケタケタと笑いながら、「信太郎、汚い」と、こちらを指差しながら囃し立てた。

「お、お前がいきなり変なこと言うからだろ！」

部屋の隅にあったティッシュを使い、テーブルに飛び散ってしまった液体を拭き取りつつ、俺は反論する。

「そんな変なこと言っていないよ。女ってのは、どんな時でも色恋沙汰が気になっちゃうものなんだからさ」

「どんな時でもって、それにしたってタイミングがあるだろ！」

「あはは。まあまあ、ちょっとした冗談なんだから、そんなに怒らないでよ。それに、ほら」

アカが顎でグーラを指す。目を移すと、グーラはこちらを見ながら、両手を小さく上下に揺れ動かしていた。

「あーうー。しんたろーとあかねえ、楽しそうー」

そう言うグーラの顔からは、不思議と、先程よりも緊張の色が薄れているように見受けられた。

「信太郎も、どう？　少しはリラックス出来た？」

「アカ……」

そうか。アカは、俺とグーラの緊張をほぐすために、わざと場違いな発言をしてくれたのか。たしかに、俺も今の流れのお陰で、しばらく平常に戻れた気がする。これは、感謝しておいた方がいいな。

「アカ、ありが」

「んでさ、あの木崎って子は信太郎の彼女さんなの？　ほらほら、早く教えなよ」

「……お前……」

溜息一つ。そしてニヒヒツと笑うアカに対して、俺は口を閉ざした。

それからしばらくして　不意に、スツと左側の襖が開けられた。そしてそこから現れた人物に、俺達は思わず身を固くした。

白っぽい作務衣を着た、三十代半ばといった感じの男性。背丈はかなり高く、百八十……いや、百九十はあるだろうか。細身だがガツチリとした体格で、頭髪はない。彫りの深い凛々しい顔立ちに、太くキリつとした眉が印象的だ。

「お待たせしてしまって申し訳ない。裏山の畑を見に行ってしまったもので……」

男はそう言いながら小さく頭を下げると、テーブルを挟んだ俺の向かいに腰を下ろした。そのピンとした背筋、姿勢に釣られて、俺も思わず胡坐から男と同じ正座に切り替えてしまう。

なるほど山に行っていたと言うだけあり、その額には玉のような汗を滲ませ、さらに衣の方には染みが点々と出来ていた。

「……あの、あなたが……？」

「はい。私がグーラの父、テンドウです。この度は娘が大変世話になったそうで……本当にありがとうございます」

そう言つと、テンドウさんは座ったままで、もう一度頭を下げた。そうして再び頭を上げると、次は俺の横にいるグーラに目を向ける。
「グーラ……おかえり」

「……ただいまー、おとーさんー」

テンドウさんがフツと見せた笑顔に、グーラは未だ微かに抱いていた不安を、今まさに完全に払拭したようであった。その顔からは緊張が消え、ホツと安堵するように息をつく。

だがその一方で、俺は一向に気持ちを平常に戻せないままだった。せつかくアカに一度ほぐしてもらったというのに、まるで意味がない。

するとそんな俺の様子を感じ取ったのか、テンドウさんは微笑んだままで口を開いた。

「ハハッ。信太郎君、もっと楽にするといい。どうぞ、足も伸ばして」

「あ……す、すみません」

その言葉で、俺は再び胡坐に戻った。だが、それでも背筋だけは努めてピンとさせる。

ほぼ間違いなく、俺は目の前の男に、ある種の畏怖の念を持っていた。実際に経験したことはないが、『彼女』の親に挨拶をする時の感覚に、幾らか似ているのかもしれない。

「……時に信太郎君。キミは、何が好物なのかな？」

「え……えっ！？ こ、好物……ですか？」

それは意外な質問だった。会って間もないのに、いきなり好物を尋ねられるなんて、完全に予想外だったのだ。

「いや、お礼というほどではないんだが……せめて今晚は、恩人であるキミに美味しいものを食べてもらいたいと思ってね」

「は、はあ……ありがとうございます」

昼食くらいは頂けるだろうと思っていたが、どうやら向こうは晩飯まで御馳走してくれるつもりらしい。

と、俺がテンドウさんに言葉を返していると、横に座っていたグーラが急に、

「ねーこー！ グーラ、ねこ食べたいー！」と言って、ウキウキと体を揺らし始めた。

グーラ……こいつは不安が無くなった途端にこれか……。しかも猫は食べないと約束したはずだろう。

そう思っただけが溜息を漏らしていると、テンドウさんが顎に手をやりながら、うーん、と短く唸った。

「猫か……。でもなあ、グーラは猫に勝手にマヨネーズ付けるからなあ」

「あーうー。ねこにはマヨネーズだよー。ねこマヨー」

「いいや、猫には中農ソースと昔から決まっている！ 信太郎君とアカも、そう思うだろう？」

「へっ……！？」

まさかこの話が続くとは思ってもおらず、しかもソレをいきなり自分の方へと振られたものだから、俺は当然の如く声を詰まらせた。するとそんな俺の後方から、さらに追い打ちをかけるような言葉が飛ぶ。

「あ、すいませーん、おじさん。アタシ、バター醤油派なんで」

「むっ、そうか……。では、信太郎君は？ 信太郎君はもちろん中農ソース派だよね？」

「い、いや、俺は……」

テーブルから身を乗り出してグッと前に出てくるテンドウさんに

気圧されて、俺は口元を引き攣らせながら上半身をのけ反らせる。

すると不意に テンドウさんはハツと我に返った様子で、気ま
ずそうに元の位置に座り直した。

「すまなかつた、信太郎君……。変な話をして申し訳ない」

そう言つて、テンドウさんはこちらに向かつて深々と頭を垂れる。

正直、頭を下げられても困るのだが……。

「いや、大丈夫です。気にしないでください」

「……そうかい？ そう言つてくれると、有り難いよ」

ふう、と小さく一息をついて、テンドウさんはゆっくりと顔を上げ
た。

……それにしても、やはりこの人も、鬼なのか。……当然だ、グ
ーラの親なのだから。だが、テンドウさんも他の二人と同様に、グ
ーラとは何かが違つていた。

と、その時、ふとテンドウさんがグーラに言葉を放った。

「そうだ、グーラ。ちよつと、母さんを手伝いに行つてやつてくれ
ないか？」

「あーうー？ 手伝いー？」

「ああ。今頃、きつと昼食の準備をしているだろうからね。グーラ
も、早くご飯を食べたいだろ？」

「んー、わかつたー」

コクコクと首を縦に振ると、グーラは勢いよく立ち上がった。そ
してそのまま左側の襖を開け放つと、風のように素早く部屋を飛び
出して行つた。

ドタドタという騒がしい足音が、次第に遠ざかつていく。

すると次は、後ろでずっと酒を呷っていたア力が、おもむろに腰
を上げた。

「んじゃ、アタシもちよつと出てくるわ」

「え？ どこ行くんだよ？」

「あー……その……そう、お酒買いに行ってくるんだよ。今のうちから、よく冷やしとかないかね」

アカは喋りながら俺の横を通ると、先程グーラも通過して行った敷居をまたいだところで、クルリと振り返った。

「じゃあ、また後で」

軽く片手を上げてから、アカは開けっぱなしになっていた襖をスツと閉めた。襖の向こうから、人が歩いて行く音が小さく聞こえた。そして気が付けば、部屋には俺とテンドウさんの二人だけになっていた。未だ委縮していた俺の心が、シユンと、さらに縮むのを感じる。

けれども、緊張しているのは、どうやらテンドウさんも同じようであった。その証拠に、態度にこそ出てはいないが、額にうっすらと新しい汗が滲み出ている。

それからしばらく、男二人の間には微妙な沈黙が流れた。その間、テンドウさんは何かを考え悩むように眉をひそめ、一方で俺は、この状況で自分がどうしたら良いものか分からずに途方に暮れていた。もしかしたら、昼食の用意が出来るまで、このまま互いに黙ったままなのか。そんな重苦しい不安が頭をよぎる。

しかし、その沈黙を不意にテンドウさんが破った。

「……信太郎君」

さっきまでとは異なる、低く押し殺したような声。さらにテンドウさんは、すぐに言葉は続けずに、ジツと真正面から俺の目を見据えてきた。

「……何ですか？」

一瞬、目を逸らそうかとも思った。だが一心に見つめてくるテンドウさんの瞳にただならぬものを感じ、俺はあえて、それを真っ向から受け取った。

「実は、キミに頼みたいことがあるんだ」

「え？ 頼みたいこと……ですか？」

「ああ……」

小さく頷いたかと思うと、テンドウさんはモゴモゴと口ごもった。よほど言いにくいことなのか、何度も言おうか言つまいかという悩みの表情を見せる。

それからは、また沈黙だった。俺はテンドウさんが再び口を開くのを、ただジッと背筋を伸ばした状態で待つ。ピリピリとした緊張感が、俺の肌を突つついた。

「……信太郎君」

もう一度、テンドウさんが沈黙を破る。その声は先程よりも掠れ気味ではあったが、目には決心の色が灯っていた。

はい　と、俺は短く相槌を打ち、テンドウさんに続けるよう促す。

すると次の瞬間、テンドウさんは座ったままの状態ですスツと二、三步ほど下がると、前傾姿勢で畳に両手を着き、

「信太郎君、頼む！　あの子に……グーラに食べられてくれ！！」
そのまま、額を畳に擦りつけた。

俺は何を言われたのかを理解できず、呆け、言葉を失った。少しして、ようやく意識を取り戻し、今しがた告げられた台詞を心の中で反芻する。しかしいくら噛み直しても、今一つその言葉の意味が分からないままであった。

「あの……え、っと……食べ……って、その……？」

「……そうだね。いきなりこんなことを言われても、混乱するに決まっている……」

依然、最大級の懇願のポーズを取ったままで固まっていたテンドウさんは、ゆっくりと体を起こした。そしてもう一度、先程まで使用していた座布団の上に座り直す。

「すまない。少々、焦り過ぎていたようだ」

「あ、いえ……。で、さっきの……」

「ああ、今から説明するよ。最初から、ね」

コホンと、咳払いを一つ。そしてテンドウさんは、おもむろに口を開いた。

「キミは、グーラのことを妙だとは思わないかい？」

「妙、と言うと？」

「そうだな……。一言で表せば、『幼い』に尽きるかな」

「ああ、それなら」

グーラが異様に幼いというのは、彼女と出会った時から感じていた。見た目は中学生くらいなのに、その言動たるや小学校の低学年か、もしくはそれ以下なのだ。

しかし俺は今まで、それを特に気にすることはなかった。鬼というのはそういうものなんだろう　アカと会うまでは、そう思っていたからだ。

「あの幼さには理由があるんだ。我々……人間とは違う、鬼の理由がね」

少し間を置いて、テンドウさんは続ける。

「大昔、鬼というのは愚かな生き物だった。人よりも遙かに低い知能で、ただ本能に身を任せるだけの、獣だった。それがあある時、とあるモノを食した途端に、彼らは『考える頭』を得たんだ」

「……とある、モノ？」

「……人間だよ」

その単語に、俺は思わず息を呑んだ。しかし、テンドウさんはそんな俺を気にかけることなく、さらに続ける。

「そして現代　。我々は長い時間の中で、人間と同程度にまで脳を発達させた。しかし、それでもやはり鬼は鬼。人間のようになれはしたが、我々は決して人間にはなれない」

そう静かに語るテンドウさんだったが、語尾に近づくにつれて、その声は段々と小さくなっていった。同時に、部屋を包み込む異様な緊張感からか、咳払いを繰り返すようになっていく。

そんなテンドウさんに、俺は自分の目の前にある麦茶を飲むように勧めた。

それはキミのために用意されたものだ　そう言っ最初は拒んでいたテンドウさんだったが、次第に喉の渇きに耐えられなくなり、

最終的に彼は申し訳なさそうにそれを受け取った。

露のたっぷりついたコップに注がれている少し温くなってしまった麦茶を、テンドウさんは一気に飲み干す。半分以上残っていたのに、その全てを飲んでしまうとは、よほど口の中が渴き切っていたのだろう。

「……ふう。すまない、信太郎君。ありがとう」

コップを再びテーブルの上に戻しながら、テンドウさんは俺に向かって礼を言った。

「いえ。それで、話の続きは……」

コクリと頷き、テンドウさんは話を再開した。

「幾らか頭が良くなっても、我々は所詮、本能に生きる獣だ。だから我々は人間社会に隠れ溶け込んでいく為に、幼少期に『理性』を得る。……どうやってかは、言わなくても分かるかな？」

「……人間を食べて、ですか？」

自分で言いながら、少しゾツとした。

「その通りだ。私も、妻も、そしてアカも……小さい頃に人間を食べ、そして理性を得た」

言いながら、テンドウさんは自身のこめかみの辺りを、人差し指でトンツと叩いた。おそらくその指差す先は、『知』の象徴とも言える脳であろう。

「だが、グーラは……あの子は、未だそれを経験していない。グーラの年であれば、とっくに通過しておかなければならないというのに、だ」

「……なるほど。それで、俺にあんなことを頼んできたんですね。でも、何で俺なんですか？」

俺は率直に、自分の抱く疑問を口にした。

グーラが理性を得るために、人間を食べなければいけないというのは分かった。が、何故その相手に俺を選んだのか。それが分からなかった。何か特別な理由があるのか？ それともただ単純に、俺が手頃だからなのか？

「それなんだが、ただ人間を食べればいいというわけではないんだ。食べる本人が思い入れを持つ、特別な人間でないと駄目なんだ」

「特別な人間って……俺が、ですか？」

「ああ。キミは、一ヶ月近くもグーラと共に過ごしてきた。十分『特別』に値すると、私は考えている」

そう言つて、テンドウさんはジッと、熱い眼差しで俺を射抜いてきた。先程、同じように見つめられた時にはそれを受け取った俺だったが、今度はその視線から目をサツと逸らした。

その状態で、俺は次の疑問を口から出す。

「そもそも、本当に『理性がない』んですか？ グーラは確かにちよつと変わったところもありますが、動物と一緒にには見えません」

「……信太郎君は、グーラの中の『鬼』を見たことがあるかい？」
「えっ？」

グーラの中の『鬼』 その言葉で、俺はふと、先日のアミューズメント施設での一件を思い出した。

「確かにキミの言う通り、グーラと動物は完全にイコールではない。あの子にも少なからずとも、理性はある。だが、それは『僅かな』理性だ。そんなものでは、ふとした切っ掛けで本能に支配されてしまう。我々に必要なのは、本能を完全に押さえつけるだけの理性なんだよ」

言い終わると、テンドウさんはおもむろに立ち上がった。その巨体の高い位置に取り付けられた双眸で俺を捉えたまま、彼はテーブルを迂回し、俺の目の前で静かに正座をする。

そして前方に向かって八の字に手を置くと、前屈みの状態のまま、再び口を開いた。

「私はあの子に……グーラに、普通の生活を送ってもらいたいんだ。普通の、人間のような生活を……。勝手なことを言っているのは分かっている。だが、キミしかいないんだ！ キミしか、グーラに理性を与えることは出来ないんだ！」

次の瞬間、テンドウさんは頭を下げた。

「信太郎君、頼む！！ 食べるといっても、命まで取るわけじゃない。足……いや、腕一本で十分なんだ！ あの子のために、信太郎君の腕を譲ってくれっ！！」

その姿は、必死と言う他なかった。自分の娘のために、プライドなどという邪魔なものは全て捨て去り、テンドウさんは若造である俺に向かって土下座を続けたのである。

なのに、俺はそれに何の反応も示さなかった。肯定も、否定の意思すらも見せることはなかった。ただジッと、懇願しているテンドウさんの姿を黙って見つめていた。

どうしてだろうか……。俺は、悩んでいた。

「……悩んでくれて、ありがとう」

少し時が経って、不意にテンドウさんがそのままの体勢で呟いた。その声は穏やかで、同時に安堵の息を漏らしていた。

「そう、すぐに結論を出す必要はないんだ。是非とも、ゆっくり考えてくれ」

テンドウさんはゆっくりと面を上げた。言いたいことを全部言い切ったが故だろうか、その口元には微かな笑みを浮かべ、先と同じ余裕を持った大人の顔に戻っていた。

その一方で、テンドウさんに短く相槌を打つ俺の顔には、うつすらと陰りが現れ始めた。

何故、俺は悩んでしまったんだろう……。

その後悔にも似た思いが正直に表情に出てしまった気がして、俺はサッとうつむいた。

と、その時、遠くから聞き覚えのある騒がしい足音が響いてきた。その足音が段々と近づいてくるので、俺とテンドウさんは、ほぼ同時に一番近くの襖に目を向ける。

すると次の瞬間、足音がピタッと止んだかと思うと、スパッツという気持ちのいい音を立てながら襖を開け放たれ、グーラが姿を現

した。

グーラは、その焦点の合わない目で俺達を確認すると、緊張感の欠片もない口調で喋り始めた。

「二人ともー、ごはんできたぞー」

「おお、そうか。よし、では行こうか、信太郎君」

テンドウさんは素早く立ち上がると、未だ腰を下ろしたままの俺に、その大きな手を差し出した。

俺は数瞬、その手を見つめていた。そしてテンドウさんが親切で出してくれてくれたというのに、結局、俺は自分だけの力で腰を上げた。

勝手な思い込みだが、この手を取ることはつまり『肯定』を意味することになってしまふ気がしたのである。

「ああ、そうそう。普通は謙遜するところをあえて言わせてもらうが、妻が作る料理はとても美味いぞ。信太郎君、期待してくれ」

ハハハッと、白い歯を見せて笑うテンドウさんは、俺の無礼などこれっぽっちも気にしていない様子であった。これが大人というものか　と、俺は心の中で密かに思う。

そのまま、グイグイと腕を引っ張っていくグーラに連れられ、俺達は畳の部屋を後にした。

第二話 第三幕

あれから幾ばくか時間が経ち、既に深夜と言っても差し支えのないような時刻になった頃。

俺は一人、釣り鐘に通じる短い石段に腰を下ろしていた。辺り一面が真つ暗闇な中で、どこからともなく虫の鳴き声だけが聞こえてくる。

あの後、あれよあれよと様々な持て成しを受けた俺は、結局夕飯を御馳走になるだけでは済まず、この寺に一泊させていただくことになってしまった。

「……腕、か」

自分の左腕をボーッと眺めながら、ポツリと呟く。俺は何故か、未だに自分がどうすればいいのかを悩んでいた。

その時、ふと俺の名前を呼ぶ声がした。辺りを見回すと、石段の前に、片手にビール缶を持ったアカが立っていた。

「こんなところで何してんの？」

若干ふらふらとした足取りでアカは石段を上り、そのまま俺の横に腰を下ろす。途端に、周りがアルコールの独特な匂いに包まれた。

「別に、何でもない……」

「そう？ な〜んか、悩んでるように見えるけど？」

陽気に笑いながら、アカは見事に俺の心中を言い当てた。しかし、そのことに対して、俺が特に驚くような素振りを見せることはない。その代わりに、俺は小さな棘を付けたような口調で彼女に尋ねた。

「お前、最初から分かってたんだろ？ テンドウさんが、グーラの話をするって」

「ああ、うん。まあね」

悪びれた様子も見せずに、アカはあっさりと頷いてみせた。その態度に、俺はついムツとしてしまう。

「何ですつと黙ってたんだよ？ 最初、うちに来た時にでも言えば

よかったじゃないか」

「そんなの、アタシが話すことじゃなかったからさ。それにあの時は、グーラもいたしね」

その言葉に、俺はハッとなった。

そういえばテンドウさんも例の話をする前、グーラに用事を与えて、あいつを部屋から出していたが　あの話は、グーラに聞かれると何かまずいことがあるのだろうか？　グーラも当事者の一人だというのに？

と、そんな俺の考えを読み取ったのか、アカはゴキユツと喉を潤しながら静かに口を開いた。

「グーラは父親との喧嘩の末に家出した　って、前に言ったよね？」

「あ、ああ……」

「その喧嘩の原因が、おじさんが信太郎にした話にあるんだよ。だからグーラの前で、あの話をするわけにはいかないのさ」

そう言うのと、アカは再び酒を呷った。すると、その目は珍しく伏せ気味になり、彼女は深く長い息をつく。その様は、まるで暗い過去を思い出しているかのようであった。

「一体、あの二人に何があっただんだ？」

そんなアカに、俺は単刀直入に尋ねた。

あくまで余所者である俺が聞くようなことではないとも思ったが、それ以上に気になってしまったのだ。あの仲の良さそうな親子の間に起こった、喧嘩の理由を　。

案の定、アカは少し戸惑ったような反応を見せた。ポリポリと自身の頭を掻き、ウーンと、唸り声を上げる。

「それ……アタシが言っちゃっていいのかなあ？　本人に聞いた方が……」

「グーラが家出までしたほどの喧嘩だろ？　それを本人に直接聞くなんて、それこそ酷じゃないか？」

「んー……いや、まあ、そうかなあ……。じゃあ、アタシが喋った

って言わないでくれる？」

アカの言葉に、俺は即座に首を縦に振ることで答えた。

「ははっ……。そうだなあ、どこから話せばいいかな……」

わざとらしく少し渴いた笑いをすると、続けて小さな溜息と共に、アカはゆっくりと話し始めた。

「グーラにはさ、同じ年の幼馴染みがいたんだ。その子は人間だったんだけどね、二人はすごく仲良しだったんだよ。何をするにも一緒で……そして何をしてても、二人とも、ホントに楽しそうだった……」

そう語るアカの口元には、ニンマリと笑みが浮かんでいた。さらに、その目は何かを懐かしむように遠くを見つめ、度々、ホウツと息が漏れる。

もはやアカの表情だけで、グーラとその幼馴染みがどれだけ仲が良く、また彼女達の戯れている光景が、どれほど微笑ましいものであったかが窺えた。

だが、そんなアカの顔に、不意に陰が生まれた。かと思うと、口角は下がり、両目は伏せられ、たちまちに彼女は寂しそうな表情になる。アカでもこんな顔をするのか、そう思わせるほどの変貌ぶりだ。

「でもさ、ある日……その幼馴染みの子の家が、火事になっちゃったんだよね……」

グイッと、アカは缶の中身を飲み干した。

「え……？　そ、それで、その子は？」

「亡くなった」

アカはあっさりと、そう言った。抑揚のない口調で、淡々と。おそらくは、そうでもしないと当時のことを思い出し過ぎてしまうのだろうか。先程の様子から見ても、どうやらアカ自身も、その亡くなった子とは仲が良かったようであるし……。

しかし、今更ここで話を終わらせるわけにもいかない。俺はアカに向かって、話を続けるよう軽く促した。

「その子の通夜が終わり、葬式が終わり……そして皆が、少しずつ日常へと戻っていく頃。不意に、二人の喧嘩が始まった。発端は、おじさんの愚痴さ」

「愚痴？」

意外だった。あのテンドウさんが愚痴をこぼしているという様子が、容易には思い浮かばなかった。

「そつ、愚痴。グーラの『理性』が遠のいてしまった。そう言ったらしいよ」

「理性つて、どういう……あつ！もしかしてテンドウさんは……」
「そう、信太郎の思ってる通り。おじさんはその幼馴染みの子に、グーラに食べられてもらおうと考えてたのさ」

それを聞いた俺は、テンドウさんが言っていた『食べられる条件』を思い出していた。その条件とは、鬼自身が思い入れを持つ特別な人間であること。グーラの幼馴染みで仲も良かったというその子は、特別な人間であると言えないわけがなかった。

「グーラにはさ、親友を自分に食べさせようとしていた父親が、どうにも嫌に感じられたらしいよ。『理性』って呼ばれ方も、きつと癪に障ったんだろうね。なのに、おじさんときたら……ことあるごとに、新しい『人間』の友達を作れなんて言っちゃってさ。それで、グーラは怒って家出したんだよ」

アタシが知ってる話はこれで終わり。そう最後に付け加えたアタシの様子は、すっかり元に戻っていた。笑ってこそはいないものの、「皮肉にも、親が娘を思う気持ち裏目に出ちゃったんだよね」などと冗談めかしく言うほどである。

一方、アタシの話聞き終えた俺は口元に手を当てると、少し猫背になりながら自分の考えを巡らせ始めた。

グーラは単純な奴だ。俺はずっと、そう思っていた。変で、悩み事なんかなさそうで、お気楽。そんな奴だ、と。

でも今の話を聞く限り、それは大きく違った。

あいつは、確かに変わってはいる。だがそれは側面だけで、グー

ラは、普通の女の子だった。親友のことで怒り、たとえその相手が親であっても齒向かう　年相応な、友達想いの女の子なんだ。

……そんな彼女は今、『理性』についてどう思っているのだろうか？　おそらくはテンドウさんと喧嘩した時と変わらず、親友を食べるまで欲しくなんかない　そう思っているんじゃないだろうか。では、俺は？　俺が相手なら……グーラは、『理性』を欲しがるのだろうか？

「グーラは……グーラ自身は、『理性』が欲しいと思ってるのか？」丸くした背を伸ばしながら、俺は問いかける。

アカは、ン〜と、短く唸りながら、

「それは、本人に聞いたらどうかな？」

そう言って、微笑混じりに前方を顎でクイツと指した。

すると、それと同時に、俺の耳に聞き覚えのある声が飛び込んできた。

「あーうー。しんたろーとあかねえ、いたー。二人とも、こんなところにいるのかー」

噂をすれば何とやら。石段の前　そこには、いつもと変わらぬ様子のグーラが立っていた。グーラは嬉しそうに両手をブンブンと振ると、軽い足取りで俺達のすぐ目の前にまでやって来る。

「二人で何やってんだー？　グーラも遊ぶー」

ちよこんと石段の上でしゃがみ込み、彼女は俺の手をグイツと取った。俺は一瞬よろけかけてしまうが、何とかそれを堪える。

グーラに引つ張られながら、俺はほんの少しだけ動揺していた。もしかしたら、今の話を聞かれていたんじゃないか　そんな考えが、頭をよぎった。

と、その時、横にいたアカが俺に向かって視線を送ってきた。何かを促すような視線　それが何を言っているのか分かった時、俺は思わず身を固くした。

「……しんたろー？ どうしたんだー？」

俺の些細な変化に気付いたグーラは、小首をかしげて、俺の顔を覗き込んできた。その焦点の合わぬボーっとした両目が、俺を包むゴクン 俺は唾を飲み込み、意を決した。グーラの腕を逆に掴み返し、真っ直ぐにその瞳を見つめる。俺はゆっくりと口を開いた。「……グーラ。お前に聞きたいことがあるんだ」

「あーうー？」

グーラは頭上にクエスチョンマークを浮かべる。

「その……その、グーラは……」

もしも……もしもグーラがその首を縦に振ったならば、俺は。

「グーラは、『理せ』」

「ちよいストップ、信太郎」

その刹那、促した本人であるはずのアカが、いきなり俺の言葉を遮ってきた。予想だにしていなかったことに、俺は呆気にとられた。しかし、そんなことは全く気にしていないという様子で、アカはおもむろにその場で立ち上がった。怪訝そうな表情で、鼻をスンスンとしきりに動かしている。

「話の腰折って悪いんだけどさ……何か、焦げ臭くない？」

「はあ？」

俺は意図せず眉をひそめていた。決死の覚悟をあっさりと潰されたのが、どうしても快く思えなかったのだ。

だが、そんな俺の嫌悪感はずぐに消えてなくなった。俺の嗅覚も、アカが言っているのであろっ焦げ臭さと同じものを感じ取ったのである。

俺はグーラから手を離し、アカ同様に立ち上がると、この臭いがどこから漂っているのかと辺りを見回した。鼻を頼りに右、左、と。その時、不意にアカが、アッと大きな声を上げた。

「あそこ、煙が出てるよ！」

真っ暗闇で見えづらいが、アカが指差す先には確かに白っぽい煙が立ち昇っているようであった。

そこは、ここから離れた位置にある二階建ての宿舎である。確か、木崎さんが所属しているサークルの皆が宿泊している筈だ。

「っ！？ あ、アカはテンドウさん達に知らせてきてくれ！」

次の瞬間、俺はアカの返答も待たずに走り出した。目指す場所は唯一つ 怪しげな煙を発する建物だ。

「あーうー。グーラも行くー」

それから僅かに遅れ、グーラもバツと腰を上げると、俺の横に並んだ。

そのまま俺達は、目的地に向けて全速力で駆けた。

光源など何一つない宿舎の裏手は暗い はずだった。

だがしかし実際には、その場所はボウツと明るかった。それもこれも、煙と共に建物の隅から上がっている赤い火のせいである。

火の無い所に煙は立たぬ。まさに文面通りの意味であった。

「……あーうー？」

パチクリと目をしばたたかせながら、グーラは首を横に傾けた。

突然のことで、何が起きているのか理解出来ていない そんな感じた。

その一方で、俺は彼女が見やっているものとは別のものに対して、目を見開いていた。

それは、人だ。木造の宿舎を侵食するように燃え盛っている火の前で、一人の男が突っ立っているのである。

男は黒いパーカーにキャップを目深にかぶり、その手には百円ライターと、中身の入っていないペットボトルを持っている。帽子のせいで、その顔色は分からない。

「あ、あんた、一体何を……？」

依然驚いたままで、俺は目の前の男に尋ねた。すると男は、こち

らの質問に答える代わりに、二、三步ほど後ずさる。

と、その時だった。俺はふと、以前にテレビで聞いたニュースのことを思い出した。それは、前々からT市で立て続けに起こっているという連続放火事件のことである。

「まさか、お前……!？」

次の瞬間、男は俺達に背を向けると、一目散にその場から逃げた。

「ち、ちよつと待て、おいッ!」

奴を逃がしてはいけない。直感的にそう思った俺は、グーラをその場に残し、男の後を追った。

幸い、奴が走るスピードはそれほど速くない。これなら俺でも追いつける。

俺は、慌てた様子で必死に逃げる男の背中に徐々に近づいていくと、ある程度行ったところでダツと地面を蹴った。そしてそのまま、男の腰の辺りに飛びつくようにして掴みかかった。

「おわっ!？」

ズザーツというような音を立てながら、男は前のめりになって地面に転がる。しかし、それは男に飛びかかった俺も同じだった。

「げほ、げほっ!」

転んだ瞬間に口の中に砂が入り込んだのを感じ、俺は思わず咳き込んだ。おそらく勢いよく地面に倒れ込んでしまったせいで、土が巻き上がってしまったのだろう。

だがしかし、男の衣服の端を掴み取っているこの手だけは放さない。せっかく放火犯かもしれない男を捕らえたというのに、再び逃がしてなるものか!

が、その考えが仇となった。

「くそっ、放せ!」

「あ……ぶあっ!？」

倒れても俺に掴まれたままだと気付いた男は、その手を放させるために、力いっぱい俺の側頭部を殴りつけてきた。さらに頬の辺

り、先程とは反対側の側頭部　と、続けざまに奴は俺を攻撃する。逃げ損ねたことで若干パニックを起こしているのか、その攻撃には一切の容赦がなかった。

「くっ……おらっ！　さっさと、放しやがれっ！！」

そしてとうとう、男が持てる力全てを込めた肘鉄が、俺の頭を貫いた。ガンッ！　という鈍い音と共に、強烈な衝撃が脳を突き抜ける。まるで電気ショックを受けたかのような痺れる痛みだ。

「がっ！？」

一瞬、俺は気を失いかけた。目の前が真っ暗になりかけた。しかし、辛うじてそれだけは免れる。だがその代わりに、俺は奴を捕まえていた手の力を、フツと弱めてしまった。

しめた、と言わんばかりに男は薄ら笑う。そして地に手を着きながら急いで立ち上がると、そのまま走り、俺の手の範囲から抜け出していった。

「ま……待てえ……！」

全身に力を入れて起き上がろうとするが、上手くいかない。下半身が地面から離れない。ただ弱々しい声が喉から漏れるだけである。若干霞む視界の中で、黒いパーカーはどんどん遠ざかっていく。追わなければならないと思っても、未だ地面を這ったままの俺ではもはや無理だ。

俺はギリッと齒軋りをすると、悔しさと諦めを一緒くたにして、硬く握った拳で地面を叩いた。

と、その次の瞬間、何かが横を走り抜けていったのを俺は感じた。風が巻き起こり、砂煙が一直線に走る。そしてその見覚えのある後ろ姿に、俺は目を張った。

「ぐ、グーラ……」

驚嘆の混じる声で、俺はその名を口にした。

グーラは俺には目もくれず、ただ真っ直ぐに駆けていく。その先には、門を目指し走るパーカーの男がいた。

「なっ……んだ、おい！？」

ものすごい速さで追ってくるグーラに気づき、男はたいそう驚いている様子だった。

そして、そんな男の背中に、グーラの跳び蹴りが炸裂した。

ダンッ！ と衝撃音が響き渡り、男は前方に向かって吹き飛ぶ。

その際にどうやら顔を地面に強く打ちつけたようで、そのまま男は動かなくなった。

一方、グーラは男とは対照的に、見事に着地してみせた。

「やつ……た……」

グーラの蹴りが入った瞬間、俺は目をパチクリさせながらも、片方の手を小さくグツと握った。しかし同時に、胸の奥でズキツとした痛みが走ったかと思うと、途端に俺の心には一つの不安が染み広がる。

グーラは何するわけでもなく、立ったままでジーっと自分が打ち倒した男の方を見ていた。つまり、こちらには背を向けていた。当然、俺にはその表情を窺い知ることはいらない。

「グーラ……？ おい、グーラ！」

嫌な予感に後押しされ、俺はつい先程まで動かなかった体を、どうにかして起き上がらせた。ズキズキと痛む頭部を手で押さえながら、彼女の名前を何度も呼ぶ。

するとその声が届いたのか、グーラはゆっくりとこちらに振り返った。

「グ……っ！？」

不安は的中していた。いつかの時と同じである。グーラの目の焦点が合っているのだ。ハッキリと、彼女が今どこに目を向けているのかが見て取れる。

その目に気圧されて、俺は思わず後ずさりをした。

「……………」

こちらに少し目をやっただけで、グーラは一言も発しなかった。そして再び俺に背を向けると、彼女は悠然と、ゆったりとした足取りで歩きだした。

「ぐ、グーラ！」

叫ぶように、俺はその名前を呼ぶ。しかし今度は、彼女がこちらを気にかけるような素振りはない。

その様子は、いつもの能天気なグーラとは明らかに違っていた。おそらくこれが、テンドウさんの言っていた『本能に支配された状態』なのだろう。どういう切っ掛けでそうなったのかは分からないが、グーラの持つ小さな理性は、巨大な本能に押し潰されてしまったのだ。

そんな本能のみの鬼は、依然として足を休めようとはしなかった。ゆっくり、ゆっくりと、地に伏したままの男の元へと向かおうとしている。

これも前と同じだ。あいつは多分、あの男を喰おうとしている。だが、そんなことをしても何の意味もない。グーラがあを食べたところで、意味など何一つないのである。

ならば今、俺がやらなければいけないことは唯一つ……！

「グーラっ……！」

俺は駆け足でグーラに近寄ると、後ろからガバツと彼女の体に腕を回し、その歩みを強引に止めさせた。しかし、それでもグーラは構わず前に進もうとする。その小さな身体に似合わぬ異常なパワーに、俺は思わず引き摺られそうになった。

だが、負けるわけにはいかない。ここで彼女を行かせたら、取り返しのつかないことになる。そんな予知にも似たものが、俺にはあった。

「グーラ！ しっかりしろ、グーラ！ グーラあッ……！」

名前とは、理性の証拠である。だから俺は、グーラが元に戻ってくれることを祈って、必死にその名前を呼び続けた。

と、その時、そんな俺の祈りが届いたのか、グーラの動きが不意に停止した。ピタツと、まるでおもちゃの電池を抜いたかのように。

そんなグーラに向かって、俺はもう一度だけ小さく名前を呼んだ。

ところがそれに対し、グーラが反応を示すことはなかった。

……もしかして、彼女はまだ元に戻ったわけではなく、ただ単に標的をパーカーの男から俺に変えただけなのではないだろうか？

嫌な考えが頭をよぎる。しかし、それは十分に考えられた。

「……………」

「……………」

沈黙が流れた。かつて、グーラと共にいて、これだけ静かだったことがあっただろうか。それもこれも、今のグーラが、ただの鬼だからなのだろうか。

……もし、まだグーラが元に戻っていなかったとすれば、俺はほぼ確実に喰われてしまうだろう。何故なら、俺の両腕は今、彼女の口のすぐ前にあるからである。グーラがその気になれば、俺の腕は彼女から離れる間もなく、ガブリ、だ。

だがそうなると、グーラには理性が宿ることになる。テンドウさんの言っていたことを信じればだが、おそらく……。

そして理性が宿りさえすれば、グーラは確実に元に戻ってくれるだろう。しかも、それだけではない。今後一切、彼女が本能に潰されることはないのだ。

そう　俺が少しでも犠牲になってしまえば、全てが丸く収まる。ならば……ならば、いつそのこと、俺は……。

「グー……ラ……」

フツと、俺はグーラを縛り付けていた両腕から力を抜いた。これでもう、グーラは自由に動けるはずだ。

……もちろん未練はある。俺にだって、将来やりたいことがある。だが不思議と、後悔の念はあまりなかった。

自然と、俺は目をつぶった。そして齒を食いしばった。食まれる痛みがどれほどのものは分からなかったが、きつと相当なものだろうという予測は容易に立ったからである。

「つぐ……………」

さあ、来るなら来い！　そう心の中で叫び、全身に力を入れた。

……しかし、何も起こらない。いつまで経っても、目蓋の裏の暗い空間が見えるだけで、周りからは何の音もしなかった。

どうなっているんだ？ グーラはまだ、動いていないのか？ それとも俺の腕をぐり抜け、再びパーカーの男に向かって歩き出しているのか？

何も分らない。分からないのが、怖い。ならば目を開けばいいだが、目を開けるのも怖かった。

けれども、それでは何も変わらない。それに、もしもパーカーの男がグーラに襲われていたとしたら、俺が止めなければいけないんだ。

俺が、グーラを。

「……グーラ！」

俺は意を決し、カツと目を開いた。その刹那、俺の視界に飛び込んできたモノ。それは、『目』だった。

「あーうー。どーしたんだー、しんたろー？」

焦点の合わない、ボーっとした印象を与える大きな目が、俺のこたを見上げていた。それは確かに、間違いなく、グーラの目であった。

「……戻っ……た？」

途端に俺の身体の各所からは、力が抜けていった。抜け過ぎて、つい膝がガクガクと笑いだす。それを、俺は両手で抑え込んだ。

そうか……グーラは、元に戻っていたのか。そうか……。

「……良かった」

「うんー？ しんたろー、何が良かったんだー？」

小首を傾げて、頭部を中心にクエスチョンマークを衛星のようにクルクルと回すグーラ。俺はそんな彼女の小さな頭にポンツと手を置くと、その金髪をクシャクシャ撫でながら、言った。

「……うん。良かった」

第二話 第四幕

こうして、巷を騒がしていた連続放火犯は捕まった。俺が未だ気絶したままの奴の体を縄で拘束し、後は警察に引き渡すだけである。しかし、これにて一件落着……というわけにはいかなかった。

「あつつう……。こりゃ、ヤバイねえ」

ぼうぼうと燃え盛る宿舎を見上げながら、ア力は呟いた。

木造の古い宿舎は予想以上によく燃えていた。俺とグーラで放火犯を追いかけていたほんの短い時間で、炎は二階部分にまで侵食し、その猛威を思ふ存分振るっていたのだ。

しかも、ここが市街地から離れた所ということもあり、消防車はまだ到着していない。

それでも幸いだったのは、発見が早かったお陰で、宿舎に泊まっていたサークルの皆は無事に避難できたということだろうか。

「本当に、皆さんが無事で良かったわ」

騒ぎを聞きつけた近所の人々が騒然とする中、ジツと炎を見つめるグーラの肩を抱いたままで、モミジさんが言った。落ち着いた大人の女性という雰囲気は、非常時でも健在である。

そんな彼女に、俺は申し訳ないという気持ちをいっぱいにして口を開いた。

「すいません、モミジさん。俺が、もっと早く気付いてれば……」

「そんな、信太郎さんのせいなんかじゃないわ。だから謝らないで。それに信太郎さんは、こんなにボロボロになりながらも犯人を捕まえてくれたじゃない」

そう言つて、モミジさんは優しく微笑んでくれた。

と、その時、本堂の方からこちらに向かって走ってくる人影が見えた。あの長身は……テンドウさんだ。その両手にバケツを持ち、それに入った水を溢さないようにして走っている。

「あ、信太郎君！ すまないが、手伝ってくれ！」

テンドウさんは、俺に片方のバケツを渡して言った。水のたつぷり入ったバケツは意外に重く、俺は一瞬よろけそうになりながらも言葉を返す。

「ど、どうするんですか、これ？」

「いや、何もしないのは性に合わなくてね。無駄だとは分かっているが、少しでもアレに抵抗したいんだ」

言いながら、テンドウさんは宿舎に纏わりつく大火を指差した。

続いて、この場に集まって来ていた近所の男達にも声をかけ始める。どうやら皆でバケツリレーを決行するらしい。確かにテンドウさんの言う通り、バケツの水程度では、目の前の炎にはあまり意味がないかもしれない。だが、やらなければ何も変わらない。

俺も是非参加しよう。そう思い、意気込んだ矢先だった。

「悠美！ 悠美い！ いたら返事してえ！！」

どこかで聞いた声。そうだ、この寺に来た時に木崎さんと呼んでいた声だ。

「木崎さんがどうしたんだ？」

俺は、ちょうど近くまで来たその女子に尋ねた。すると彼女は、少し涙目になりながら、

「それが……いないの。いくら点呼取っても、悠美がいないのよ！」

「なっ……！？ それって、まさか……！！」

バツと、俺は慌てて宿舎の方を見た。もちろん、それは相変わらず燃え続けている。

もしも、あの中にまだ木崎さんがいるとしたら……。

「そんな……悠美……悠美いいっ！！」

俺が宿舎を見てしまったせいで受け入れられなかった現実を突きつけられたのか、その女子はワツと泣き崩れた。

「……木崎さん……」

その名を呟きながら、俺は徐々に目を見開かせていった。同時に、心の中で木崎さんの顔が浮かぶ。頬を赤く染め、恥ずかしそうにモジモジとする彼女の顔が。

するといつの間にか、俺は手に持っていたバケツを、自分の頭上でひっくり返していた。

「ちよっ、信太郎!？」

アカが驚いたような声を上げる。気が付けば、俺は全身ずぶ濡れになっていた。俺自身、驚きだ。どうして俺は頭から水なんかを被ったのか……。

しかしその刹那、俺は自分の行為の意味を理解した。

「……木崎さんを助けに行ってくる」

「し、信太郎、待つ……!？」

アカの言葉を背中に受けて、人々の制止の声も聞かずに、俺は宿舎の中へと駆けていく。

無我夢中。そんな語句が、ふと頭に浮かんだ。

外から見た時はあんなにも激しく燃え盛っていたというのに、宿舎の中には意外と火の手は回っていないかった。とはいえ、もちろん熱い。外から見ていた時よりも数段は熱かった。

「くっ……。木崎さん、木崎さあんツ!」

Tシャツの端で口元を押さえながら、俺は最大限の声で必死に叫び続ける。だが、木崎さんからの返事はない。何度呼び叫んでも一緒だ。もしかしたら……、などという不吉な考えが嫌でも脳を掠めた。

その度に、俺はブンブンと頭を横に振り、それを払拭する。彼女ならきつと大丈夫だと自分に言い聞かせて、灼熱の中を進む。

すると、搜索を開始して数分が経過した頃　奥の部屋から、人の手だけが廊下に半分はみ出しているのを発見した。

「木崎さんっ!？」

俺は燃える廊下を一気に走り抜け、その手との距離を詰めた。

それは、確かに木崎さんの手であった。木崎さんはうつ伏せの状態で、あたかも助けを求めているかのように、手を投げ出しながら

倒れていたのだ。煙にやられたのか、それとも熱にやられたのかは知らないが、意識はない。

「木崎さん！　すっかりしろ、オイっ！！」

ぐったりとして身体に力が入っていない木崎さんを何とかして起こすと、俺は彼女の腕を自分の首に回し、気合いの一声と共に彼女を背中に負った。

力を抜いた人間は通常時より重いと言うけれど、それほどの重量は感じられない。火事場の馬鹿力というやつだろうか。

そのまま、俺は来た道を引き返した。木崎さんが落ちないように注意しながら、速足で。

帰り路は、先程よりも過酷だった。体力の限界は近づき、滝のような汗が落ちる。さらに炎が益々もって猛威を振るい、先程通過した中にも、もう既に通れない場所がいくつか出来ていた。それに煙も増したせいで、視界が非常に悪い。

気が付けば、俺は自分がどこにいるのかが分からなくなっていた。
「く……くそつ……」

力無く悪態をつく。意識が朦朧として、とにかくもう膝をつきたかった。

「木崎……さん、ごめん……」

ガクン。と、足が折れ、崩れそうになる。しかし、ふと前方に見えた小さな人影にハツとなり、俺はかろうじて倒れ込むのを堪えた。
「おーいー！　しんたろー！」

「……グーラ？」

次の瞬間、目の前の煙の中からグーラが飛び出してきた。グーラは俺の姿を認めると、その手をグルグルと振り回した。

「あーうー。よかったー。しんたろーもゆーみもいたー」

「ぐ、グーラ、何でここに！？」

俺は率直な疑問をぶつけた。するとどうやら、グーラはモミジさんの手を振り払い、宿舎に入っていた俺を追いかけてきたらしい。
「な、何でそんなことしたんだ！　下手したら、お前も危ないんだ

ぞー！」

そんなことをしている場合ではないと分かっているながら、俺は思わず声を荒らげた。これは遊びでやってるわけじゃないんだぞ、とも付け加える。

しかしその時、グーラは急に俺の腰に手を回すと、ギュツと、俺にしがみ付いてきた。彼女のいきなりの行動に驚いていると、グーラは俺の顔をジッと見つめながら言った。

「もう、いなくなるのやだー。しんたろーもいなくなるの、やだ……」

「……グーラ……」

一瞬、グーラが何を言っているのかが分からなかった。だがすぐに、俺はアカから聞いた話を思い出した。

グーラは、火事で親友を亡くしたんだ。

そして彼女は今、その親友と俺とを重ねている……？ それはつまり、俺は彼女にとって、その親友と同じくらいに大切な存在ということか？

……そうか。グーラは、俺のことをそんな風に……。

「……あーうー。しんたろー、こっちー」

スルッと俺から手を離すと、グーラは自分が来た方向を指差した。おそらく、その先に出口があるというのを示しているのだろう。

俺は小さく頷くと、グーラと共に歩き出した。

ドッ！ という勢いで、消防車に取り付けられたホースから噴射される水。その大量の水は、一斉に宿舎を包む炎を押さえつけていた。

消防車が到着したのは、俺達三人が大火の中から脱出した直後のことであつた。そして、それから少し遅れて救急車も到着。救急隊

員は木崎さんをその中に運び入れると、そのまま近くの病院を目指して走り去っていった。命に別状はないらしいので、とりあえずは一安心である。

「つつ……くあつ……」

一方、俺は宿舎から離れた所で、大の字になって地面に全身を預けていた。火事場の馬鹿力の反動か、もうピクリとも体は動きそうにない。

「あーうー。よかったー」

多分、俺の真似をしているのだろう。グーラも俺と同様に仰向けになり、ゴロゴロと左右に体を転がしていた。しきりに良かったと言っているのは、俺と木崎さんが無事で良かったという意味か。

と、そんな俺達に近付いてくる二つの影があった。グーラの両親、テンドウさんとモミジさんである。二人は俺のすぐ近くにやって来ると、深々と頭を下げてから口を開いた。

「信太郎君、ありがとう。キミのお陰で、死者が出ずに済んだ」

「信太郎さんには、いくら感謝してもきれないわね。本当に、ありがとうございます」

「いや、そんな……。むしろグーラのお陰ですよ。グーラがいなかったら、もしかすると……」

グーラに腕を引っ張ってもらい、どうにか体を起き上がらせながら、俺は二人に言葉を返した。それでもまだ座ったままなのは、まあ許してもらおう。

「……ところでグーラ、悪いが何か飲み物持ってきてくれないか？ 熱い所にいたもんだから、喉が渴いて……」

わざとらしく咳をして、俺はグーラにそう言った。それに対し、グーラはいつもと同じ抑揚のない声で了解の意を示すと、そのままテンドウさん達の脇を通り抜け、どこかへと走っていく。

グーラが見えなくなったのを確認し、俺はフウと一息をついた。「テンドウさん。実は、昼間の話なんですけど……」

その言葉を発した途端、テンドウさんの目が明らかに見開かれた。

それを見て、俺は一瞬『申し訳なく』思ってしまった。

「考えてくれたのかい？」

「……はい」

「聞かせてくれ。キミの出した、結論を……」

テンドウさんはグツと手に力を入れていた。肩にも力が入り、全体的に強張っている。

思わせぶりにするのも悪いと感じ、俺はすかさず頭を下げた。

「……そう……か」

その声は、本当にテンドウさんのものかと疑いたくなるほどに弱々しかった。まさに意気消沈といった様子で、その体も一回り小さくなったように見える。

「……すいません」

「いや、いいんだ……。こちらこそ、無理を言つてすまなかった」
テンドウさんは小さく溜息をつく、スツと顔を伏せた。

だが俺がその後に続けた言葉を耳にした瞬間、彼はハツと顔を上げ、目をパチクリとさせた。

「なんつ……信太郎君、今、何て……？」

それはまさに驚愕といった表情であった。全く予期していなかったことが起こった。そんな時の表情だ。そしてそんなテンドウさんに、俺はもう一度告げた。

「俺は、グーラに理性を与えることは出来ません。ただその代わりに、俺が、グーラの本能を抑えます」

言葉の通り、もはや俺がグーラに理性をもたらすわけにはいかなかった。何故なら、そんなことをしても彼女が喜びそうにないのが目に見えているからである。俺がグーラにとって大事な存在だというのなら、そんな俺を喰うことを、あいつが嬉々としてやるとは思えないのだ。

だが、そうなれば再びグーラが正気を失うことがあるかもしれない。

そうになったら　またグーラが本能に支配されたなら、その時は、

俺が彼女を元に戻す。それが俺に出来るせめてものことだった。

「そんな……しかし、信太郎君……！」

テンドウさんが何かを言いたそうに口を開く。だが、それをモミジさんが手で制した。

「あなた。お昼の準備をしている時にグーラから聞いたのだけれど、あの子はここ一ヶ月猫を食べていないんですって」

「えっ？ あのグーラが、一ヶ月も……？」

「なんでも信太郎さんと約束したらしいわ、もう猫は食べないってねえ、あなた。任せてみましょうよ、信太郎さんに……。もしかしたら二人が、人間と鬼との、橋渡しになってくれるのかもしれないわ」

ニコツと、モミジさんは微笑んだ。それは、見た者の不安を全て吹き飛ばしてくれそうな優しい笑顔だ。

そして、それが影響したのかは分からないが テンドウさんはモミジさんの顔をしばらく見つめていると、不意に何かに頷き、そのまま俺の目の前で正座をし始めた。

「……信太郎君、任せてもいいんだね？」

ジツと、俺の目を真っ直ぐに射抜いてくる、テンドウさんの双眸。プレッシャーに似たものがヒシヒシと伝わってくる。

俺はそれを正面から受け止めると、ハッキリとした口調で返事をした。

「……娘を……グーラを、頼む」

そう言うテンドウさんの顔は、少し複雑だった。安心したような……しかしそれでいって、少し寂しいような……。

それでもただ一つ言えるのは、先程と比べると、格段にその表情は柔らかくなっていったということである。

と、その時、遠くの方から俺の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。間延びして抑揚のない、あの声だ。

「しんたろー、水持ってきたぞー」

俺はその声の主に向かって軽く手を振る。

テンドウさんとモミジさんは、走って来る少女を見て、優しく微笑んでいた。

第二話 エピローグ

女子大生 木崎悠美は、彼女の両親と共に赤い鳥居をくぐって
いた。それは即ち、自宅の玄関をくぐったと言っても良い。

そんな悠美を迎える、一つの影があった。黒縁の四角い眼鏡をか
けたその男は、悠美の姿を見るやいなや口を開いた。

「悠美、おかえり。大変だったそうだな、合宿」

男の言葉に、悠美はプクーツと頬を膨らませる。

「た、大変だったなんてものじゃないよう。小野塚くんが助けてく
れなかったら、もう少しで私……お、小野塚くんが……」

次の瞬間、ボツと悠美の顔は赤くなった。病院のベッドで目を覚
まし、自分がどのように救出されたのかを友人に聞いてから、彼女
はずっとこんな調子なのだ。

と、そんな悠美を見ていた男が、不意に鼻をひくつかせた。クン
クンと、悠美の周りの空気を嗅ぐように、彼女を中心にぐるりと回
る。

悠美はいきなりの男の奇行に眉をひそめると、一体どうしたのか
と尋ねた。

「臭うぞ、悠美……。前に、お前が友達と遊びに行った時と同じ臭
いだ」

「え、ええ！？ に、臭うって……そんな変な臭いするかな、私？」

「ああ……。醜悪な、物の怪の臭いだ」

そう言って、男は眼鏡のブリッジを中指で押し上げた。

最終話 プロローグ

それは、不意に見た夢。

コリコリ、クチャクチャ 音がする。ゴクンと飲み込み、舌鼓。美味しくて、頬っぺたが落ちそうだ。

さあ、次はどこを食べよう？ 柔らかそうな、お腹かな？ それともプリプリしたお目々にしようかな？ 手の辺りは小骨が多そうで、ちよつと嫌だなあ。

……あれ？ そういえば、私は何を食べているんだっけ？ えーっと、えっと。

思い出せない、思い出せない。私は何を食べてるの？ こんな時、あの人がいたら教えてくれるのに。

……あの人？

あの人って、誰？ 誰？ 思い出せない、思い出せない……。

思い出せないけど、変な感じ。寂しい、寂しい……嫌な感じ。何で？ どうして？ ……分からない。でも、嫌な感じ。

誰か教えて。あの人って、誰？ あの人って誰なの？ 私は一体『誰』を食べてるの？ 教えて、教えて……！

不意に少女は目を覚ました。チュンチュンという小鳥の囀りが、窓の外から聞こえてくる。

「……あーうー」

モゾモゾと布団から這い出し、ボーツとした目で辺りを見回す。

あの子は、まだ隣の布団の中で夢を見ていた。スーッ、スーッと、規則正しい寝息を立てて、もうしばらくは目覚める気配は無い。

少女はその枕元にチヨコンと腰を下ろすと、彼の寝顔を上からジ

ッと見つめた。その刹那、少女の中に住まう虫が、音を立てて空腹を知らせる。

しかし、少女はそれを気にしない。時折口元に垂れる涎を手で拭いながら、ただジッと見つめ続けていた。

まるで、その顔を決して忘れてしまわぬように。

最終話 第一幕

風邪というものは非常に厄介だ。頭痛はするし、鼻はぐずつくし、身体中がダルくて重い。そのせいで、いつもやっていることが満足に出来なくなる。

しかし、だからといって寝ているわけにもいかない。よほど重症でもない限り、仕事を休むことなど許されないのだ。もっとも、俺小野塚信太郎にとっては、仕事ではなく大学の講義が相当するのだが。

「はあ……」

目の前の机に突っ伏しながら、俺は小さく溜息をついた。微熱を帯びた頬に机の冷たさが伝わり、ひんやりとして気持ちいい。

教室の一番前では定年間近で頭髮の寂しい教授が、白いチョークを片手に、何やら講義内容には関係のないことを話している。だが、それを聞いている者はほとんどいない。八十名ほどが受講しているこの講義だが、毎週の出席確認さえなければ、講義に出てくるのはその三分の一もないんじゃないだろうか。

しかし、そんなつまらない講義でも、黒板前の特等席で熱心に教授の話に耳を傾け続けている者もいる。彼女　木崎悠美さんも、そのうちの一人だ。

「何がそんなに面白いんだか……」

既に教室内のほとんどの者が前を向いていない。これだけで木崎さんの生真面目さが窺えるだろう。もちろん、その真面目なところが彼女の良いところではあるのだが……。

と、その時、

「ひゃうっ!？」

不意に何処からか、ピピピツという軽快な電子音が鳴り響いた。それと同時に、木崎さんが驚いたような甲高い声を上げ、ビクツと体を震わせる。

当然、皆の視線は一斉に前へと向けられた。教授も話を一旦止め、丸くした目を木崎さんにやっている。多くの視線を感じたからだろうか、彼女が耳を真つ赤にしているのが見て取れた。

「あつ、ひう……!？」

木崎さんは非常に慌てた様子で、机の横に掛けていたバッグを漁り始める。するとそこから出てきたのは、依然電子音を鳴らし続けている携帯電話であつた。

「す、すす……すいません！」

そのまま木崎さんは脱兎の如く　素早く席を立つと、携帯電話片手に教室を飛び出していった。そして、

「あ、あー……では、今日の講義はこれで終わりにします」

直後、講義の終了を告げる鐘の音が鳴った。

本日の講義全てに出席を果たし、俺は一人、大学構内のメインストリートを行っていた。

チラッと時計を見ると、時刻は十二時を少し回ったところ。腹も減ってきたので学生食堂に向かいたところだが、そうもいかない。何故なら、うちには腹を空かせて待っているはずの居候がいるからだ。そいつに昼食を作つてやるためにも、早く家に帰つてやらねばならない。……というか、さつさと布団に入つて寝たい。

と、ちやうど正門に差し掛かった辺りで、俺は見覚えのある人影を見つけた。あれは

「こんにちは、木崎さん」

「え？　あ、お、小野塚君！？　ここ、こんにちは……！」

俺が近づいていって声をかけると、彼女は大層驚いたようにして、こちらに振り向いた。相も変わらず、その頬はほんのりと赤い。も

しかしたら、先程の授業からずっと赤面しっぱなしだったのだろうか。

「お、小野塚君は、あの……今から帰るの？」

少々おぼつかない喋り方で、木崎さんが尋ねる。俺はそれに対して首を縦に振りながら、

「ああ、うん。今日はもう講義は無いし、それに」

その時だった。ふと、俺は木崎さんのすぐ後ろに何やら眼光の鋭い男が立っているのに気が付いた。

二十代半ば程であろうか。深緑のジャケットを着て、黒縁の四角い眼鏡をかけたその男は、ジツとこちらを睨んできているようであった。その、どこか威圧感を覚えさせる目付きに、俺は思わず一歩後ずさってしまう。

すると、その男は眼鏡のブリッジを指で押し上げながら、おもむろに口を開いた。

「悠美、こいつは？」

どうやら木崎さんの知り合いであるらしい。一体どういう関係なのだろうか？……と思うよりも先に、俺はつい、初対面でこいつ呼ばわりされたことに対してムッとなってしまうた。おそらく、それは顔にも出てしまっただろう。

しかし目の前の男は、そんなもの意に関せずといった様子で、木崎さんからの言葉を待った。

「あの……彼は同じゼミの小野塚信太郎君で……」

「小野塚信太郎……？ ああ、もしかして悠美を火事から助けたという」

火事。その単語を聞いて、俺はフツと二週間ほど前のことを思い出した。

あれは、うちに住む居候の実家に言った時のこと。そこに併設されていた宿舎で火事（というか放火だが）が起こり、そこに偶々サークルの合宿でやって来ていた木崎さんを、俺が助け出したのだ。……いや、正確に言えばその居候と二人で、なのだが。

と、そんなことを俺が思い出していると、不意に男が俺の手を取ってきた。そして奴は、ピクリと僅かに口角を上げると、

「その節は妹が世話になった。礼を言う」という言葉と共に、俺に向かつて小さく頭を下げてきた。

「あ、いや、どういたしまし……妹？」

いきなりのことに少し戸惑ったものの、フツと出てきたその単語を聞き逃さず、俺はそれを掬いあげた。すると男は俺から手を放し、再び眼鏡のブリッジを押し上げながら言った。

「僕は木崎悠貴。悠美の兄だ」

「え？ 木崎さんの……お兄さん……！？」

ハッと、俺はもう一度目の前に立つ男の姿に目を凝らしてみた。確かにそう言われてみると、どことなく木崎さんと雰囲気……のよくなものが似ているような気がしないでもない。もっとも、悠貴と名乗るこの男は木崎さんとは真逆に、いたって堂々とした立ち姿をしてはいるが。

「……そんなに人様の兄弟が珍しいのか？」

ジロジロと見やる俺の視線を快く思わなかったのか、悠貴さんは少し棘のある口調でそう言った。その言い方にまたもやムツとしてしまうが、こちらもさすがに見過ぎてしまっていたようなので、素直に頭を下げた。

どうやら風貌以上に、木崎さんとは性格が違うらしい。まあ兄妹とはいえ別の人間なのだから、当たり前だろう。

「あー……じゃあ、俺はもう……」

もう帰るよ 木崎さんにそう告げ、俺は早々にこの場を立ち去ろうとした。彼女には悪いが、俺はどうもこの悠貴という男が苦手である。反りが合いそうにないというのもあるのだが、その前に得体が知れない そんな感じがするのだ。

しかし次の瞬間、既に半身を翻しかけていた俺の肩を、ガツと掴む手があった。その手の主は、驚いている俺を余所にグツと顔を近づけてくると、俺の瞳をジツと覗きこんできながら口を開いた。

「最近、周りで奇妙なことが起きていたりしないか？」

「きつ……奇妙なこと？」

その脈絡のない意味不明な質問に、当然のこと、俺は聞き返す。すると悠貴さんは「そうだ」と短く答え、そのまま続けた。

「小野塚信太郎……お前からは物の怪の臭いがする。醜悪で、反吐が出るような臭いだ。もしかしたら、何か憑い」

「や、やつ、止めてよ、お兄ちゃん！」

刹那、その言葉が終わる前に、木崎さんが悠貴さんをグイッと引き戻した。同時に俺を掴んでいた腕が離れ、俺の肩は無事に解放される。

「もうっ！ 小野塚君の前で、へ、変なこと言わないでよ！」

実の兄に対して険しい口ぶりを向ける木崎さんの顔は、本当に耳まで真っ赤になっていた。キツと端を吊り上げた目は悠貴さんを真っ直ぐに射ており、彼女がえらく激昂しているのが見て取れる。

「しかし、悠美……」

「しかし何もないよ！ ほら、用事があるんなら早く行こっ！」

その様が普段の彼女を見ていると少し意外で、俺は数瞬、思わず呆気にとられてしまった。

一方、そんな俺は尻目に、木崎さんはグイグイと悠貴さんの背中を押して歩き始める。と、数歩行ったところでクルリと振り返ると、木崎さんは眉を八の字に曲げ、とても申し訳なさそうに、

「あ、あの、ゴメンね、小野塚君。うちのお兄ちゃん、ちょっと変な人だから、その……さっきのは、あ、あまり気にしないで！ それじゃあ！」

そのまま木崎さんは兄を押しながら、慌ただしく正門を後にしていった。そんな彼女の背中を見送りつつ、俺は思わず二、三度ほど目をパチクリとさせると、小さく首を傾げるのであった。

木崎さん達と別れてから十数分。

重い足を引きずって、ようやく自宅のアパート前までやって来た俺は、フウと小さく息を吐いた。

もう少しで布団に潜れると思うと、自然と足が速くなる。そう、あと少し……後はうちにいるはずの居候に昼飯を作ってやるだけだ。それだけで、俺は安息の夢の中へと行くことが出来るのだ。

肩掛けの鞆から部屋の鍵を取り出しつつ、俺はアパートの一階にある自室を目指して歩いて行く。

と、その部屋の扉が眼前にまで迫ったところで、俺はふと違和感を覚えた。

異臭がする。風邪のせいで鼻詰まりを起こしている俺ですら感じられるほどに、何かが焦げ臭い。

「……まさか……!?」

フツと嫌な予感が頭をよぎり、俺は慌てて目の前の穴に鍵を差し込んだ。ガチャツという音がすると同時に、ノブを回して、それを感じ切り手前に引く。

刹那、俺の目に飛び込んできたものは大量の黒い煙だった。その異様な光景に圧倒され、一瞬、俺は顔を引き攣らせながら動きを停止してしまふ。が、直後に部屋の中から聞こえてきた声で、俺の体は再び始動した。

「あー。おかえりー、しんたろー」

「ぐ、グーラ！ ちょっと退け！」

俺は靴を履き捨てると、そのまま煙に包まれた台所へと入っていく、こちらに駆け寄って来る居候を手で遮った。そのままコンロの火を止め、煙と異臭の原因である鍋をすぐ横のシンクに放り込むと、蛇口を目一杯に捻って水を放出させたのである。

ジューツという音を横に聞きながら、続けて換気扇を回す。さらに近くの窓を全開にし、最後にグーラに向かって玄関の扉を開けっ

放しにするよう命じたところで、ようやく俺は一息をついた。

「グーラ……。お前、一体何やってたんだよ……？」

ドバドバと水が溢れ、ようやくまともに触ることが出来るようになった鍋を見ながら、俺はポツンと呟いた。鍋の底は見事なまでに真っ黒く焦げついており、もはやスポンジ程度では落ちそうにもない。

「あーうー……。ごめん、しんたろー……」

事を起こした張本人は玄関の扉を手で押さえたままで、珍しくシヨンボリとうな垂れている。それでも、どこを見ているのか分からない焦点の合わぬ目と、抑揚のない特徴的な喋り方は変わらずだがハア　と、溜息を一つ。そしてもう一度、一体何をやってたのかと優しく問いかけた。

「あーうー。お粥作ろうとしたー……」

「お粥？　何でまた、そんなものを？」

「お母さんから聞いたー。風邪の時は、お粥が良いってー」

その回答に、俺は思わずキョトンとしてしまった。見れば、グーラの手には絆創膏が、これまた雑に貼り付けられている。

「まさか……。俺のために……？」

コクリと、グーラは小さく頷いた。

……。まいった、これじゃ叱るに叱れない。料理なんてしたこともないくせに見様見真似で　それも風邪を引いている俺のためだと言っただから、例えその結果としてボヤ騒ぎになりかけたとしても、俺にはもうグーラを叱れそうにはなかった。

「しんたろー、ごめん……」

そんな俺の思いも知らずに、グーラはずっと頭を下げ続けた。旋毛のところでピヨコンと飛び出している毛が、その度にユラユラと揺れる。その様子が何故だか可笑しくて、俺は思わずクスツと笑い声を漏らした。

「……あーうー？」

するとそれに気が付いたグーラが、今度は不思議そうに俺を見上

げ始めた。独特で虚ろな瞳がクエスチョンマークを孕みながら、こちらを見つめている。

そこで俺は彼女の前まで歩いて行くと、おもむろにその金の髪を撫でてやった。少し乱暴に、クシャクシャと。

「あうっ？ あーうー？ しんたろー……？」

「んっ。グーラ、ありがとうな。その気持ちだけで嬉しいよ」

「あーうー……」

俺を見上げるグーラの頬が、少しだけ紅潮する。かと思うと次の瞬間、グーラが急に腕を伸ばし、俺に抱きついてきた。ちょうど腰の辺りに腕を回した状態だ。

いきなりのことに、俺は思わず戸惑った。しかし突き放すようなことはせず、そのまま彼女の頭を撫で続ける。……勘違いかもしれないが、グーラの肩が僅かに震えているような気がした。

それから数分して、ようやくグーラが離れてから、俺は台所の片付けを再開した。とはいえ鍋の焦げつきを落としたこと以外は、グーラが率先して手伝ってくれたこともあり、そう大変なことではなかった。

しかし、ただ一つ頭を悩ませることと言えば

「……グーラ、全部使ったのか……？」

「んー……」

つい先日にも補充したばかりだというのに、冷蔵庫の中が物の見事に空っぽになっていた。食べられるようなものは、もう何一つない。そもそもグーラは、お粥を作るつもりだったんじゃないのか？俺の記憶が正しければ、麺類や漬物も入っていたはずなんだが……。

はあ　小さく溜息を漏らしつつ、俺はボタンツと冷蔵庫を閉めた。

まだ少しでも残っていれば良かったのだが、こうなっては今から買い物に行かざるを得ない。でなければ、このままだと昼食どころか夕飯も無しだ。

そう思つて買い物に向かう準備を始めると、ふとグーラが棚に置いてあるエコバッグを取り出して、それをギュツと抱え出した。しかもそのままの状態で、ジッとこちらの方を見つめている。

「どうしたんだ、グーラ？ ほら、買い物に行くんだからバッグを

……」

「あーうー。グーラも行くー、手伝うー」

いつもは、こちらから手伝えと言つても首を横に振るくせに……。今し方の片付けも含め、ちゃんと責任は感じているようだ。

俺はフツと笑い、

「それじゃあグーラには重く荷物を持ってもらおうかな」と、冗談混じりに彼女の申し出を受け入れた。

近所のスーパーにやって来た俺達は、そこでさっさと用事を済まし、今は買った物の袋詰め作業を行っていた。

買い物中もグーラは珍しく良い子で、たまに付いてきた時はいつも高い牛肉を買ってくれとせがむのに対し、今日は終始俺の後に付いて回つてその手伝いに勤しんでいた。

そしてそれはまだ続いている。俺が今さっき物を詰めたバッグを自ら進んで持つよう言い出したのだ。風邪で辛い俺にとつては正直かなり助かる上、何よりずっと手伝いをしてきているグーラが素直に嬉しかった。

しかし、まだたったの一、二ヶ月しか経っていないというのに、すっかりこいつの保護者の目線になつてしまっているな、俺は。そういえば、あいつにもグーラの母親みたいだなんて言われたっけ……。

「よしっ。じゃあ帰るか、グーラ」

卵や特に重いものを詰めた方のバッグは自分で持って、俺はグーラに呼びかけた。グーラも両手で別のバッグを持ち、「あーうー」といつもの変な口癖で返事をする。が、不意にピタッと動きを止めると、妙にもぞもぞとした態度を見せ始めた。

「うー。しんたろー、おてあらいー」

「はいはい。ほら、荷物持っててやるから早く行ってこい。出口のところまで待つてゐるからな」

コクリと頷いてバッグを俺に手渡すと、グーラはそのままトイレを目指して走っていった。それを少し見送ってから、俺も出口へ向かって歩き出す。

しかし偶然にも、ふとそこで俺自身も尿意を覚えた。家まで我慢は出来るだろうが……まあ、トイレは出口の近くにあったはずだから丁度いい。

俺はそのまま歩いて行くと、おそらくグーラが入っていったであろうトイレの向かい　男性用トイレのドアの前にバッグを置き、中に入った。

トイレに入るとすぐ右に洗面台があり、左の方には個室と小水の便器が二つずつ設置されている。俺はそのうちから奥にある小便器を選ぶと、そこで用を足し始めた。

と、その時だった。俺が開けた時と同じように、ガチャツという音を立てながらトイレのドアが開いた。そしてそこに姿を見せたのは

「……ん？　また会ったな、小野塚信太郎」

「悠貴……さん」

木崎悠貴は俺の隣にやって来ると、俺と同様に用足しを始めた。変に気まずく思った俺は沈黙し、さっさと用を済ませてトイレから出ていこうとする。ところが、それを邪魔するかのように不意に悠貴さんが口を開いた。

「やはり間違いない。小野塚信太郎、お前からは物の怪の臭いがする。それも、とても濃い」

「……さつきも言っていましたよね、それ。物の怪どうのって」

「物の怪は例外なく人に害を為す、邪悪な憑き物だ。心当たりがあるなら、早く祓った方がいい。そのままにしておけば近い内に破滅するぞ」

それだけ言うと、悠貴さんはそのままジーンズのファスナーを上げ、洗面台で手洗いを済ませた。そしてトイレのドアに手を掛け、今まさに出ていこうとしたその時 ふと、彼は動きを止めた。

一体どうしたんだ？ その動かない背中を見つめながら、俺は心の中で呟いた。五秒……十秒……悠貴さんはまだ動かない。

と、そこでようやく目の前の男に動きがあった。悠貴さんはこちらに背を向けたままで、ポツリと口を切った。

「……鬼だ」

「え？」

突如飛び出したその単語に、俺は思わずドキツとした。一方、悠貴さんはこちらに振り返り、やや興奮した様子で言葉を続ける。

「思い出した、鬼の臭いだ。小野塚信太郎、お前からは鬼の臭いにする。それも、悠美に付いていたのと同じ しかし、それとは比べようもないほどに濃い……」

ブツブツと呟きながら、悠貴さんはどんどん俺の傍に近寄って来た。目をカツと見開き、その目で俺の顔のさらに奥を覗き込むようにしながら。

それがあまりにも凄い勢いだつたために、俺は慌てて悠貴さんを手で制した。するとハツと落ち着きを取り戻した悠貴さんは、俺から距離を取りながら眼鏡のブリッジを指で押し上げて、

「ああ、悪かったな。僕としたことが、少し興奮してしまった」

「はあ……。と、ところで今の、鬼って……？」

鬼 俺の知っているものと悠貴さんの言っているものが一致しているのかは不明だが、俺はそれに十二分に心当たりがあった。しかし、それでも俺はあえて鬼という存在をまるで知らないような態度を示した。

理由は幾つかある。だが何より、僅かに眉をひそめたその表情が、彼が鬼というものに対して嫌悪感を抱いているように見えて仕方なかった。

「桃太郎を知っているだろう？ いや、それに限らず日本の童話の多くに鬼というものが登場する。僕が言ったのは正にそれだ。人を喰らい、人を害して、人に倒される……。一般的には知られていない もとい、忘れられてしまったことだが、鬼は実在する」

実在する、人を喰らう鬼……。それはやはり、俺の知っている鬼のことを言っているのだろうか？ それにしても、この人は一体……？

と、その時、不意に悠貴さんが俺の腕をグツと掴んだ。その握力は意外に強く、俺は思わず顔をしかめる。だがそれに対する謝罪は一切ないままに、悠貴さんは言葉を続けた。

「今からお前の家に行くぞ」

「はっ……はい？」

突拍子もないその言葉に呆然としつつ、俺は目をパチクリとさせた。しかし悠貴さんが手を緩めることはなく、彼はその気迫こもった瞳で真っ直ぐに俺を見つめながら、

「お前は鬼に憑かれていた可能性が高い。今すぐに対処してしまわなければ、今日にでも喰われてしまうかもしれない」

そのまま俺の腕を引き、ドアに手を掛けた。すぐさまガチャッという音がして、ドアはいとも容易く開けられる。

「ちよっ、ちよっと……！？」

悠貴さんに引つ張られる形でトイレから出た俺は、そこでようやく彼の手を振り払った。

「どうした？ 早くしないと手遅れになるかもしれないぞ？」

「ど、どうしたも何も……！ いきなり引つ張られて家に行くなんて言われたら、誰だって困惑するに決まってるでしょうが！」

真つ当な意見だ。そう、俺は世間一般を代表するようなことを言っただけである。なのに目の前の男ときたら眉間に皺を寄せ、まる

で俺の言っていることを理解できていないように首を傾げてみせた。
「小野塚信太郎。お前は今、自分が何をしなければいけないのか理解しているのか？ 下手をすれば取り返しがつかないんだぞ？」

「あ、あんたこそ自分が何言ってるのか分かってるんですか！？ さつきから意味不明なことばかり……。だいたい、その鬼を見つけてどうするつもりなんですか？」

俺の発言に対し、悠貴さんはさも当たり前のように、

「そんなの、被うに決まっているだろう。鬼を生かしておく道理はない。肉の一片までこの世から消してしまわなければ、奴らは必ず人に害を為す」

その刹那、俺は理解した。目の前の男とグーラを対面させてはいけない。この木崎悠貴という男が何者かは分からないが、こいつは危ない奴だ。その曇りのない目が、奴の本気を窺わせる。

となれば、どうにかして悠貴さんを此処から遠ざけなければいけない。グーラはおそらく、まだトイレに入ったままだ。しかしあと少しもすれば、すぐそこにあるドアを開けて出てくるだろう。その時にこの男がまだいれば、面倒なことになるのは目に見えている。

「ゆ、悠貴さん、あの……」

俺はとりあえず声を発した。この男を具体的にどう誘導すればいいのかは思いついてないが、とにかく何とかしてこの場から去ってもらわなければ……！

だがその時、俺の思いも空しく、女性用トイレのドアがガチャリと中から押し開けられた。俺はハッと振り返り、音のした方に目を向ける。しかし、そこに姿を現したのは

「あつ。お、小野塚君、こんにちは……」

やや顔を赤らめながら現れた木崎さんの姿に、俺は驚きと安堵感を一緒にたにして口から息を吐き出した。

そうか、ここに悠貴さんがいるのなら、先程一緒に大学を後にしていった木崎さんがいてもおかしくはない。

……待てよ。そういえばあの時、悠貴さんが物の怪どうのと言っ

た途端、木崎さんは怒って俺の前から悠貴さんを引き剥がしていった。ならば今までの経緯を彼女に報告すれば、恥ずかしがり屋の木崎さんならきつと再び激昂して悠貴さんを連れて行っていつてくれるのではないだろうか。

瞬間的に希望を見出した俺は、すぐさま木崎さんに向かって口を開こうとした。しかし木崎さんのすぐ後ろにいた人影に気が付いた瞬間、その希望は脆くも崩れ去った。

「あーうー。しんたろー、ゆーみにハンカチ貸してもらったー」

「グーラ……」

その瞬間、俺は半開きになった口を引き攣らせていただろう。だがそんなことはお構いなしに、グーラはパタパタと俺の元に駆け寄って来た。

不味い……。悠貴さんが臭いとやらで鬼の存在が分かるというのなら、このままではグーラが鬼であることがバレてしまう。そうすると、あの男がどういう行動に出るのかわかったものではない。

……いや、諦めるのはまだ早い。そうだ、トイレの前に置きっぱなしにしてあるバッグを拾って、さっさとグーラと共にこの場を後にしてしまおう。若干不自然な形になっても、走って逃げてしまえば

「……悠美、その子は？」

後頭部の向こうから聞こえてきたその声はとても落ち着き、そしてとても冷たい印象を俺に与えた。思わず振り向くと、その男はまるで虫を見下ろすかのような目でこちらを見やっていた。ゾクリと、俺の背筋に悪寒が走った。

「あ、この子は小野塚君の親戚の子で……お兄ちゃん？」

木崎さんもその冷たい視線に気付いたようで、少しビクついた表情を見せながら一步、小さく後ずさる。

そして、その不穏な空気はグーラにも伝わったらしい。彼女はその瞳に微かな緊張を滲ませて、俺の服の端っこを小さな指でギュッと摘まんだ。

「悠貴、さん？」

「……こいつか」

俺の呼びかけとほぼ同時に、彼はポツリと呟いた。そして刹那、悠貴さんはジャケットの内側から白い紙を手早く取り出すと、こちらとの距離　数歩足らずを一気に詰め、その取り出したものをグーラの額にピシャツと貼り付けたのである。

「あう……？」

カクン　次の瞬間、グーラの膝が折れた。そのまま地面に吸い込まれるかのように、グーラはその場にへたり込む。その顔からは、自分の身に起こったことをまるで理解出来ていないのが窺えた。

「グーラ！？」

とは言え、今の一瞬を理解出来ていないのは俺も同じであった。

だがそれでも、グーラに何かしらの敵意が向けられた　それだけを理解した俺は、彼女を抱えるようにして悠貴さんから距離を取ると、その額に貼られた御札のようなものをすぐさま引っぺがした。

「なっ！？　何をする、小野塚信太郎！　この醜悪な臭い……少女のなりをしているが、そいつは間違いなく人を喰らう鬼だ！　せっかく隙について呪符を貼り付けたというのに……」

眉を吊り上げて、悠貴さんは鋭い眼光でこちらをキツと睨みつけてきた。俺はグーラを抱えたまま、彼女を庇うように悠貴さんに背を向けて、

「そんなもん、事情も聞かないままにいきなり襲われたら、抵抗するに決まってるでしょ！　悠貴さん、あんたが何者かは知りませんが、まず俺達の話聞いて　」

「なるほど。小野塚信太郎　お前は既に、その鬼に魅入られてしまっているのか。ならば尚更のこと、その鬼を祓ってしまわねば……！」

俺がいくら説得しようとしても、悠貴さんはまるで聞く耳を持たない。俺が魅入られているだとか何とかと自己の内で勝手に決め付け、懷から先程と同じ白い紙を何枚も扇のように取り出したのである。

る。もはや彼の目には、鬼を抜うということ以外は映っていないかった。

と、その時、俺は自分のすぐ傍で小さな悲鳴を聞いた。見れば、グーラが俺の肩越しに向こうをジッと見つめている。その目に映っているのは、他の何ものでもない　恐怖だ。あのグーラが、目の前の男のことを怖いと思っているのである。

「あうっ……！？」

「あっ、グーラ！」

次の瞬間、グーラは俺の体を離れた。悠貴さんから逃げるように、彼女はスーパールの出口に向かってダツと走り出す。

しかしそれを見逃すような男ではなく　悠貴さんもまた、グーラを追うようにして走りだした。俺には目もくれずに横を走り抜け、そのまま二人は出口の扉をくぐり、スーパールの外へと出ていった。

「くっそ……！」

もちろんグーラを放っておくわけにはいかない。あの男の好きにさせていると、ともすれば大変なことになってしまうかもしれないのだ。

俺は二人の後を追うために、瞬間的に膝を伸ばした。すると、

「お、小野塚君！　私も行く！」

僅かに遅れて、背中の方から木崎さんの声が飛んできた。俺は首だけを彼女に向けて小さく頷くと、木崎さんと共に先行く二人を追いかけてスーパールを後にした。

最終話 第二幕

恐怖感から必死に逃げるグーラ。そして何が何でも彼女を捕らえようと、それを追う悠貴さん。元々備わっていたのであろう身体能力に気持ちも乗っかり、二人の足は速いの一音であった。

無論、俺と木崎さんも懸命に走り、二人に並ぼうとしたのは間違いない。しかしどれだけ走っても距離は縮まらず　むしろ時間が経てば経つほど、俺達はどんどん引き離されていく。決して俺達の足が遅いわけではないのだが、それほどまでに前に行く二人は俊足だった。

それに加えて、俺の頭には先程からすっかり抜け落ちてしまっていることがあった。何を隠そう、しばらく走っているうちに体がどんどん重くなつていくのだ。息も荒くなり、胸が締め付けられるように苦しくなる。

そうしていよいよ目の前が霞み始めた時、俺の意思に反して足は止まり、全体重は民家の壁についた手で支えられた。

「だつ、大丈夫、小野塚君！？」

既に俺の少し前を走っていた木崎さんが、驚いたような顔をして俺に駆け寄ってきた。オロオロとして、まるで自分のことのように心配してくれているのが見て分かる。

「大、丈夫……。ちよつと、目眩がしただけだから……」

空いている方の手をヒラヒラと振ってみせて、俺は前方　木崎さんのさらに向こうにチラツと視線を飛ばした。

グーラと悠貴さんの姿はもう見えていない。いや、そもそも二人を見失ってからもう数分ほどが経過していた。その数分間、俺と木崎さんは手掛かりも一切ないままにグーラ達を捜して走り回っていたのだ。気が付けば、俺達は何処とも分からぬ住宅街に迷い込んでいた。

「で、でも顔色悪いよ……？」

顔色が悪い　　そう言う木崎さんの顔こそ青ざめている。それがずっと走っていたからなのか、それとも本気で俺の心配をしてくれているが故なのかは分からない。でも、もし後者なら　　俺は感謝と共に変な罪悪感を覚え、彼女の心配を少しでも和らげるために、この場で少し休憩しようと申し出た。

木崎さんは一瞬僅かに安堵の表情を見せると、無理はしないでねという言葉を添えながら俺の背中を優しく擦ってくれた。

けれども、それにちよつとでもドキツとする余裕は、今の俺にはない。木崎さんを心配させまいと言ったつもりで台詞だったが、もしかすると単純に俺の心の声だったのかもしれない。

早くグーラを見つけないといけないのに　　そう思うと、チクリとした痛みが微かに俺の胸を突いた。

「……悠貴さんって、何者なんだ？」

胸の痛みと苦しみを少しでも紛らわせたくなり、俺はそのままの体勢でかねてからの疑問をポツリと呟いた。その瞬間、木崎さんの手がピクツと震えたのが背中から伝わった。

そのまま木崎さんは声を詰まらせた。それは言いにくい……というよりも、説明のための言葉を選んでいる　　そんな感じた。モゴモゴと口を閉じたままで何かを呟き、微かに眉をひそめている。

それから少ししてようやく選り終わったのか、木崎さんはゴクツと喉を鳴らしてから、ゆっくりと口を開いた。

「す、少し説明しにくいんだけど……私の家って、神社なの。それも結構由緒正しくて　　ご先祖様にね、悪霊とか物の怪退治なんかでそれなりに名の知れた陰陽師の人がいるの」

「お、陰陽師……？」

思ってもみなかった言葉が飛び出し、俺は僅かに目を張った。

「それで、その陰陽師の血筋のせいかは分からないんだけど……お兄ちゃんには昔から、他の人には見えないものが見える力があつたの。そうしたらそれを知ったお父さんが凄く喜んじやってね、まだ幼かったお兄ちゃんに陰陽師になるための修行を積ませたの。その

結果　　」

「本当に物の怪を退治出来るようになった……？」

コクリと、木崎さんは小さく頷いた。

陰陽師　　そんな話を聞いても、二ヶ月前の俺なら確実に信じていなかっただろう。しかし今は違う。グーラと知り合い、鬼という存在を知った今の俺には、陰陽師という存在を信じるのは造作もないことだった。

だがそれでも、驚きがないと言えば嘘になる。当たり前だ　　信じはするが、現実味がない。もっとも、それは鬼も一緒か……。

「……木崎さん。実はさ、グーラって俺の親戚じゃないんだ。っていうか、その、グーラは……鬼、なんだ。人間じゃなくて、鬼」

「え、えっ？　お、鬼……？」

いきなりの俺のカミングアウトに、木崎さんは困惑したように目をしばたかせた。別に他意はない。ただ、木崎さんにもこちらの事情を知ってもらっておいた方が、話を進めやすいと思ったただけだ。案の定、木崎さんも驚きはしたものの、すぐに何かに納得したような表情を浮かべてみせた。悠貴さんが鬼の存在を知っていたのと同じように、木崎さんもきつと話だけは父親なりから聞いていたのだろう。

「鬼……。そっか、ちょっと変だなんて思うところはあったけど……そういうことだったんだ」

「うん。ごめんね、今まで嘔吐いてて」

「う、ううん、いいよ！　私も同じ立場なら、きつと黙ってたと思うし……」

「……ありがとう」

今、こうして一緒になって走り回ってくれていること　　突拍子もない話を簡単に受け止めてくれたこと　　それらを全部含めて、俺は軽く礼を述べた。思えばグーラと出会ってから、彼女とは妙な縁がある。

「そ、そ、そんな！　あ、ありがとうなんて、その……私の方こそ、

あ、あり、ありが　」

しかしまったく、その縁が回り回って変なところに行き着いてしまったものである。悠貴さんは陰陽師で、物の怪を祓う力なんてものを本当に持っている……。となれば、なおさらのこと一刻も早くグーラを保護してやらなければ……！

「よしっ！　そろそろ行こう、木崎さん」

「ひゃへっ！？　あ、う、うん……。でも小野塚君、大丈夫なの……？」

「ああ。木崎さんが背中擦ってくれたお陰で、大分楽になったよ」

正直に言えば、このままずっと休んでいたかった。顔が熱い

風邪がこんなにも辛いものだと思ったのは、今日が初めてである。

だがこんなもの、グーラが味わっている恐怖感に比べたら何て事はないはずだ。あいつは今、正に命の危険に直面しているのだ。風邪程度、少し我慢さえすればどうにでもなる。

しかし行こうとは言ったものの、どうやってグーラを捜せばいいだろう？　また先程と同じように闇雲に動いたって、到底見つけれれるとは思えない。何か手掛かりはないか　くそっ、グーラに携帯電話でも持たせとくべきだったかな。

と、その時、

「小野塚君、携帯……」

「え？」

木崎さんに言われて、俺は初めて自分の携帯電話が鳴っていることに気が付いた。ジーンズのポケットの中で、購入以来設定を変えていない電子音が小さく響く。

「っ。誰だ、こんな時に　」

携帯電話を取り出して、着信画面に表示される名前も見ないままに俺はそれを耳に当てた。するとそこから飛び込んできたのは、少し意外な奴の声だった。

『あつ。もしもし、信太郎？　あんた、今どこにいるの？』

「はあ？　……っっていうか、アカか？」

アカはグーラの姉貴分であり、彼女と同じ鬼だ。朗らかによく笑う女性で、いつも片手に持った酒がトレードマークの、少し変わった奴である。

そんなアカの声は、若干慌てているような雰囲気を漂わせていた。心なしか、少し息が荒いようにも感じられる。

『実は今さつき変な男に追いかけてられてるグーラを見かけてさあ、信太郎にも言つといた方がいいかと……』

「なっ!? そ、そっちこそ今どこにいるんだ、アカ!？」

それは正に願ってもない情報だった。変な男 悠貴さんのことで間違いないだろう。ということは、少なくとも今はまだグーラは捕まっていないらしい。

『えっと……若葉公園って分かる? その遊具場のところ走って』

「分かった、今行く!」

アカの言葉を途中で遮り、俺はブツツと着信を切った。別にわざと遮ったわけではないが、それほどまでに僅かな時間も惜しかったのだ。

「木崎さん、若葉公園ってどこ分かる?」

「わ、若葉公園……? う、うん。それなら私、行ったことあるよ」

「じゃあ案内してくれ! そこにグーラがいるらしいんだ!」

俺は木崎さんの手を取ると、そのまま再び走りだした。木崎さんも少しよろけながらも、それにちゃんと付いてきてくれる。

目指すは若葉公園。グーラ、今すぐ助けに行つてやるから……

!!

それから数分ほどで辿り着いた若葉公園は、中々に敷地面積の広

い所だった。大きな総合体育館に、屋内プール、テニスコート
芝生の生え揃った緑の広場に、向こうの方には木々の生い茂った森
まで見える。

その中にある沢山の遊具が設置された場所で、俺達はいく先程電
話で連絡を取り合ったばかりのアカと合流を果たした。

「おつ、信太郎……と、確か木崎ちゃん、だったかな？」

「あ、グーラちゃんの家にいた……。えっと、木崎悠美です」

「自己紹介は後！ アカ、グーラはどうしたんだ？」

俺は鼓動の早い心臓を押さえつけるように胸に手を当てながら、
相変わらず片手にビール缶を持っているアカに尋ねた。するとアカ
は缶を持ってない方の手で後頭部をポリポリと掻きながら、眉をひ
そめた困り顔を作り、

「ごめん。実は、あの後すぐに見失っちゃってねえ……」

「見失ったって……アカっ！」

「ちよつ、そんなに怒らないでよ。それより、まだこの辺りに
いるはずだから手分けして捜そうじゃないか」

事情を知らない故か、アカの態度はまだどことなく軽い。おそら
く全部を説明すれば、その褐色の顔も一瞬で青ざめるんだろうが
そんな余裕は一時もない。

とにかくアカが見失ってしまった以上、彼女の言葉の通りに手分
けをして捜索した方がいいだろう。それにあの電話の後に見失った
というのなら、グーラがまだ公園内を逃げ回っている可能性は高い。
「ところでさ、あの男って何なの？ 何でグーラを追っかけてたの
さ？」

「その説明も後だ！ とにかくグーラを見つけたら、すぐに保護し
てやってくれ！」

言うつやいな俺は二人に背を向け、思いつくままに足を走らせた。
その直後、後方で足音が二方向に分かれたのが聞こえる。

さてしかし、仮にあいつがまだ公園内にいるとしても、俺はどう
捜せばいいだろう？ ここは初めて訪れた場所であり、地理的な情

報は持ち合わせていない。

なら……そう、グーラが思わず向かいそうな方向を考えてみたらどうだろうか？　ここから見えるだけの客観的な情報を基に、グーラが行きそうな場所を推理するのだ。あくまでグーラの思考で単純でいって独特な、あいつの考え方を想像して。

……体育館。普通に考えるなら、誰かしら人がいるであろう体育館に逃げ込む可能性は最も高い。だがグーラの思考となると、どうもしっくりこない気がする。

……広場。公園に入り、まず目につきやすい場所ではある。が、如何せん逃げ場がない。いくらグーラでも、もう少し逃げやすい所を選択するのではないだろうか。

……森。傍から見ても緑の木が茂っており、木々の合間をジグザグに走って逃げれば追手を撒くことが出来るかもしれない。もちろん森の中を素早く移動するにはそれなりの体力が必要だが、グーラなら大丈夫だろう。

「……森、か」

思考の結果、俺は森が見える方向に足先を向けた。その途中で周りにも気を付けながらも、そのまま走って森へと向かう。

そうして辿り着いた森は、遠くから見えていたよりも薄暗く、鬱蒼としていた。確かにここなら、人を撒くには打ってつけた。

ふう　深く息を吐きながら額に浮かんでいた汗を手の甲で拭くと、俺はおもむろに一步を踏み出した。さらに一步、また一步辺りの様子を窺い、耳に神経を集中させながら森の中へと入っていく。

すると森の奥へと進むにつれ、先程まではまるで気付かなかった周囲の音が耳を突つき始めた。風に揺れる葉っぱの音。森に巣くう小鳥達の囀り声。そして森のさらに奥から聞こえてくる、何かが草を掻き分けて走っているような音。

小動物か？　……いや、違う。やはりグーラはこの森にいるんだ！　その瞬間、俺は走った。ただグーラがそこにいることだけを信じ

て土を蹴る。

さすがに多種多様な木々が生い茂るだけあり、遊歩道は樹木に合わせて少々複雑に曲がりくねっていた。さらに分かれ道も所々に見られ、思っていた以上にややこしい作りをしている。

それに加え、確実に俺の体は限界へと近づきつつあった。動くたびに熱を帯びた骨や筋肉が痛みを訴え、平衡感覚を失ってしまいそうなほどに頭の中はクラクラと回る。正直、今すぐにも膝を突いてしまってもおかしくない。いや、突きたい……。この膝を折ってしまいたかった。

だが俺は止まらない。道が無ければ切り開くと言わんばかりに、高く鋭い草を掻き分け、地面から突き出た木の根を飛び越え、草で皮膚を切ろうとも、隆起した根っこに足を引っ掛けようとも、構わずに進み続ける。

思い起こせば、グーラと出会ってからこつち、大変な目に遭ってばかりだ。痛い思いをしたことも少なくない。

そういえば、俺は何でこんなにもグーラのことで一生懸命になっているんだろう？ グーラの両親に、彼女の本能を抑えるとまで約束して、どうして出会ってから二ヶ月にも満たないあいつのことを……？

考えてみると不思議な話だ。気が付けば、俺はグーラのことをとても大切に思っている。どうして、いや、きっと理屈ではないのだろう。どうしてという過去の言葉は、もはや何の意味も成さない。あるのはただ、俺にとってグーラが大切な人であるという事実だけだ。

だからこそ俺は走る。彼女を守りたい。守らなければならない。その一心で、ひたすらに森を駆ける。

そしてどれだけの草を掻き分けた頃だろうか。すっかり道と言えるものではなく、木々の僅かな合間を縫うように走っていた俺の目の前が不意に開けたのだ。

刹那、その視界に飛び込んできたものを確認するよりも早く、俺

は声を発した。

「グーラっ!!」

「あうっ!?! しんたろっ……?」

そこには砂利の敷かれた広めの道があった。おそらく、これも公園内のどこかだろう。ただし道は確かにあるものの、それは線の向こう　この森との確固たる境界でもある有刺鉄線の向こう側だ。

グーラはあたかもその行き止まりに背中を預けるようにして立っている。

そしてもちろん、俺の目の前には奴もいた。俺とグーラに挟まれるような形になったその人は、ゆっくりと首だけで振り向くと、意外そうに目をパチクリとさせながら口を開いた。

「小野塚信太郎……?　まさかここまで追ってきたのか?」

「悠貴さん、お願いですから話を聞いてください。グーラは　鬼は、あんたが思ってるような悪い奴らじゃないんだ」

はあはあと息を切らせ、肩で呼吸をしながら、俺はどうにか搾り出したような声でそう言った。それを聞いてから、悠貴さんはようやくこちらに体を向ける。

「確かに遙か昔なら、鬼は悠貴さんが思ってるような凶暴な化け物だったかもしれない。でも今は違う!　現代に生きている鬼は人間と何も変わらない　自分を律する理性も知能も持っているんだ!

だから……」

「何を言うかと思えば世迷言を……。鬼が理性を持つだと?　馬鹿な。理性とは人間を人間足らしめるもの　言わばこの世で人間にのみ宿るものだ。それを鬼が有するなど、笑止千万。鬼と人間は違う!　それとも、鬼が人間になるとも言うのか?」

「ッ!?　た、確かに鬼と人間はイコールではないし、鬼は人間にはならない。しかし、だからって人間と鬼が共存出来ないわけじゃない!　現に俺とグーラは二ヶ月間も一緒に暮らしてきたんだ!」

「それはお前がこの鬼の娘に魅入られているだけのこと。それに例えそうでないとしても、たった二ヶ月で何が分かる?　いずれ本性

を表した鬼に喰われるのが関の山だ」

そうなる前に被わねばならない　そう言つて、悠貴さんはスーパーでも見せていた白い御札を一枚、懷から取り出した。瞬間、彼の向こうにいるグーラがビクツと肩を震わせ、不安な表情を覗かせる。

やはり駄目か。悠貴さん　この人は、まるで俺の言うことを聞き入れようとしない。あくまで鬼は邪悪だと押し通すようだ。

それなら、俺が次を取る行動はただ一つ……！

「……何をするつもりだ？」

俺が拳を握り、それを体の前で構えたのを見て、悠貴さんはポツリと尋ねた。それに対し俺は、「決まってるでしょ」と短く答える。「ふんっ。そこまで囚われているのか、この鬼に。げに恐ろしい……、まさに心酔だな」

「あんたがちゃんと話を聞いてくれたなら、俺だつて平和的に行きたかつたんですけどね……っ！」

そう、あくまで平和的に、穏便に　俺にとつてもそれが一番だった。理性を持つ人間だからこそ、話し合いによる決着が何より大事なはずである。

しかしそれが叶わないのなら　それも、決して譲れないものがあるのなら致し方ない。何も生まないと言われているものではあるが、自分にとつて掛け替えの無いものを護ることは辛うじて出来るはずだ。

だから、俺は目の前の男を　悠貴さんを殴る！

「隙がありすぎる。てんで駄目だ」

「えっ……！？」

殴る　つもりだった。しかし実際には俺が手を出すよりも早く、悠貴さんの手の平が俺の顔をピシヤリと打った。鼻先を打たれた痛みと驚きに、俺は反射的に体を後ろに仰け反らせる。

それを悠貴さんは見逃さなかった。いや、むしろそうなることが分かつていたかのように、流れるような自然な動きで俺の脚を掬い

上げたのである。当然、俺はそのまま上半身から崩れ落ち、後頭部を地面に激しく打ちつけた。

倒れ転んだ所がちょうど柔らかい土だったのが、せめて幸いだったと言える。とはいえ痛みが無いわけではなく、俺は後頭部を手で押さえながら悶絶する寸前にまで陥った。

正直な話、悠貴さんに勝つなどということは微塵も考えてはいなかった。彼のポテンシャルは不明だが、俺自身は喧嘩などほとんどしたことがなく、尚且つ今は風邪を引いている状態だ。勝てる見込みなど無いに等しい。

だがそれでも、せめてグーラが再び逃げて、木崎さんがアカに保護されるまでの時間は稼ぐつもりだったのに……。

「安心しろ、小野塚信太郎」

悶え苦しむ俺を見下ろしながら、悠貴さんは口を開く。

「お前は悪い夢を見ているだけだ。だから僕が、すぐにお前の目を覚まし　ッ!？」

その時だった。それは不意に起こった。

只ならぬ空気が何処からともなく漂う　それを背中を感じ取ったのか、悠貴さんは途中で言葉を切り、ハッと後ろに振り返る。その一方で俺は瞳を開きながら、視界の隅にいる彼女の名をポツリと呟いた。

「……………」

眉間に皺寄せ、眉の端を吊り上げて、その焦点の合った目は真っ直ぐに自分自身をここまで追い詰めた者を射抜いている。その表情は、先程とはまるで違う。恐怖から怒りへ　彼女の中の何かが切れ、そして僅かな理性が、大きな本能に押し潰されていた。

「……ようやく本性を表したか」

悠貴さんはサッと身構える。左手の指で御札を挟み、右手は握るか握らないかの曖昧なところを行き来する。

それに対し、グーラはギリッと歯を鳴らした。ただの歯ではない、鬼の歯だ。どんな肉をも噛み千切る　まるで大型肉食獣のように

鋭く尖った牙だ。

そして次の瞬間、グーラが地面を蹴った。

「ぐつ、グーラ……!？」

俺の呼び声も空しく、グーラは悠貴さんに襲い掛かる。その動きはまるで野獣のようだ。およそ体の小さな少女の動きとは思えない。この異常な身体能力は鬼の本能が成せる業なのだろうか。

そしてそれに相対する悠貴さん　彼の身体能力も並ではない。

グーラの猛攻は悠貴さんの右の平手によって捌かれ、逆に悠貴さんがグーラに御札を貼り付けようとしても、それは彼女に掠ることもない。

その双方一歩も引かない高レベルな争いを、俺は未だ地に伏したままで呆然と見ていた。本能に支配されたグーラはもう既に何度か見ているが、それでも目の前の光景は夢見心地だ。まるでドラマか映画でも見ているように実感がなかった。

しかしこれが現実であると思いついた刹那、俺の心の中には焦りが滲み出してきた。二人を　グーラを何とかして止めなければ、という焦りだ。

グーラが本能に支配されてしまったら、身を挺してでも彼女の内なる鬼を抑える　それが、俺が自分自身に課した義務であり約束だ。それにこのまま放っておいて、彼女と悠貴さんを衝突させ続けるわけにはいかない。

俺は、グーラを護るためにここまで追ってきたんだ！

そう思った途端に、俺の手足には僅かながらに力が湧いた。全身が、今すぐに立ち上がれと急かす。

と、その時、俺は悠貴さんが吐き捨てるように悪態をつくのを目にした。見ると、いつの間にか悠貴さんは背中に樹木を置いており、その直線上にはグーラの姿　その口は大きく開けられ、鋭い歯を剥き出しにしている。言わずもがな、その視線は一直線に彼を捉えていた。

それを確認するや否や、俺は二人の間に割って入った。何か考え

があつたわけではない。ただ咄嗟に、自然と体が動いた結果だった。そして悠貴さんへと向かつて今まさに飛び出そうとしていたグーラは、そのまま俺の体にしがみ付き、その右肩にガブリと犬歯を突き立てたのである。

「いぎつ、つあつ……！？」

俺の肩に　肉に、グーラの歯が深々と突き刺さる。それはもはや激痛なんてもんじゃない。その痛みだけで気を失ってしまいそうだ。

だけどまだ気絶するわけにはいかない。俺は搾りきつたような声で、グーラの名前を何度も呼び続けた。何度も何度も、名を呼ぶことが彼女の理性を呼び覚ますことに繋がると信じ、

グーラ！　グーラっ！　グーラっっ！！　と。

「……………しんたろー？」

次の瞬間、フツと俺の全身から力が抜けた。倒れこむ瞬間に見えたグーラの目は、いつもの如く焦点が合っていない。…………良かった。…………しんたろー？　しんたろー！？」

うつ伏せに倒れる俺の体を、グーラが必死にゆさゆさと揺する。しかしもはや意識と共に感覚も手放し始めていた俺にとっては、それはあまり意味を成さなかった。

ただ耳に、グーラの涙混じりの声が聞こえるだけである。だがそれも、次第に小さく消え入っていく。

「…………愚かだな」

そんな中で、ふとグーラ以外の声が俺の耳を突いた。

「やはり鬼は害悪でしかない。お前がどれだけ必死にこの鬼を庇おうと、結果はこれだ。それでもまだ、この鬼に理性があるとでも言うのか？」

それは俺に問いかけているのだろうか？　しかしどちらにせよ、もう俺の口は動きそうにない。

「…………とは言え、小野塚信太郎　お前に免じて、この鬼を見逃してやらんこともない。僕にも情というものはあるからな。この鬼の

娘がもう二度と人間の前に姿を現さないというなら、抜わずにいてやる」

数歩分の足音　そして少し離れた所から、悠貴さんの言葉は続く。

「貴様も抜われなくなければ、さっさと元いた場所に帰れ。害しか与えぬ鬼と人間が交わることなど、土台無理な話なんだ」

そのまま足音は遠のいていった。その間もずっと、グーラが俺の名前を呼び続ける。嗚咽混じりに、その声はまるで言葉になっていない。

「やだ！　しんたろー！！　グーラ、やだっ！！」

やだ……やだ　ああ、俺もグーラがいなくなるなんて嫌だぞ。でも安心しろ、俺が守ってやるから。悠貴さんが文句を言ってきた、またお前に何かしようとしても、俺が絶対に守ってやる。

だから……そんなに泣くな、グーラ。

「しんたろーっ！！」

その直後、プツリと俺の意識は切れて堕ちた。

最終話 第三幕

ふと目を覚ますと、そこは暗闇だった。回転の悪い頭で、俺は一つ一つの様子を確認していく。

どうやらここは室内らしい。既に日は落ちている。そしてこの全身を包む布の感触　布団が何かに入って横になっているようだ。額には、僅かに湿ったタオルが乗せられている。

と、次第に目が暗闇に慣れてきたので、俺はゆっくりと上半身だけを起き上がらせると、少し目を凝らしてみた。

臃げにテーブルやタンスといった家具の形が見えてくる。布団かと思ったが、どうやらベッドの上にいたようだ。そしてすぐ目の前には、フローリングの床に座り込んだままでベッドの縁に腕を掛けながら眠っている木崎さんの姿があった。

あまりにも近くに木崎さんの顔があったので少し驚いていると、さらに俺の目は暗闇に順応していった。すると、テーブルの向こうでアカが寝息を立てながら横たわっているのも確認できた。

ベッド横のチェストの上に置いてある時計を見ると、短針は既に十一時を指している。長針と合わせると、もう少しで日を跨ぐようだ。

俺は木崎さんを起こさないようにそっとベッドから抜け出すと、その場所全体を見渡すようにしてフローリングに立った。

どうして俺はここにいるんだろう？

数秒ほど頭の中の記憶を探ってみるが、何かが引つ掛かって思い出せない。確か、悠貴さんから逃げるグーラを追って、木崎さんと共に公園に……

「いッ!？」

その時、不意に俺の右肩にズキツと痛みが走った。思わず左手で押さえつけてから見てみると、ちょうどＴシャツの肩の部分が破かれ、そこに包帯が巻きつけられている。暗いので確認しにくいが、

じんわりと血が滲んでいるようにも見えた。

……そうだ。本能に支配されたグーラを体で止めて、そのまま気を失ったんだった。

その後はどうなったんだ？ おそらく今の状況から推測するに、木崎さんとアカに発見され、そのままここ 冷蔵庫横に積まれている大量の酒から見て、アカが住むアパートの一室だろう に運び込まれたようだ。

「ふう……」

俺は肺の奥から深く息を吐き出した。その溜め息には複数の意味が込められている。疲労や安堵、そして感謝。二人はきつと、ずっと俺の介抱をしてくれていたのだろう。

ついさっきまで自分に掛けられていた布団と毛布を手にとると、俺はそれぞれを木崎さんとアカにそつと掛けた。

「……ありがとう」

起こさないように小声で感謝の辞を述べる。するとそれに答えるように、木崎さんはにんまりと口を曲げた。どんな良い夢を見ているのだろうか。

と、そこで俺はふとグーラの姿が見当たらないことに気が付いた。てつきり俺と一緒に、木崎さんとアカに保護されたものだと思ったが まさか、また悠貴さんが……！？

見逃すだなんて言っただけであの場は去っていったが、あの男なら考え得る。そもそもあの状況で見逃されたことこそが不思議なんだ。最初はあるなんにも鬼を抜うことに躍起になっていたのに 情があるだなんて言葉は、とてもじゃないが信じられない。

だとすれば、こうしてはいられない。俺は言ったんだ 守ってやるって。絶対に守ってやると、俺はグーラに約束したんだ！

そこからの俺の動作は素早かった。手探りで部屋を出てから玄関まで辿り着くと、暗闇の中で自分の靴を履いた。さらに目の前のドアの内鍵を外し、ドアノブを回す その時だ。突如背中から声を掛けられ、俺は驚いて後ろに振り返った。

暗闇の中で、人の影がゆらりと揺らめく。それはアカだった。寝ぼけ眼を擦りながら、大きく欠伸をしている。

「ふわあ……信太郎、起きたんだ。ってか、何してんの？」

「あ、アカ……。いやその、グーラが……」

「グーラ？」

アカはその場でさつと部屋の方を見渡した。そして首を僅かに傾げながら、

「ありや？ 本当だ、グーラがいない。おかしいなあ……」

「おかしいって……グーラはここにいたのか、さっきまで？」

「うん、悠美ちゃんと一緒になって信太郎に付きっ切りだったんだよ。少なくともあたしが寝るまではいたけど……」

……… ということだ？ ついさっきまでは、グーラはここにいたつまり木崎さんとアカに、ちゃんと保護されたということだ。

それに、グーラが一人でここを出て行く理由はない。この部屋には皆がいる 安全な場所だ。ここにいれば、悠貴さんという恐怖にはとりあえず晒されることはないはずだ。

だけど、グーラはいない。それが現実だ。何がどうしたのかは分からないが、再びグーラが消えたということだけが現実として残っている。

「と……とにかく俺はグーラを捜しに行ってくる。まだ遠くには行っていないかもしれない……！」

「あつ、あたしも行くよっ！ まだ昼間の、悠美ちゃんの兄貴がうるついているかもしれないしね」

どうやら俺が眠っている間に事情は聞いたらしい。アカは手早くスニーカーを履くと、俺と共に部屋を飛び出した。

そこは何軒かの家や集合住宅が並んで建っているような所だった。ちょうど俺が住んでいる大学近くのアパートの周りに似ている。時間帯のせいかな、円い月と星が綺麗に見えた。

最初、グーラを捜して走りながら、俺は二手に分かれようと提案した。しかし、それは断固として却下された。理由は、また俺に倒

れられては困るからだそうだ。……確かに否定は出来ない。

それにアカとは違って、俺はこの辺りの地理を全く知らない。それを考慮すれば、彼女の言うとおり一人よりも二人で行動した方が効率は良かった。

そして、グーラを求め回ってからどれほど経った頃だろうか。

俺達は小さな街灯だけが等間隔にポツポツと設置されている路地で、肩を落とし、顔を下に向けながらトボトボと歩いているグーラを発見した。

「グーラっ！」

ダツと、俺は彼女の元に駆け寄る。辺りに悠貴さんの姿は無い……。やはりグーラが自主的に外に出てきたのだろうか。しかし、どうして？

グーラは歩みこそは止めているものの、依然頭を下げているために表情は読み取れない。しかも一言も発せず、ただジッと自分の足元を見ているだけである。

だがそれでも、俺は心の中でホッと胸を撫で下ろしていた。少し様子はおかしいが、何にせよグーラが無事なようで良かった。

「……まあ、話はまた後だ。ほら、グーラ」

色々と疑問は残ったままだけれど、まずはアカのアパートに戻る。こんな暗い道端では、満足に話することも出来ない。

そう思い、俺はグーラに向かって手を伸ばした。それと同時に、戻ろうと優しく語りかける。

しかし次の瞬間、俺が差し出した手は、他でもない彼女自身に否定された。

「……え？」

相変わらず顔を上げないままで、グーラは静かに首を横に振った。それは明らかなる拒否の証。俺の手は取らないという意思の表れだった。

「ど、どうしたんだい、グーラ？ ほらっ、あたしん家に帰ろうよ？」

その一部始終を隣で見ていたアカが、少々ぎこちなく笑いかけながら同じように手を差し出した。しかしまたもや、グーラは小さく首を振る。そのいつもとは大分雰囲気異なるグーラに、さすがのアカも目を見開いて驚いているようだった。

と、俺達が行き場を失った手を戻すことも出来ずにいると、不意にグーラは歩みを再開した。

「ちょ、ちよつと待て、グーラ!!」

俺とアカのちよつと間を通り抜けようとするグーラの手を掴み、俺はやや無理矢理に彼女をこの場に繋ぎとめた。しかし、それでもまだグーラは足を止めようとはせず、こちらに背を向けながら無言で腕に力を入れている。それに対し、俺もその手を放すまいと指に力を入れた。

「どうしたんだ、一体!? どこに行く気なんだ、グーラ!?!」

「.....」

無言。どれだけ声を掛けても、グーラは一向に口を開こうとしない。

それは普段の彼女からは想像も出来ない態度だった。まるで別人そう、ちよつど彼女が本能に支配されている時のようだ。

.....いや、似ているが違う。本能に支配されたグーラはその行動のままに荒々しさを漂わせているが、今日の前にいるグーラからはむしろ悲愴感のようなものが滲み出ていた。

「ねえ、グーラ。何か言つてよ.....」

アカも心配そうに眉をひそめている。それでもグーラが何かを言う気配はない。

「グーラ、頼む。何か.....何でもいい。黙ってないで喋ってくれ!」
そうでないと始まらない。グーラが何かを言ってくれないと、ここから先には進めない。グーラが何をしようとしているのか。そしてその理由を聞かない限り、俺はこの手を放すわけにはいかなかった。

その時だった。俺達の言葉がようやく届いたのか、ふつとグーラ

の腕に込められていた力が抜けた。そして依然こちらに背を向けたまま、彼女は小さく、いつもの口癖を呟いた。

「……うち、帰る。グーラ、お父さんとお母さんの家に帰る。しんたろーとは、もう会わない……」

「なんつ……！ 何言って……どういうことだよ、グーラ！？」

グーラがやつと零してくれた言葉に、俺は思わず声を荒らげた。

どうして 意味が分からない。グーラの真意が俺には理解出来なかった。

が、そこで俺はふと悠貴さんの言葉を思い出した。

『この鬼の娘がもう二度と人間の前に姿を現さないというなら、被わずにいてやる』

そうだ……。グーラは今日、命の危険を感じたんだ。訳も分からずに恐怖を感じ、どこまでも追いかけてくる男から必死になって逃げる。それは、どれほどまでに恐いことだったのだろう。

そんな男が提示したグーラを見逃すための条件が、二度と人間の前には現れないこと。つまり、俺とはもう会わないということだ。俺は知っている。グーラが、俺のことを大切な人だと思っているという事実。でも、それと自分の命とを天秤に掛けたなら、それは

「グーラ……っ」

俺は、グーラを掴んでいる方の手の力をスツと緩めていった。

誰しも、自分の命は大事だ。もちろん俺だって大事だ。当然、グーラだって大事に決まっている。

そう考えれば、グーラが帰ると言い出したのは至極当たり前のことだった。死にたくない。生物の、最も原始的な本能だ。どれだけ理性を保っていて、本能を押し潰していたとしても、これだけに逆らえない。グーラは生物として、ごく自然で正しい選択をしただけなのだ……。

そして俺が完全に手を放すと、グーラはおもむろに歩き出した。ア力はどうしていいのか分からず、珍しくオロオロとしながら俺達

を交互に見つめている。俺はジッと、彼女の背中を見送っていた。
……これで、もう会うことはないのかもしれない。でも、グーラが無事なら、俺はそれで……。

しかし次の瞬間、グーラが数メートル行っただけでピタリと足を止めた。一体どうしたのか。そう思っていると、彼女はフィツとこちらに振り返ったのである。

その顔はこれでもかと言わんばかりにクシャクシャに歪み、微かに腫れぼったくなった目からはボロボロと涙が溢れていた。

「グーラがいたら、しんたろーに迷惑かかる。怪我して、倒れてそれにグーラ、しんたろーのこと噛んじやったから。だから、だから……さようなら。……ごめんなさい」

それだけ言うと、グーラはまたこちらに背を向けた。そして次第にゆっくりと遠ざかっていく。

その一方、俺の頭は真っ白になりかけていた。

グーラは自分の命が惜しいから、俺の前から去ろうとしているんじゃないのか？ 自分のために今、歩いているんじゃないのか？

……俺のためなのか？

確かにグーラと出会ってから、俺は色々な面倒事に巻き込まれた。今回のことは特にそうだ。グーラとさえ出会っていなければ、俺は普通の生活を送っていただろう。こんな怪我也、もう少しで死ぬような思いもせずに……。

だからグーラは、それを責任に感じて 俺のために、俺の前から去ろうとしているのか！？ それを、俺は…… ツツ……！

「グーラあつ……！」

俺は走った。真っ直ぐに、先行く少女の背中を追った。そしてその小さな体を、後ろから抱きしめた。決して放さぬように強く、ギュツと。

「行くな、グーラ！ これ以上、もう進むなっ！」

「あつ……！？ でも……でも、しんたろー……！」

グーラの声は震えていた。嗚咽混じりの涙声だ。

「グーラと一緒にいたら、しんたろーが怪我して、倒れたり……」
「大丈夫、俺は見た目より頑丈なんだ。ちよつとくらいの怪我なんてすぐに治るさ」

「でも、またグーラがしんたろーのこと囓んじやうかもしれないし……」

「その時は俺が正気に戻してやる！ 何度も、何度も 次からは、お前に囓まれる前にな」

「でも……」

グーラが次の言葉を紡ぎ出すよりも先に、俺は彼女に回していた手で、その体をグイツとこちらに向かせた。幾つもの大粒の涙が頬を伝っている 近くで見ると、本当に酷い泣き顔だ。

そんなグーラの目を、俺はジツと見つめる。真正面から、決して逸らすことなく、ただひたすらに見つめる。

そして俺は自分の気持ちを 嘘偽りの無い本当の思いを、ハッキリと口にした。

「俺がいてほしいんだ！ 俺が、グーラにいてほしいんだっ！ どれだけ怪我をして、どれだけ大変な思いをしても、グーラがいなくなるのは嫌なんだ！！ 何があっても俺が絶対に守ってやる！ ずつとお前を安心させてやる！ だから……だからっ！！ どこにも行かないでくれ、グーラ！！」

それが俺の全部だった。心の中の全部 俺はそれを、グーラにぶつけたのだ。

グーラは相変わらず泣いていた。けれどもその涙は、数秒前までとは何か違っていた。

「……いいのか？ グーラ、しんたろーと一緒にいても、いいのか？」

「うん、良いんだ。一緒にいよう、グーラ」

「しん、たろー……」

その瞬間、静かに涙を流しているだけだったグーラが、ワツと声を出して泣き始めた。今まで我慢していた分を全て口から吐き出し、

大きな声で泣き崩れた。

そんなグーラを、俺はソツと抱き寄せた。胸を貸し、その小さな背中や柔らかい髪を揺らしている頭を優しく撫でてやる。しばらくの間、俺はそうやって彼女を包んでいた。もう二度と離さぬようグーラと、ずっと一緒にいられるよう。

しかしその時、不意に俺達の間にも口を挟む者がいた。その人物を確認するや否や、俺は咄嗟にグーラを自分の背中に隠した。

「悠貴さん……」

一体どこから現れたのか、いつから見ていたのか。街路灯の光に照らされるようにして立っている悠貴さんは、昼間と変わらぬ冷たい視線を眼鏡越しにこちらに飛ばしていた。

「……愚かだ」

小さく吐き捨てるように、彼はもう一度同じことを言う。俺はそれに対し眉間に皺を寄せると、悠貴さんをキツと睨みつけながら口を切った。

「何が愚かだって言うんですか？」

「決まっているだろう。去ろうとする鬼を引き止めるという、お前の馬鹿な行為だ」

眼鏡のブリッジを指で押し上げながら、悠貴さんは懷から御札を取り出した。瞬間、俺の服の裾を掴むグーラの手が震えたが、俺はそんな彼女の手を後ろ手にギュツと握ってやる。

「……また、グーラを抜うなんて言い出すつもりですか？」

「当然だ。その鬼が去らぬというなら、抜う以外に道は無い。小野塚信太郎……これは、お前のためだ」

一歩、二歩。目の前の男は、ゆっくりとこちらに向かって歩き出す。対して、俺は次にどういう行動に移ろうかと考えを巡らせていた。

正直な話、再び悠貴さんと取っ組み合っても勝てる自信はこれっぽっちもない。なら、やはり逃げるべきだろうか。グーラを抱えてこの男から。駄目だ。逃げ切る自信も、やはりない。

しかし、それでもやらなきゃいけない。どうにかしないといけない。俺は決めたんだ　もう、グーラと離れ離れにはならないと！と、その時、俺と悠貴さんとの間にまた別の誰かが割り込んだ。それは他でもないアカだった。両手を横に広げ、俺とグーラを庇うようにして悠貴さんの前に立ちはだかる。

そしてアカは強い口調で悠貴さんに言葉を投げた。

「あんた、何で鬼を祓うんだい？」

「……人を喰らう鬼は、人間にとって害悪でしかないからだ」

さも当たり前のように悠貴さんは答える。するとアカはムツと顔をしかめながら、

「何にも知らないくせに、勝手に決め付けるんじゃないよっ！あたし達にだって事情がある　食わたくて食べるわけじゃない！それを聞かないで一方的に鬼が悪いと決め付けるって言うなら、そっちの方がよっぽど酷いじゃないかっ！」

それは俺が初めて見るアカの怒りであった。彼女は肩をわななかせ、訴えかけるようにハッキリとした声でそう言った。

「……事情……？」

その一方で、意外にも悠貴さんは少し目を丸くしていた。足の歩みも止まり、ジツとアカの顔を見つめている。その表情は、まるで何かに驚いているかのようだ。

「鬼が人を喰うのに、事情があると言うのか？　理性も持ち合わせていない物の怪が　」

「理性が無くて賃貸契約が出来るかっ！」

悠貴さんの言葉に噛み付くように、アカは自分達に理性がないということを否定した。その言葉で、さらに悠貴さんは目を丸くする。しかし直後、悠貴さんは短く舌打ちをすると、その目をフツと元に戻した。そして眉をひそめながら、

「っ……。僕としたことが、鬼の言葉なんかをまともに受け取ってしまった。鬼を　物の怪を信用するなど出来るはずもない！」

強情　おそらく悠貴さんの性格を一言で表すのなら、それが相

応しいのだろう。彼の中においては『鬼は害悪』という考え方が絶対なのだ。おそらく陰陽師の修行の中で、それだけをずっと教えられてきたのだろう。

……だとしたら、もしその考えに揺らぎを与えられれば 彼の考え方に波紋を呼び起こすようなことがあれば、もしかすると。

俺がそんなことを思った時だった。俺でもない、ア力でもない

また別の何者かが、悠貴さんの言葉を否定したのである。悠貴さんはそれを耳にした途端、ハツと後ろに振り返った。

「そんなことない……！ そんなことないよ、お兄ちゃん」

「悠美、お前……！？」

突如姿を見せ、さらに自分の言葉を否定した妹に、悠貴さんは驚きを隠せない様子だった。それに反して木崎さんはまるで落ち着いた口調で、悠貴さんに対して言葉を続ける。

「お兄ちゃんが考えていることは、私にも分かるよ。お兄ちゃんのような力はないけど、私だっつと小さい頃からお父さんの話を聞いてきたんだもの……。だから、お兄ちゃんがこういう風に鬼を見ているのかを理解出来る」

そこで一度、木崎さんは言葉を切った。そして次に口を開いた時、その口調はア力のように強いものに変わっていた。

「でも！ それでも私は二人を信じる！ 古臭い昔話なんかより、私は目の前にいる二人のことを信じる！ 私は、二人を信じている自分自身を信じる！！」

その目には、強い意志の光が輝いていた。何事にも曲げられない強い光 それほどまでに彼女が俺達のことを信じてくれているのだと思うと、何とも言えない感情が心の底から込み上げてきた。嬉しい、ありがたい そういう色んなものを全てごちゃ混ぜにしたような感情だ。

そしてその光は、悠貴さんにも確かに届いていた。

「……信じる？ 悠美は、鬼を……こいつらを信じるというのか？
こんな、物の怪を……！？」

その顔に、動揺の色は隠せていない。きつと悠貴さんにとっては、昔から自分と同じ話を聞いて育ってきた木崎さんは、僅かな差異はあれど自分と同様の考え方を持つている者だったのだろう。しかしそれは今まさに脆くも否定されたのだ。

そんな彼を見て、俺はこれをチャンスだと受け取った。

「悠貴さん、聞いてください」

つい先程まで剥き出しにしていた闘争心を胸の奥に仕舞い込み、俺は努めて口が激しくなるのを抑えた。悠貴さんは依然動揺したままの表情で振り返る。

「悠貴さん……あなたはあなたで、俺のために行動してくれていたんですよね？ そのことについては、ありがとうと言わせてもらいます。だけど、これは覚悟の上の決断なんです。魅了されたとかそんなことじゃなくて、俺自身が考えた末に至った答えなんです。だから、お願いします。一度だけでいいから、俺を　俺達を信じてください」

こんなことを言っても、悠貴さんなら軽く一蹴するだろう。だがそれでも、俺は木崎さんのように信じることにした。悠貴さんが俺達のことを信じてくれることを、信じることにしたのだ。

理性とは人間を人間足らしめるもの。その悠貴さんの言葉通り、俺達には理性というものがある。そして『信じる』という行為は、理性があるからこそ出来ることだ。……昼間の俺にもう少し余裕があれば　暴力なんて短絡的思考に陥らなければ、もっと良い道が開かれていたのかもしれない。

「悠美……。小野塚、信太郎……」

悠貴さんは、俺と木崎さんを交互に見比べていた。すっかり困惑しきった表情を浮かべて、まばたきも多く、頻りに口の隙間から小さな息を漏らしている。

そんな彼を、俺はそれこそ穴が開くまで信じ続けた。彼の心に届くように、ジッと、ずっと

そして数瞬。不意に悠貴さんが口を開いた。

「……鬼は害悪だ。陰陽師である僕にとって、それだけは曲げられない。それを曲げることは、僕の存在の否定になる」

悠貴さんは俺に対して真っ直ぐに体を向けていた。彼の中で考えが纏まったのか、つい先程よりかは幾らか落ち着いた雰囲気漂わせている。

彼の言葉を聞いた直後、俺はこの期に及んでハッと身構えかけた。しかし例えまた昼間の繰り返しになるとしても、俺は悠貴さんを信じると思ったのだ。

すると次の瞬間、悠貴さんはその手に持っていた御札を、静かに懐へと戻した。

「だが陰陽師だからこそ、僕は人を信じたいと思っている。人を信じない者に、人を救うことなど出来ない。それが僕の考えだ。だから小野塚信太郎……僕は、お前を信じてやる」

「悠貴さん……！」

俺は、自分の中で何かがパツと晴れ上がっていくのを感じた。嬉しかったのだ。それこそ、先程の木崎さんの強い光を感じた時と同じくらいに。

「しかし勘違いはするな。僕が信じるのは、あくまで人間であるお前だけだ。その鬼共を信じる気はない。それに今回は見逃すが、もし今度そいつらが人間に害を為したら、その時は、もう容赦はしない」

最後にそれだけを言い残すと、悠貴さんはそのまま俺に背を向けて歩きだした。俺達はそれを、その背中が小さくなって見えなくなるまで無言で見送り続ける。

そしてとうとう悠貴さんの姿が闇に消えた瞬間、ア力が「いやつたー！」とガッツポーズを繰り返した。

「お、小野塚君！ グーラちゃん！」

「やったね、二人ともっ！ 信太郎の大勝利だよっ！」

木崎さんとア力の二人が駆け寄って来る最中で、俺は自分の後ろにいるグーラに顔を向けた。すると振り向いた刹那、同じように視

線を上げた彼女と目が合った。

グーラはまだ少し涙を浮かべながらも、その顔にはしっかりと喜びの表情が刻まれていた。嬉し涙が頬から顎を伝って地面に落ちていく。そしてきつと、俺も似たような顔をしているのだろう。

「しんたるー！」

「うわっ!？」

いつも通りの元気な声と共に地面を蹴り、グーラは勢いよく俺に飛びついて来た。俺は僅かに上半身を反らすことで彼女を受け止めると、そのまま背中の手を回し、ギュツと抱きしめてやった。そして二人して互いの顔を見つめていると、不意に大きな笑いが込み上げてきたのである。

この笑いはきつと幸福感の表れであろう。だとしたら今の俺は大笑だ。何故なら、またグーラと一緒にいられるんだから。そしてこれからもずっと。

「グーラ……グーラ。良かった……」

木崎さんとアカの笑顔も加わり、笑いが周りを包む中で、俺は上手く言葉を紡がないでいた。笑みの合間に良かったという言葉だけを繰り返し、グーラと共に顔を合わせているだけだ。

この今の気持ちを、どう上手く表現すればいいものなんだろう？ただ笑いながら溢れ出てくる涙を拭いているだけでは、やはり駄目だろうな。

と、その時、グーラが一際大きな声で俺の名を呼んだ。

「しんたるー、ありがと。グーラ、しんたるーのこと大好き！」

そして次の瞬間、俺の頬にグーラの唇が触れた。一瞬、顔が一気に熱くなったのを感じた俺は驚きで目を丸くしたが、フツと口の端を上げると、彼女を抱きしめる腕に力を入れながらその耳に囁いた。「ああ。俺も好きだよ、グーラ」

……なんだ。こういう時の気持ちを表現する方法なんて、こんなにも簡単なことなんだな。

そのまま俺達は笑いあっていた。いつまでも飽きることなく、ず

と　　グーラと共に、ずっと。
。

最終話 エピローグ

不意に少女は目を覚ました。チュンチュンという小鳥の囀りが、窓の外から聞こえてくる。

少女は自分に掛けられた毛布を押し分けると、上半身を起き上がらせながら辺りをキョロキョロと見回した。

アパートの一室には彼女を含め四人の男女が寝転がっている。部屋の中心に置いてあるテーブルには大量の酒の空き缶が積んであり、他の三人はまだしばらく起きる気配は見えない。

その寝息を立てている三人のうちの一人 青年に、少女は注目した。青年はテーブルを挟んでちょうど自分と反対側で毛布を被り眠っている。

少女はゆっくりと立ち上がると、他の二人に躓かないよう気をつけながら青年の傍までやって来た。そして彼の枕元にチョコンと座り、口を半開きにして眠る青年の顔をジッと見つめると、くすりと笑みをこぼした。

「あーうー」

そのまま少女は青年の毛布に潜り込み、静かに目を閉じた。少しすれば、小さく可愛らしい寝息が聞こえてくる。

大好きな人の隣でする二度寝は正に至福のひと時である 彼女の寝顔が、それを何よりも物語っていた。

最終話 エピローグ（後書き）

ここまで読んでくださり、まことにありがとうございます。これにて同棲喰人鬼の本編は終わりになります。

思えば、最初に書きだしてから一年が経過してしまいました。しかし無事に終わることが出来て本当に良かったです。ただ心残りというか大きな反省点といえば、設定が屋気楼の如く揺れてしまったことでしょうか。特に後半での信太郎の性格の変わりっぷりや、一話でのグーラの言動には目も当てられません（汗）。

その辺りの反省を踏まえつつ、これから小説を書いていきたいと思っています。また見かけた時は読んでくださると嬉しいです。

それでは最後にもう一度。ここまで読んでくださり、本当にありがとうございます！

追伸：よろしければ、この次にある外伝の方もどうぞ。

外伝 公園の褐色少女

鬼とはつまり人に害為す物の怪だ。僕はずっと、父親からそう教えられてきた。

そして僕にはそれを抜う力がある。それが意味することはただ一つ　だからこそ、僕はずっと修行を積んできた。今はほとんど失われてしまった陰陽師としての修行を　。

なのに、どうだろう？　僕は鬼を見逃した。邪悪であるはずの鬼を抜わず、奴らに背を向けてしまった。一体どうして、この僕が……？

『昔話なんかよりも、私は目の前のものを　自分自身を信じる！』
悠美の言葉が、何故かずっと耳に残っている。自分自身　悠美は人間である自分と共に、あの鬼の娘を信じたというのか。害悪である鬼なんかを……。

……　そういえば物の怪を見逃したのは、これが初めてではなかったな。そう、確かあれは僕が小学生の頃だ　。

それは暑い日だった。夏休み　今となつては懐かしい響きだ。
クラスメートの者は皆、仲の良い友人達と共に日差しでその肌を黒く焼いていた。その様は、まさに遊び回るといふ表現が正しいだろう。子供の特権とはよく言ったものである。

だが僕にとって、そんなものは無縁でしかなかった。来る日も来る日も陰陽師となるための修行を積むだけの生活だったのだ。もつとも、それを苦に思ったことは一度も無い　少なくとも僕自身は、ところが母はどうやら、少しの休みも与えないまま子供に修行を

させる夫に我慢がならなかったようだ。

「勉強や修行もいいけど、遊ぶことも子供にとっては同じくらいに大事よ」とは、母の弁だ。

かくてある時を境に、僕には週に三日の暇が出来てしまったのである。

しかし、暇 それは僕にとって真に文字通りの言葉だった。何せ他の子供達と同じように公園に行ってみても、何をするわけでもなく夕暮れを待つだけなのだ。

当然だ。ずっと修行だけを続けてきた僕に、友人などいるはずもなかった。

そんな僕はいつも一人で公園の遊具場脇に置いてあるベンチに何するわけでもなく座っていた。さすがに苦痛を感じなくなかったが、これも精神修行の一環だと思うことで何とかやり過ごしていた。そして今日もまた、いつもと同じ そう思っていた矢先、一人の少女が不意に僕に話しかけてきた。

「……ねえ、一緒に遊ぼうよ？」

それは不思議な子だった。日本人とは掛け離れた真紅の髪に、健康的な褐色の肌。そしてボヤツとして焦点の合っていない目が、ジツと僕を見つめていた。

「はあ？ いきなり何 ツー？」

その瞬間、僕の鼻腔は僅かな違和感を覚えた。この少女からは何か人間離れた臭いを感じる。悪臭とまでは言わないが、何かがおかしい。

この時、まだ力の弱かった僕にはそれが物の怪の臭いだとは断定出来なかった。ただその少女から漂う不思議な臭いに不信感を抱くことで精一杯だったのだ。

一方、そんな僕の心の内を知らぬ少女は、ふと僕の手をギュツと握り締めた。突然のことに驚きを隠せない僕をよそに、彼女はニツと口を横に広げてみせると、

「あたしの名前はね、*****。あなたは？」

「……木崎、悠貴」

「じゃあ、あつちで遊ぼう、ゆーき！」

「ちよつ、おい……！？」

そのまま彼女は、力いっぱい僕をベンチから引き剥がしたのである。すっかり混乱していた僕は抵抗することも出来ず、ひたすら彼女に手を掴まれたまま引つ張られていく。

そうして辿り着いたのは遊具場の一角　何てことはない、普通の砂場だった。

「ほら、お山作るっ！　でっかいやつ！」

そう言つと、少女はせつせと砂を集め、それを下から盛り始めた。そして何が何だか分からないうちに、僕はそれを手伝われる羽目になってしまったのである。

僕は彼女と向かい合いながら、その間にあるこんもりと盛られた砂をさらに大きくしていく。

少しすると、少女は不意に「完せーいっ！」と大声を出しながら嬉しそうに手を上げた。二人で盛って固めた砂の山は、二、三十センチメートルほどの高さになっていた。

「んじゃ、次はブランコ！　ぶらぶらっ！」

砂だらけの手で再び僕を掴むと、少女はまた強引にその手を引いた。そしてブランコの前にまでやってくると、彼女はおもむろにそれに腰を落としながら、

「最初はあたし！　ゆーき、押して押して！」

「何だつて僕がこんなことを……」

溜め息混じりに文句を零しながらも彼女の後ろに回ると、僕はその自分と比べて一回りか二回りも小さい背中をトンッと押した。途端に、少女はキャッキヤと笑いながらブランコを漕ぐ。

それからその背中を何度か押してやっている、ふと少女はブレーキをかけ、ブランコから降りた。

「次はゆーきの番ね！　あたしが押したげる！」

「なっ！？　ぼ、僕はいい！　ブランコなんて子供染みたまの……」

「いーから、いーから！ 遠慮しないで」

これまた強引に、少女は僕をブランコに座らせた。そして素早く後ろに回りこむと、大きな掛け声と共に勢いよく僕の背中を押す。すると僕は、そのままほんの少し上昇したところでバランスを崩し、つんのめるようにして地面に転がったのである。

「だ、大丈夫、ゆーき！」

心配したように、少女が僕の傍に寄ってくる。一方、体勢を戻した僕はそんな彼女に対して眉をひそめると、大人気もなく（子供だが）声を荒らげた。

「だから僕はいいって言ったんだ！ だいたい最初に乗りを教えたらどうだ！？」

言ってから、僕はしまったと思った。

「……もしかして、ゆーきってブランコ乗ったことないの？」

「わ、悪いかな？」

正直な話、ブランコだけでなく公園で遊ぶこと自体、今日が初めてだった。もちろん他人がブランコに乗っているのを見たことはあるが、自分でやってみると意外に難しかったのである。

僕が少し恥を感じて俯いていると、いきなり少女が僕の手を掴んだ。次は何かと見上げると、彼女はニンマリと笑って、

「じゃあ、あたしが教えてあげるね、ブランコの乗り方！」

そのまま引つ張り起こされて、僕は再びブランコに座らせられた。それから数十分　僕は彼女からブランコの乗り方をみっちりレクチャーさせられたのである。

しかもそれだけで終わりではない。そこからさらに彼女の勢いには拍車がかかり、僕は様々な遊具で遊ぶ彼女に強引に付き合わされた。気が付いた時にはもうすっかり日が落ちかけており、周りの子供達は続々と家路についていた。

「もうこんな時間か」。えへへっ。楽しかったね、ゆーき！」

「僕は疲れただけだ……。もう帰るぞ」

ようやく解放される　そう思い、僕は深く溜息を吐いた。そし

てそのまま彼女に背を向けて歩き出す。

だがその途中で、不意に彼女が僕の名を呼んだ。うんざりしながらも何気なく振り向いた僕は、思わず目を見開いた。

「ゆーき！ また遊ぼうねっ！」

夕陽をバックに少女は笑っていた。夕陽の赤が彼女の髪の色と重なって、とても似つかわしい。

僕はそれに言葉を返すことはせず、すぐさま首を元に戻した。そしてそのまま前だけを見つめて、その場を去っていく。背後からは少女のバイバイという声がいつまでも飛んできていた。

……太陽の下でこんなにも長時間遊んでいたのは初めてだ。だからだろう。何故だか顔がほんのりと熱かった。

その二日後　僕はまた公園のベンチに座っていた。別に他意はない。ただ……そう、ただ家にいても暇だったただけだ。だから公園にフラッとやって来たただけなのだ。

そして

「あつ、ゆーき！　ねえ、今日は何して遊ぶ？」

そして僕は、今日も偶々この少女と遊ぶことになった。そう、偶々　ただの偶然だ。僕が暇で公園にいたことと、彼女が公園にいたこと　その二つの偶然が重なっただけの出来事である。

偶然ならば仕方ない。僕は肩を竦めながら、その偶然が起こる度に彼女の遊びに付き合ってやることにした。

「最近、悠貴はどこに行っているんだ？」

ある日の晩の食卓で、不意に父がそう言った。いきなり何を言っているのかとも思ったが、横からの母の付け足しで、それが修行の無い日の僕の動向を聞いているのだと気が付いた。

「どこって……別に。ただ公園に行ってるだけだよ」

「んっ、そうか……。公園に……」

そこで父は一度口を閉ざした。しかし少し経つ毎にチラチラとこちらに視線を飛ばしてくるので、僕はつい眉間に皺を寄せた。

普段から口下手な父親ではあるが、今日はいつになくハツキリしない。何か言いたげではあるが、口に出さなくては伝わらないだろうに。

と、そこでふと母が口を開いた。母は小さくクスクスと笑いながら、

「心配いらないわよ、お父さん。悠貴は友達と公園で遊んでるみたいだから」

「そ、そうか！ それなら良かった」

母の話を聞いて、父は満足そうにご飯を頬張った。

どうやら父は、僕がずっと一人でいるのではないかと心配していたようだ。あまり親らしい人だとは思っていなかったが、父は父で友達を作る機会が皆無だった僕のことを気にしていたらしい。

しかし、そこから食卓の話題は変なところに着地した。

「今日も嬉しそうに水着を持って遊びに行ってたわ。ほら、若葉公園に大きなプールがあるでしょ？」

「あつ。私、見たよ。お兄ちゃんが女の子とプールで泳いでるの」

「あら、友達って女の子だったの？ 悠貴も隅に置けないわね」

「なっ！？ べ、別にあいつは友達じゃない！ ただ、偶々いつも遊んでやってるだけだ！」

いつもそれほど会話があるわけでもない家なので、こんな俗っぽい話題が食卓に上がるとは思ってもいなかった。しかも、それに僕が関与することになるとは……。

はあ 僕は溜息を吐くと、箸を置いた。そしてズルズルと今の話を続けられても敵わないので、御馳走様の言葉と共に、そのままその場を後にしたのである。

それにしても、女とは何故ああも俗的な話が好きなのだろうか？

それに僕は彼女と遊んでやっていただけなのに、どうして隅に置けないのが理解出来ない。

そもそも母の言った友達という単語も適切ではない。自分でも否定したように、僕と彼女は、あくまで友達なんかではないのだ。ただ一緒に

「遊んでるだけで……」

自分の部屋へと向かう途中で、僕の心にふと何かがよぎった。今まで感じたことのない変な気持ちだ。少しだけ、胸の内が苦しい……。

一体何なんだろう、これは？ 自分と彼女は友達ではないと思う度に苦しみは強くなっていく。友達なんかじゃないはずなのに、それを否定するのが辛い。

……いや、きつと疲れただろう。今日も彼女に振り回されっぱなしだったからな。一眠りすれば良くなるはずだ。

そう思い、僕は自分の部屋へと入った。そして少し早いが布団に潜り込む。

どうせ明日も彼女は公園にいるんだろうな。だったら、また遊んでやってもいいかもしれない……あくまで暇だから。

頭の隅でそんなことを呟きつつ、僕はそのまま夢の中へと堕ちていった。

だが明くる日、いつものように公園に向かった僕がその少女に出会うことはなかった。さらに次も、またその次も 彼女が公園に姿を見せることはなかった。

そしていつしか、僕も公園には足を向けなくなっていた。暇な時は家で読書なんかをするようになったのである。

気が付けば、夏休みは既に最終日に差し掛かっていた。

八月も最後だというのに、その日は特に日差しが厳しかった。ギラついた太陽の光が雲に阻まれることなく降り注ぐ。

そんな真夏日に、僕は自宅横に併設されている武道場で精神修行に勤しんでいた。と言っても、大したことをするわけではない。ただジッと目を閉じたまま集中し、周りの空気や気配を感じ取っていくだけである。

と、その時、遠くの方から誰かが近付いてくるのに僕は気付いた。足音の間隔や重さからして、おそらく父だろう。

「悠貴、いるか？」

案の定、それは父の声だった。僕はスッと目を開くと、正座をしたまま顔だけを声のした入り口に向けた。

「何、父さん？」

「ああ、悠貴。実はお前に使いに行ってもらいたいんだが……」

そう言う父の手には一通の封筒があった。まさか使いというのは、あの封筒を出しに行つて欲しいということなのだろうか。

「いや、すまん。悠美も母さんもいなくてな。父さんも仕事があるし、悠貴に頼まざるを得んだ」

「……分かった」

僕は正座を解いて立ち上がると、父から封筒と小銭を受け取った。どうやらポストに投函するのではなく、直接郵便局に持つて行かなければならない書類らしい。確かここから一番近い郵便局なら、公園の辺りにあるはずだ。

「じゃあ行ってくる」

落とさないようにしっかりと小銭をズボンのポケットに仕舞い、僕はそのまま武道場を後にしようとする。しかし、そこに父が待ったを掛けた。

「それが終わったら、今日はもう自由にしなさい」

「え？ でも、まだ修行が……」

「あ、その……今日は忙しいから、悠貴の修行を見てもらえないん

だ。だから今日はこれで終わり　　公園にでも遊びに行つてきなさい」

それだけを言うと、父はそそくさと社務所の方に去っていった。だが僕は、その言葉の最中で彼の目が僅かに泳いでいたのを見逃さなかった。

忙しいというのは、おそらく嘘だろう。そして修行を見られないというのも嘘だ。大方、最近になってめっきり外に出なくなった僕に気でも遣つたのだろう。えらく不器用な上に、いらぬ世話だ。

とはいえ父に珍しく気を遣わせてしまった手前、用事だけを済ませてさつさと家に帰ってくるわけにもいかない。僕は小さく溜息を吐くと、靴を履いた。

それからおよそ十数分。郵便局でやることなどは、たかが知れている。職員に封筒を渡し、代金を払つて　　気が付けば、僕は公園の遊具場脇のベンチに腰を下ろしていた。

周りでは子供達が無邪気に遊び回っている。それをぼんやり眺めていると、ふと懐かしい気分になった。つい先日までは、ここですとと同じように座っていたはずなのに　　まるでずっと昔のこのように感じられる。

そういえば、あの日もこれくらい暑かった気がする。灼熱を帯びた恒星の光が、真上からギラギラと　　。

ふと見上げた太陽があまりにも眩しくて、僕は目を細めた。一瞬、視界が白だけで埋め尽くされる。

しかし次の瞬間、不意にその白が黒に変わった。誰かが後ろから僕の目を覆い隠したのだ。突然のことに僕は思わず声を上げ、跳ねるようにしてベンチから立ち上がった。

「へへっつ。びっくりした、ゆーき？」

背中からの聞き覚えのある声　　ハッと振り返った僕は、目の前の少女の姿を確認するや否や口を開いた。

「お前……っ！？　　な、何で　　」

「いやあ、実は家の用事で最近遊べなかったんだ。ごめんね、ゆ

「き。遊んであげられなくて」

「ぼ、僕がお前と遊びたくて仕方がなかったみたいな言い方はやめろ！」

僕がその次の言葉を紡ぐよりも先に、彼女は明るく笑いながらこちらの疑問に答えてみせた。その屈託のない笑顔は、以前と何も変わっていない。それを見た瞬間、自分でも気付かぬうちに、僕は心の中でホッと安堵の息を吐いていた。

「アハハ。じゃあ、せっかく久々に会えたんだから早速遊ぼうよ、ゆーき！」

「し、仕方ないな……。ところで、家の用事って何かあったのか？」

「ああ、実は明日で別の街に引っ越しちゃうんだ、あたし。その準備とか、お部屋の片付けで忙しかったんだよね」

「……え？」

数瞬、僕は彼女が言っていることを理解出来なかった。ただ雷に打たれたような衝撃だけが体を駆けるのみである。そんな僕に否応でも現実を突き付ける一言を、彼女は続けて放った。

「だから、ゆーきと遊べるのは今日で最後なんだ」

「そう、なのか……」

「うん。ほら、最後なんだからいっぱい遊ぼうよ！　まずはすべり台へゴーウ！」

そのまま僕は手を取られ、すべり台へと向けて走る少女に引っ張られていった。

それからずっと彼女が笑顔を絶やすことはなかった。遊んで、はしゃいで　むしろその笑みは益々輝きを増していく。

一方で、僕の心には黒いモヤのようなものが掛かっていた。どうしてかは分からないが、チクリとした痛みが頻りに胸を突いた。

そうして気が付いた時には、あんなにも高く昇っていた太陽はもう西の街並みに沈みかけていた。昼間とはまるで顔を変えた紅い光が、続々と家路につく子供達を照らしている。

そんな中で、少女は満足そうな笑顔を浮かべながら衣服に付いた

土を払い落していた。そしてニツコリと僕に笑いかけて、

「えへへっ、楽しかったね」

「あ、ああ……」

それは自分でも分かるほどに僕らしくない返事だった。彼女もそれを不思議に思ったのか少しだけ首を傾げたが、すぐさま先程までと同じ朗らかな笑顔に戻ると、僕の前にスツと手を差し出した。

刹那、それが何を示しているのか僕は分からなかった。彼女が握手を求めているのだと気が付いたのは、それから数秒経ってからだった。

僕はソツと、差し出されたその手を握った。すると少女はそれをギユツと握り返し、

「さよなら、ゆーき。元気でね」

そのまま静かに手を離し、彼女は僕に背を向けた。

夕陽に向かつて去っていくその背中では、僕の見ている前で次第に小さく　そして遠くなっていく。その距離が開く度に、僕の胸の内は何故だかグツと締め付けられていった。

この苦しみは一体何なんだ？　何かの病なのか？　激痛というわけではないが、まるで耐えられそうにない。こんな痛み　苦しみは、まるで初めてだ。

……いや、初めてではない。そうだ、以前の食卓に彼女の話が上がった時　彼女は友達なんかではないと否定した時も、似たような苦しみを感じたんだ。

友達……。

次の瞬間、僕はいつの間にか彼女を追いかけていた。そして驚いて振り向く彼女の腕を掴むと、僕は言葉を詰まらせながら尋ねた。

「僕は……僕達は、友達か？」

自分で言っただけなのに、まるで意味が分からなかった。どうしてこの僕が、いきなりこんなことを口にしたのか　自分の口が、体が、自分のものじゃないようだった。

それに対し、彼女はその質問にあっさりと答えた。

「もちろん。あたし達は友達だよ、ゆーき」

その答えを　笑顔を目にした途端に、僕を締め付けていた苦しみはスツとどこかへ消え去った。それが何故かは分からない。けど……その苦しみと入れ替わりに暖かいものが胸の奥底から滲み出てくるのを、僕は確かに実感していた。

「ゆーき、ほら」

少女は僕の目の前に、小指だけを立てた右手を差し出した。一体何かと僕がそれを見つめていると、

「指きり。あたし達が、ずっと友達だっていう証」

「証……」

僕は同じように右手の小指だけを立たせると、それを彼女の小指に引っかけた。

指きりげんまん。嘘ついたら針千本飲ます。

それは、僕が初めて結んだ約束の印だった。

青年は公園のベンチに座りながら、昔を懐かしむように目をつぶっていた。昔の自分　およそ子供らしいとは言えないが、まだ純粹だった自分　そして、名も忘れた少女のことを。

その時、青年はふと鼻腔に違和感を覚えた。目を開けて見てみると、そこには彼にとつて忌々しい存在が立っていた。

「あつ。あんた、悠美ちゃんの兄貴……」

向こうもこちらに気付いたようで、ビール缶を片手に持った女性は露骨に嫌そうな顔を青年に向けた。青年は軽く眉をひそめると、

「あの時の鬼か……」

ポツリと呟いて、静かにベンチから腰を上げた。そして一瞬だけ目の前の女性を威嚇するように睨みつける。

「いいか、僕がお前達を見逃しているのも今のうちだ。何かあったらすぐにでも被ってやる」

それだけを言うと、青年はそのままどこかへと去っていった。残された女性はまるで子供のように、去りゆく青年の背中に向かってベロを出す。

それから少しして青年が見えなくなると、女性は何かを考えるように顎に手を添えながら、先程まで青年が腰を落ち着かせていたベンチを見つめ出した。そしておもむろに、そのベンチに腰を落とす。「なんか懐かしいなあ、ここ……。あー……。そういえばあの男の子、何て名前だった？」

そう言って右手の小指を眺めながら、女性はゴクリとビールを呷った。

外伝 公園の褐色少女（後書き）

これで同棲喰人鬼は完結となります。

ここまで読んでくださった方、本当に、本当に！
ありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4640m/>

同棲喰人鬼

2011年3月4日01時40分発行